一一つ妙な事は有機體物質と云ふ標題の下に經濟學や人種學や社會學を置く事であるが、之は寧ろ心の客觀的產物の下に置くが善いかと思ふ。

第十二節　餘　論

本章を終るに當つて、注意すべき數點を指摘して、諸君の參考に供したいと思ふ。

(一)知識を滿足に分類することの困難な理由

(一)是迄述べた種々の分類表によつて、人類の知識の總ての部分を滿足に分類することの如何に六づかしいかゞ分る。其六づかしい理由は近來漸く氣が付いた、其は總ての分類の企圖が何か抽象的觀念に基いて居るといふ事である。分類する人の性質習慣境遇敎育は勿論、其他の特徵若くば關係が、識らず〳〵分類上に高調を呈はして、自己以外の特徵若くは關係が無視され易いのである。

(二)學者によつて

(二)多くの學者等が科學の分類をするには、其目的標準を異にして居ることに注意せねばならぬ。例へば、ベーコンのやうに人類の總ての知識を分類しやうとした者もあれば、ピアソンのやうに唯科學のみを分類し、又は最も狹い意味に於ける實驗科學のみを分類しやうとした者もあれば、又ホーンのやうに科學其物を分類することを目的とせずして、小兒又は學生に知識を授ける順序を目的として分類したものもある、といふやうな鹽梅で、決して同樣ではない。各自分類法の相違は、多くは其の目的及び趣味の差に因て起る。故に我々が分類表を研究し又は批評する時には、此點に着眼して誤らぬやうにせねばならぬと思ふ。

分類の目的標準が違ふ

(三)分類の順序に關する一般學者の要求

(三)本章に於いて述べた所の全體を總括して考へて見れば、凡ての分類は、事物に關する思想上の順序に從はすして事物其のものゝ順序に從はねばならぬといふ事は、學者一般の要求であることが分る。即ち此要求は、凡ての主觀的考察は不都合である排斥せねばならぬといふ事を意味するのであるが、併し其は客觀事物は全く心の產物であつて、心が自ら

この要求は凡て客觀事物が心の産物であることを忘れて居る

の内に客觀世界を構成するのである といふ事を忘れた要求である。所謂客觀世界の事物を類別する事は、其實心内の經驗を類別する事である。斯樣に客觀物は餘儀なく主觀的原理に支配されて居る。且つ類別せむとする動機又は其目的は全く主觀的であつて、從つて類別の方法や範圍や材料などは凡て心自身の決定するものである。種々の學者が所謂客觀的知識を種々に分類するのは、半ば彼等の分類の目的の相違に由り、半ば彼等の識れる世界即ち心中に構成した世界の相違に由る。例へば或る者は、知識の分類の中に形而上學や美術や宗教や論理學や數學などを入れるが、他の者は之を否定する。之を否定する學者に取つては、此等の學問は恰もないやうなものだ、其は彼等の興味の範圍外にあるからであつて、其の興味なるものは則ち心の働きである。

我々は客觀世界の存在を否定しない

斯くいへばとて、我々は客觀世界の存在を否定するのではない。唯我我が主張するのは、既に識られた世界、即ち類別の出來得る世界は、もはや主觀的作用の感化を受けたものであつて、類別するに於いて決してこれら主觀的の感化を脱することは出來ないといふ事である。

(四)知識の分類は客觀と主觀との兩面に亙らねばならぬ

(四)人類の知識を類別せむとする企ては、二つの大原理の下に行はるゝもので、我々は兩方を知り兩方に正當な位置を與へねばならぬ。其一は所謂客觀世界の性質と其秩序とを知らねばならぬ事で、其二は所謂主觀的世界(即ち心)の性質及び其興味とする所を知らねばならぬ事である。一方を棄てゝ一方のみを用ゐる事は到底不可能である。一方のみを用ゐむとする人、又用ゐむ事を他人に要求する人は、自心をも世界をも又世界と心との關係をも知らぬものである。

(五)知識分類上の原理

(五)これ迄の樣々の經驗に由て、現今の多くの學者は一般に、知識分類上の原理を承認して居る。即ち(一)單純より複雜に至り、(二)低きより高きに至り、(三)物理的現象に至り、(四)比較的獨立の物より依存の物に至り、(五)歷史的に先きの物より後の物に至り、(六)具體的の物よ

り抽象的に至る順序を取る。

(六)知識の範圍の相重なる事に就いて

(六)知識の分類を試みた人々は、なるべく範圍の相重ならないやうに注意した。或人は此事を以て一の根本的原理と認めて、若し同種の科學が兩三所に置かるゝやうな事があれば、其の分類法は失敗したものと考へた。思ふに、此事は或る程度まで正當であるが、絶對的に正當であると云ふ事は出來まい。其は吾人の經驗のよく示す所である。人間の經驗は、限られた科學を以て說明し又は一つの標題の下に充分に現はす事の出來ないほど複雜であり且つ豐富なるものである。諸ろの科學は抽象的なもので、たゞ其々の科學が必要と思ふ部分だけを經驗から抽き出して之を研究する。同じ經驗でも他の方面立場又は興味の上から研究する必要もあるので、他の科學が起る。斯くの如く二三又は四五の科學が同じ經驗を研究するので、餘儀なくその領分が相重なるやうになる。例へば、ホーンの分類法に於いては、人類學と人種學と社會學とは隨分共有の領分が見える。此の三學の領分の境界線は甚だ決定し難いので、學者間に色々異論がある。前にも言つたやうに、ホーンの類別表では、道德を以て意志の產物とし、倫理學を以て心の客觀的產物とする。此見解からいへば、宗敎は啻にArtsの下に置くのみならず、意志力の產物として意志の下に置かねばなるまい。事實を事實として完全に之を現はさむとせば、さうせざるを得ないと思ふ。神學も又之を心の客觀的產物の下に置く必要があらうと思はれる。

(七)宗敎の位置

(七)宗敎は人生の事柄の中非常に著しいもので、人生上の利害若くは興味を定むるに深大の關係がある。然るに所謂科學を重んずる思想家の中に、此事實を無視し、宗敎を以て科學に反した迷信であると考へ、科學の進步に從うて宗敎は段々廢れつゝあると思ふ者が少なからぬは、實に奇體な現象であると謂はねばならぬ。彼等は此見解を固執し、人類の知識を分類する時に宗敎又は神學に位置を與へない、或は與へても低い輕

い位置である。之によつて彼等が宗教に關する知識の甚だ乏しく興味の甚だ淺い事が分る。彼等は宗教や神學は人生に於いて大した役目をなして居ないと見做すが、然し事實に徴して見れば、決してさうでないのである。其位置は丁度何であるかといふ之に正當な位置を與ふべきものである。其位置は丁度何であるかといふ事は困難な問題であるが、吾人の見る所では、人類の幸福を來すことに就いて、眞正の宗教は科學及び哲學と比肩すべきものである。人類が科學なく哲學なくして進歩する事が出來ないならば、宗教なくしても又進歩しない。斯かる宗教は文明の三大根源の一つであると言つて差支ないと思ふ。されば宗教を人生に興味ある問題として、其本義を明かにし、知識分類の中何れの地位に置くべきかを研究せなければならぬ。それで次の章に於いて、聊か宗教の位置に就いて述べやうと思ふ。

(八)宗教の外に、人間生活の永久的要素たるものが多々あるが、美術及び道德は就中著大なるものである。故に知識の分類に於いては、美學と倫理學とに重要な地位を與へねばならぬ。其地位を明かにするためには、別に章を改めて述べる積りである。

第五章　宗　教

第一節　宗教、哲學、科學の調和問題

何處の國に於いても、常識的思想より進んで理論的思想則ち哲學的思想を起すやうになると、

哲學と宗教との衝突

舊來の宗教思想と衝突が始まる。是は西洋東洋を通じて歴史上に著しい事實である。此時に當つて、宗教家の多くが新思想を忌み嫌うて强硬なる反對の態度を取るのは亦止むを得ぬ、何となれば、哲學的でない宗教の立場から見ると、哲學又は科學は懐疑の雲を掻き起し、信仰の肝を抜き、宗教的行爲を荒す傾きがあるからである。所で、宗教的でない哲學又は科學の立場から見ると、宗教は自由を奪ひ、迷妄を强ひ、眞理に到るの道を塞ぎ、人間の進歩を阻害するものゝやうに思はれる。是れまた止むを得ない點なきにしもあらずである。

哲學科學宗教の對立

この衝突は幾千年間引續いたのであるが、未だ曾て一方の全勝を見たことはない。今日に至るまで、宗教が大多數の人心を支配して居ると共に、哲學も中々に拔くべからざる勢力を有して居り、又近代に起つた所の科學が非常なる權能を揮つて居つて、三者各々己が握れる眞理を以て最上のものと確信して居るやうな次第である。科學と宗教との永職の結果として宗教の全滅近きにありといふ言葉は、吾人が科學者の口から屢聞く所であるが、事實は容易にそんな景色を現はさない。

調和說

茲にこの衝突を調和せんとする一派の人々がある。其人々の見解によれば、宗教も哲學も科學も共に其々獨得の眞理がある、人間の眞福を完ふするには三者の一致協同が必要である、三者の間に衝突があるといふ所以は、各自が自他の眞趣意眞目的を誤解し、さうして時々極端なことをやるからである、三者何れか一方のみが眞理の全體を握つて居るのでないから、一方のみでは不完全である、若し我々が三者の領分と其特有の眞理とを明かにするならば、曾に衝突が無くなるのみならず、調和統合の點を見出して、人生の圓滿なる福利を得るであらうと。

宗教に關する三種の主義

今日に於いては、宗教に就いて三種の主義があると言つて宜しい、即ち(一)極端なる宗教主義（ラヂカルレリジヨニズム）と(二)極端なる合理主義（ラシヨナリズム）と(三)合理的宗教主義（ラシヨナルレリヂヨニズム）又は宗教的合理主義（レリヂオスラシヨナリズム）とである。

科學哲學宗教の調和の成否に就いて

予は本章に於いて、宗教と哲學及び科學との衝突の歴史を述べる考はないので、唯第三の主義者が提供せむとする調和若くは綜合の性質を明かにしやうといふ考である。之が爲には、前に大體言つたやうに、科學哲學宗教其々の特有の領分と研究法とを明かにせねばならぬのであるが、然かも雖問題は丁度此處にある。如何にして其々の領分と研究法とを正確に定め得る乎、如何にして其々の權能を遺憾なく認容して而かも衝突の起らないやうにすることが出來る乎。比雖問の解決が着くまでは、衝突は必ず續く。三者共に人間自然の要求に應じて起り且つ繼續するものであるから、一つが他の二つを全く驅逐して全勝利を得るといふやうな事はあるまい。三者には其々侵すべからざる城塞がある。或人々は、三者の衝突がある所以は、其々の領分が

相重なるやうに見えるからである、而かも三者各々が人生の全體を支配する權利があると主張するからである、故に三者の調和といふことは不可能であるといふ。又或る人々は、三者の調和は可能である、調和が出來るまでは人間の本當の進歩福利は覺束ないといふ。私が以下に述べる所は、誠に粗末で且つ淺薄であるが、多少此の問題に就いて諸君の參考になることがあれば幸と思ふ。

宗教は人間の興味の最も古いものである

第二節　歴史上から見た宗教の一般的性質

宗教は人間が起した興味の最も古いものである。人間の歴史の幕が開き始めた時に、既に宗教の舞臺は現はれて、人生に非常なる重味を有するものとなつた。爾來、其舞臺の閉ぢられたことはなく、益々宗教は全生涯に關係するものと認められたのである。尤も少數の例外者はあるが、一般の人々に取つては確かにさうであつた。斯くて。宗教は啻に心靈上の信念に於けるのみならず、萬般の人事、例へば、行爲に於いて、儀式に於いて、制度に於いて、文學に於いて、音樂に於いて、諸ろの美術に於いて、種々の階級に於いて、多大の影響を及ぼすものとなつた。

古代に於ける宗教家の權能

古代に於いては祭司（プリースツ）の權能は軍人若くは王公の權能よりも寧ろ重かつた。軍人王公には興亡盛衰の變遷があつても、祭司の地位は珍らしくも永く保存された。彼は現世の利害にのみ關係を有するものであるが、此は啻に現世のみならず眼に見えない世界に永久の關係を有する者であつた。兎に角、宗教は人生の禍福を來たすに最も大切な要因であつたことは、歴史がよく示して居る。歴史上の事實から云へば、個人若くは民族若しくは國民の行動を支配する最も強い動機は宗教的信念であると謂はねばならぬ。實に宗教は國民又は民族を或は團結し或は分割する最大の勢力であつた。宗教的精神は献身的英豪をして仁義の爲に活動せしむる動機ともなり、また人をして殘忍酷薄の行爲を敢てせしむる動機ともなつた。時としては、甚しき非倫非道の習慣を起す本となつたことさへある。之が國民の自由と幸福と平和とを來たす場合もあれば、また屍山血

歴史に於ける宗教の勢力

宗教に對する態度の問題

雨の大戰爭を起し或は悽愴悲慘の大迫害を起す場合もあつた。宗教は文藝學業の進歩は固より、文明の諸ての方面に於いて、偉大なる創始貢献をなしたと同時に、文明の光を蔽遮して莫大の損害を與へたのである。

斯樣な歴史の事實を見ると、我々は如何に宗教を取扱ふべきであるかに就いて一寸惑ふ位である。宗教の眞性質は如何、人生に於ける宗教の正當なる地位如何、科學哲學その他人生の重要なる諸問題に對する宗教の關係果して如何、と熟考し見ると、宗教問題も中々面倒なものとなつて來る。近頃になつて始めて宗教を科學的に研究する者が起つたが、其は徒らな好奇心に驅られて仕始めたのではなくして、人間の歴史に於ける最も强大なる勢力を正當に説明せむとする誠意から起つたものである、と私は信ずる。所謂、宗教科學も宗教哲學も、人生の禍福に重大な影響を及ぼす宗教の本義眞質を明確に識らむとする目的を以て起つたものと私は思ふ。此外にモー一つの目的が陰に含まれてあると思ふのは＝一般の宗教學者は未だ明かに此點を言はないが＝宗教の本質を明かに識るといふに止まらずして、宗教を正當に支配しやうといふ事である。之を委しくいへば、文明の進歩を阻害する所の迷信を追放して、文明の進歩を助長する所の正信を保育し、斯くて、宗教をして人生の禍害とならしめずして、幸福の基とならしめやうといふ目的である。恰も普通の化學は普に知識其物を目的とせずして、其知識に由て或程度まで自然物を支配して人生の福利を獲ることを目的とするのと同じ類である。斯樣に宗教を有益な物とするには、宗教を合理的に正解し且つ之を正當に支配せねばならぬ。

科學者又は學者が宗教に對して執つた態度の可否

序でながら、茲に一言を加へて置きたいのは、科學者または哲學者が宗教に反對を試みたのは全く無理ではなかつたので、宗教を執る所の者に對して反省を促したといふことである。彼等が攻擊した宗教の中には、隨分迷信も誤謬も又時としては邪惡の分子さへも潜んで居つた、からして、彼等の反對攻擊は人間の進歩に對して輕からぬ功勞を致したものであると識らればならぬ。但し、彼等の中或者が極端に馳せて、宗教を全く人間界から驅逐しやうと試みたのは、

宗教徒の迷妄に優る迷妄であつて、其の無駄骨の折れたことは實に氣の毒の至り、其は畢竟人心の眞性質を識らず、歴史に於ける宗教の實績を辨へなかつた結果である。

第三節　宗教の哲學的及び科學的研究

この研究法の性質

前節に述べたやうに、宗教は人間が起した興味の最も古いものであり人間を動かした最も強い動機であるに拘はらず、宗教の哲學的若しくは科學的の研究は、漸く近來始まつたのである。と言つても、宗教に關する熱心な研究が近頃になつて始まつたといふ意味ではないので、唯今日の我々が尊重する所の研究法が始まつたといふ意味である。偖て、この哲學的科學的研究法は、有らゆる宗教の有らゆる事實を公平に精密に且つ合理的に調査することを以て主義とし、敢て宗教の性質如何を問はず、之を贊成するかしないかに關らず、その説く所の眞理であるや否やに由らず、又其が人間を福ひするか禍ひするかを論せず、事實を事實として有りのまゝに研究する。故に、公平の態度といふことは最も重んぜられ偏へに宗教的事實を目當てとして之を合理的に類別し、各宗教の進化の實相程度を明かにせむことを期するのである。

この研究法の種別

宗教歴史の性質

此の研究法に於いては、歴史的のものと、心理學的のものと、哲學的のものとがあつて、明かに之を種別する。所謂「宗教歴史」は、たゞ普通の意味の宗教史ばかりでなく、之に加へて、各宗教の客觀的現象の研究をもするものである、啻に信條や教理のみならず、宗教團體の組織及び性質や、儀式又は儀式の中に用ふる表象（シンボリズム）や、宗教的建築物や或は重もなる習慣などに至るまで、公平に精確に記述するものである。所謂「宗教心理學」は、宗教の主觀的方面を研究するもの、即ち客觀的現象を生み出した所の心理作用を研究するものであつて、其の知的情的及び意的の作用が宗教に於いて演ずる所の情態、又は希望恐怖信頼などの動機は、主もなる目的物である。所謂「宗教哲學」は、右の歴史的及び心理學的の研究を土

宗教心理學の性質

宗教哲學の性質

臺として、宗教其物の本義を尋ね、其が有する所の眞理を索め、且つ個の宗教がどれほど實際に合して居るか居ないかを明かにせむとするものである。

この研究法の功績

斯樣な風の研究法は、凡そ百年前に始まつたのであるが、實際盛んになつたのは二十年此方である。歲月は短いけれども、人間の宗教性に關し前代未曾有の識見を吾人に與へた其功績は、實に多大なりと謂はねばならぬ。其功績に依て、吾人は前代の人々が他宗教に對して抱いたやうな嫌惡若くは恐怖の態度を取らず、諸ての宗教に對し‖甚だ劣等な宗教に對しても‖敬重の好意を以て、其中に在る眞理を求むるやうになつた。昔は、熱心な宗教家といへば異教に對して激烈なる反對攻擊をなすが常であつたが、今日に於いてはさうでなくして、公平に穩當に儒教や印度教や其他種々なる宗教を研究して、深き興味と同情とを現はしつゝある基督教者は多くある。而して、其等の宗教を奉ずる一般の信徒よりも、却つて其等の宗教の意義を了解して居る者も、亦少なからぬことである。

宗教の科學的研究は宗教心を失はしめるやに就いて

或人は、科學的に宗教を研究すれば宗教心を失ふ恐れがあると言つて之を忌むけれども、併し今日の比較宗教學者の經驗に徴して見れば、強ちさうではない。勿論、科學的研究は遍頗で迷信的な信仰を破壞する、けれども其代りに、諸ての宗教の基礎である永久的の眞理をヨリ明かに了解しヨリ強く把持する所の信念を與へる。

近代の宗教研究の暗示

近代の宗教研究は、吾人に各宗教の發達すべき方向を教へ、此方向に進んでゆけば、今日の偉大なる宗教は段々と一致和合して、終には唯一の一般的大宗教を起し得ることを指示する（勿論之は團體の上の合一なる意味するのではなくして眞理の上の合一なる意味する）。

公平の態度が有名な學者の間に現はれて來た

宗教家と非宗教家との見解が異つて互に論爭した結果、科學的若くは哲學的に宗教を研究することが始まつた。其が爲に、宗教に關する觀念が段々に變つて來て、寛容の精神と公平の態度とが學者の間に現はるゝやうになつた。

宗教の科學的及び

ヘルデルを始め（其主もなる著書は一七八四年より七年までの間に出た。）レッシング（一七

哲學的研究の先導者

八〇年其名著出づ）、ヘーゲル（一八二一年から一八三一年までの間に）、マグス、ミュラー（一八二三年―一九〇〇年）、ダブリ、ウ、アール、スミス（一八四六年―一八九四年）、レナン（一八二三年―一八九二年）、レビール（一八二六年―死年不明）、トーイ（一八三六年―一九〇九年）、などは、是が先導者の主もなるものであるが、彼等の骨折によりて、教育ある人々の宗教觀が大いに變化し、宗教に對して公正愼重の態度を取らねばならぬ事が解つて來た。

古代人の宗教觀は混沌たるものであつた

第四節　科學の起らない前の宗教性質觀

古代のエヂプト人やペルシヤ人や印度人などに對して、宗教の性質は何であるかとか、又國の異なるに從うて宗教の性質が異なる理由如何とかいふ問を出したならば、其問の意味さへ分らずして、唯驚異の念を起すに過ぎないであらう。何となれば、第一宗教といふ意味の言葉がなかつた。各國民の宗教的生活は頗る盛んであつて非常に眞面目で熱心であつたに拘らず、其生活を表はす一般的の言語がなかつた、從つて宗教上の概念がなかつた。加之、當時の人々は、各國の宗教が其々性質を異にして居るのを當然の事とした、恰も各國の言語が異なり習慣が異なり王長が異なる如く、其神も異なり、これに祭事する方法も亦異なるのは、當然の事として敢て怪しまなかつたのである。で斯樣に、他宗教の存立も、他の神々の存在も、其の有るがまに有るものと承認して居たから、之が思想上の問題とならなかつたのは自然の事と謂はればならぬ。是故に古代の人は、宗教の本質とか意義とか、個人若くば同族若くば國家に對する宗教の位置などに就いては、別段考へることなく、唯自分の信ずる宗教に對して熱心であるばかりで、他教に對しては全く無頓着であつた。

預言者等が他宗教に對する態度

然るに耶蘇前八世紀頃のヘブライの預言者等は、異教に對して反對の態度を取り始めた。彼等はエホバを以て天地萬物の造主となし萬民の崇拜すべき唯一の神となして、他の神と稱へらるゝ者共は、其實、神ではなくして人間の作つたものであると考へた。併し、彼等に取つて直接緊要の問題となつたものは、宗教の哲學的說明でもなく、又他の諸ろの宗教の起源でもなくして、唯如何にして自國民をして偶像崇拜より離れてエホバ神に信從せしむることが出來るかといふことであつた。彼等預言者の間には宗教といふ名辭はなかつたが、宗教の實はあつた、彼等は總ての人間が神に依存すること、また人間の眞幸福は神に信從するに在ることを堅く信じて居つたのである。

プラトーン又はアリストテレースが宗教に對する態度

希臘のプラトーンとアリストテレースとは、異なる諸宗教を知つては居つたが、其等を研究し又は論擊することに就いて何等の興味を感じなかつたのである。彼等が神々に就いて爲した言說は、たゞ自國民が信ずる宗教を說明する積りに過ぎなかつたのである。紀元後百年頃になつて、希臘人又は羅馬人の態度

希臘の學者プルタークが始めて諸種の宗教を多少組織的に研究したけれども、當時教育ある一般の希臘人又は羅馬人は、凡ての宗教に對して全く無頓着であつた。紀元第一世紀から第五六世

紀までの間に、羅馬國に於て種々なる宗教があつて、相互に混合し又影響を及ぼして居つたが、基督教を除くの外は凡て相互に無頓着であつた。獨り基督教のみ嚴重に他宗教に反對して、彼等を凡て迷誤と見做し、自身等の信奉する天地萬有の主宰なる神と世界萬民の救主なるイエス、キリストとを以て、人間の崇拜し信賴すべき唯一のものとなし、他の神々を拜することを以て不義不敬の甚だしきものとなした。斯樣に基督教のみが他教に對して嚴格なる態度を執り、さうして又大王偉人などを神として拜することを否むだ爲に、獨り迫害を受けたのである。

基督教が他宗教に對する態度

基督教は歐羅巴に於いて盛んになつた時、他宗教に對する嚴格な態度は一般の風となつた。加之、斯教を傳播する爲には、政權兵力を借つても差支ない事と一般に考へた。固より、斯かる態度と方法とは決してイエスの教訓若くは精神に由て起つたものではないから、外から入つて來たものと謂はればならぬが、是は非常に基督教を害したものである。其は兎に角、第四五世紀以來、他宗教に對する基督教の態度は全く反對の一方に傾いて、異教を悉く惡魔の所產と見做し全く愚蒙なものと見做したのみならず、人に傳道して說服することが出來ない場合には、如何なる强硬手段を用ゐても强いて教會に引入れて差支ないと考へた。甚だしきは、傳道のために戰爭を起し殺伐を爲すことを以て神の御用を務むる事と考ふることさへあつた。詰り、「力は權利である」といふ非基督教思想が隨分斯教に入つて居つた。其のやうな思想からして、彼の十字軍は起り、彼の羅馬教會の宗教裁判（インクイジション）は始まつたのである。基督教の歷史に拭ふべからざる汚辱を止めたものは、斯かる似而非義心である。

基督教の極端なる態度

斯かる態度は宗教の性質に關する誤解に原因する

其は畢竟するに、宗教の性質に關する誤れる觀念に原因する。この誤れる觀念は、宗教改革が起つてもまだ去らなかつた頑固極まるもので、ルーテルと雖も、カルヴィンと雖も、其他當時の宗教界に於ける諸先生達と雖も、己が信ずる所を以て天授の唯一眞理のやうに考へ、啻に異宗教のみならず異宗派すらも何だか惡魔の產物であるやうに邪視したのである。プロテスタント教は一般に羅馬教を非基督教と見、羅馬教はプロテスタント教を悉く異端と見た。又プロテスタント教に於いても、甲の宗派は乙の宗派を誤解して鬪爭して居つたといふことは、實に馬鹿々々しい話であるが、事實であつた。寬宏の精神の始めて起つたのはプロテスタント宗派の間であつて、今から凡そ百年前である。尤も、今日に於いても此精神が一般にわたつて居るのではないが、然かし隨分盛んになりつゝ非常な變化を來たしつゝある。現に今日新教の多くは羅馬教に對して比較的に寬大な態度を取つて居るが。羅馬教の方では相變らず嚴重な態度を保持して居る。

馬鹿らしい宗派心

右に大體述べたやうに、宗教の性質に就いて始めて起した考は、自宗教を眞とし他宗教を僞とする事と、眞宗教は眞の神を現はして神人の正當な關係を結ぶものであるといふ事とであるが。さて、この眞の神に關する知識は理性と天啓との二樣の方法に依て得られる、といふ事は中世紀のスコラ學者が考へ出した所である。この考に基いて、宗教を自然的と天啓的との二つの部類に分ける事となつた。即ち、人間の理性は自然界を研究して、或程度までは眞の神を識る、例へば、神の存在とか神の大能とか神の智慧といふやうな事を識ることが出來るが、然し、

スコラ學者の宗教性質觀

之を以て悉く神を識ることは出來ないから、其の足らぬ所を補ふために、神は預言者等を世に遣はして、種々なる新知識を人間に授け給うた、其に依て、神の三位一體的の性質とか、救の道とか、來世の審判とか、罪人の永久刑罰とか又はイエスの贖罪の意義とかを識り得る事となつた。と斯ういふ風に、中世紀頃の神學は宗教の性質と起源とに就いて考へたのである。此樣な考は、第十八世紀の終りまでズット引續いて餘り變る事はなかつた。この宗教觀に基いて、人生に於ける宗教の地位は決定され、宗教を神聖視すると同時に他の人事を俗視するやうになつたのである。それで、宗教上の知識は天與のものであるから完全にして且つ權威あり、其知識を現示する書物も又教會と共に神聖にして全き權能を有す、と考へた。普通の科學哲學などはよく誤謬に陷る、若し宗教が是等の學問と衝突する場合には、無論その勝利は宗教に歸すべきものであると思つた。

宗教的知識と科學的知識との相違に就いて

それで、宗教的知識と科學的知識とは、其起る方法も異なりまた其の領分も異なつて居る。前者は天啓に由つて與へられ、信仰に依て承認せられ、而して神と來世とに關係するものであるが、後者は理性に由て得られ、論理に依て承認せられ、而してたゞ現世に關係するものである、哲學が宗教的知識を證明する時は、權威的に教ふる宗教教理が合理のものであるといふことを證明するだけであつて、其反對は出來ない。斯樣に各その研究の仕方を異にするので、餘儀なく衝突が起つたのである。

懷疑論は、スコラ時代に於いても多少起つたが、第十七世紀までは格別の勢力はなかつた。

懷疑論が起つて來た

然かし、第十七世紀になつて、新らしい發見が續々起つて、科學的精神が盛んになり、新知識が大いに增加した爲に、宗教の束縛を感ずること甚だしくなり、從つて懷疑的の思想が勃興し、第十八世紀の中ば頃になつては、教育ある人は大方、超自然的宗教を否定して了つた。茲に於いて、舊來の宗教に就いて新らしい說を唱へる者が起るやうになつた。先づ始めにジョン、トーランドは、其の名著『基督教は神秘教にあらず』に於いて、野蠻人の宗教の外凡ての宗教は僧徒の作物である、いはゆる奇蹟とか天啓とかいふものは、皆彼等の僞作である、教會の總ての儀式若くは教理はたゞ愚民を支配する方便である、畢竟自己の地位を高むる爲めの道具である、と論斷した。斯樣な宗教觀を稱して、Preist-craft theory of Religion（僧徒の僞作として の宗教觀）といふが、北歐に於いては、殆んど百年の永い間、此の宗教觀が教育のある人士の間に行はれた。彼等は、天啓や奇蹟や超自然的の分子を一切棄てたが、然かし無神論者ではなくして自然宗教を唱へたのである。即ち理性は自然界を研究して神に關する種々の事を知ることが出來る、神に關する教理は理性が發見するのであつて悉く道理に合ひ神秘的の分子は少しもない、天啓宗教と謂はるるもの〻中で自然宗教に合はない部分は僧侶の僞作に由るものだから迷信として棄つべき者である、と論じたのである。斯くの如く、第十八世紀の末頃には、宗教家に對して正反對の思想を抱く者が多くあつたが、双方に於いて共通せる一事があつた、といふのは、双方共に獨斷的であつたことである。一方が宗教を以て天來のものとし、人間に最も深奥なる知識と識見とを與へるものとするに反して他の一方は宗教を以て地より起るものとし、人の心眼を暗ませて無

宗教を僧徒の僞作物と觀た

反宗教的思想が多く起つた

限の迷妄に陷れるものとした。一方が天哲宗教を以て無上の幸福を與ふるものとするに反して、他の一方は之を以て總ての損害を來たすものとした、而かも、斯くの如くなしたのは、共に科學的でなくして獨斷的であつたと謂はればならぬ。

第五節　宗教の定義並に宗教に關する心理的考察

「レリヂヨン」といふ言葉の原意に就いてシセロの說

抑も英語の Religion といふ言葉は、羅甸語の Religio から出たのであるが、この Religio といふ語の由來が明かでなかつたので、此語の解義に就いて羅馬人の間にも異見があつた。シセロ（紀元前一〇六年に生れ四三年に死す）は、之を Re-legere から出た言葉であるとした。この Re は「再」（リ）を意味し、legere は「讀む」（レゲーレ）を意味する、即ち宗教は事物を再讀し沈思默考する事から得る所の經驗であると解した。然るに、伊太利のラクタンシャス（紀元二八〇年に生れ三四〇年に死す。此時代はコンスタンチン大帝が基督教に歸依して斯教が隆盛を極めた時であつた）は Religion を Re-ligare から出た言葉であるとした。其意味は To bind together again 即ち再び神と關係を結び着けるといふ事である。所で、今から四五十年前に學者はラクタンシャスの說を棄てゝシセロの說を採つた。現今の學者の意見によると、語源からいへばシセロの說が善く、意味からいへばラクタンシャスの說が善いといふことである。

ラクタンシャスの說

現今の學者の意見

（ラクタンシャスのは言語學的解釋でなくして、意義的解釋（即ち當時の基督教の思想と經驗とから推定したものである）。併しながら、宗教の眞性質は宗教の語原から論じても分らない。舊新約聖書に於いては、宗教といふものゝ定義もなく又其の言葉はないのである。

近代の宗教學者の努力

近代の宗教學者は、宗教を廣く研究して、人間の宗教的性質の根本的特徵を知り、宗教に妥當な定義を下さむとして大いに努めた。彼等は、人間は性質上宗教的な者であるといふ事と、又種々の宗教のある所以は唯宗教性に種々の作用があるに由るといふ事とに就いて、互に見解を同ふして居るが、宗教の心理的作用の中で何れの要素に重きを置かねばならぬかといふ點に於いて、意見を異にして居る。之を四種に分けて、(一)知性中心論者と(二)情性中心論者と(三)意志性中心論者と(四)全人格論者とに

宗教の心理的要素の中何れに重きを置くべきかの問題

する。が便利であらうと思ふ。

(一)知性中心論者の見解　(一)知性中心論者の意見によれば、宗教の本質は宇宙に關して究竟的說明を要求する知性の働きに在るといふ。例へば、スペンサーは宗教を定義して"Religion is the recognition of a mystry pressing for interpretation"(宗教は解釋所得の神秘が存在するものであると承認する)といひ、又"Religion is a belief in superhuman belief"(人間以上の存在者を信ずる信)と言ひ(マスク、ミュラーやロマニズムなどは斯樣な定義を執る)。佛蘭西のグヨー(Guyou)は、"Religion is the outcome of an effort to explain all things, physical, metaphysical and moral, by analogies drawn from human society imaginatively and symbolically considered"(社會教は人間の上觀の念高を事以て想明像せ的も表徵す的るに努有力形の上結無果形で上及び道)と言ふ。此等は宗教を智的に見た見解である。

(二)情性中心論者の見解　(二)情性中心論者は、宗教の本質は宇宙の究極者に對する情性の働きに在るとする。例へば、シュライェルマハルが"Religion is neither a knowing nor a doing but a feeling. It is feeling of absolute dependence on God"(宗教は知でも行でもなく絕對的感情である)と言ひ。リッチルが"Religion is that pure and reverential disposition or frame of mind we call piety"(深に敬しは て我崇々敬が な敬性虔と向と氣稱分す るい所ふの純)と言ひ。チーラは"The esense of piety and therfore the essense of religion is adoration"(敬で宗虔教の本質であり從つふの事は で敬あ仰るさい)と言ひ。フライデレルが"Of couse knowing and willing are in religion, but not as ends in themselves; they are subordinate to feeling which is the real center of religious consciousness"(勿論宗知教る事目的意志なするも事のでは宗教なくの中でに感あ情るにが、從屬こすのるこつもはでそれ自身感に情於中心そた宗教る意識での眞あるの)と言つた如きは、則ち情性を中心とした見解である。

(三)意志中心論者の見解　(三)意志中心論者は、宗教の本質は意志的作用の中に存するものであつて、宗教は必ず何が實際上の福利を求むるもの、何かの行爲に現はるゝものであるとする。ジェー、ジー、フレーザーが"Religion is a propitiation of reconciliation of powers superior to man which are believed to direct and control the course of nature and of human life"(宗教は、人間自然以上界の力人間界者をに支配する和者であ信ど)と言ひ。エザバチエーが"Religion is a commerce, a concious and willed relation into which the soul in

distress enters with the mysterious power on whch it feels that it and its destiny depend"（宗教は懼める心靈が自己の存在及び運命の依存する力であると信ずる所の神秘力と交通してこれと意識的及び意志的の關係を結ぶことである）と言ひ。教授ジエームスが"Religion consist in the belief that there is an unseen order and that our supreme good lies in harmoniousry adjusting ourselves thereto"（宗教の本質は、無形の秩序のあることを信じ、そして自己を其秩序に調和せしむる事に於いて最上の幸福があることを信ずる所に在る）と言ひ。カントが"Religion is the recognition of all our duties as if they were divine commandments"（宗教は吾人の總ての義務を神の命令と見做すことである）と言ひ。フイヒテが"Morality and Religion are absolutely one, for they are a grasping of the supersensions（道德も宗教も共に感覺以上の世界を握る事であるから絶對的に一つのものである）と言ひ。フイヒテの弟ヤンガー、フィヒテが"Religion is concious morality"（宗教は意識的の道德である）であると言つた如きは、意志中心論的の見解である。

此れ迄多くの學者が下した宗教の定義を大體に分類すると、大抵右の三種となるが、近年モー一つの種類則ち全人格論の立場から下す定義が現はれた。

（四）全人格論者の見解

（四）全人格論者の見解によれば、宗教は知情意三性の不斷の働きに由つて起るものであつて、決して一性のみの働きに由て起るものではない。

この學派（まだ一定の名稱を取つて居らぬがIntegerと思ふしからうと）は、宗教の研究に近代の進歩した心理學を應用して立論する、即ち人間の意識性は不可分の統一であつて、總ての活動及び狀態に於いては、人格の全體が働くのである。唯考へ唯感じ唯意志するといふことはない、この三種の作用は斷えずあるのだけれども、意識が其の或る一方に集中するので、他の方の作用があるといふ事に比較的に氣が付かない迄である、と主張する。此の主張は比較的に意志中心論に緣が近い、其譯は三種の作用の中で意志は其の主たるものであるからである。蓋し、意識的生活は必ず方向的であり目的的であるが、さうすると意志は其主となる、注意といふとも又何かの福利を得るために働くといふことも意志的作用である。斯樣な說はロイバ（Leuba は今シカゴの牧師となつて居る）又はジヤストロー（Jastrow）等の唱へて居るものである

が、私は未だ彼等が宗教に就いて是れといふ定義を下したことを見ない。然し其說を簡單に言つて見れば "Religion is concious activity seeking some benefit from divine beings conserning which and whom it thinks and feels" (宗教は人間以上の者又其者から來る所の福利を得むとして考へ且つ感じ且つ行ふ所の意識的活動である)となるであらうと思ふ。則ち知情意三性の働きが其中に含んで居ることになる。

宗教に就いて見解が種々異なる理由

以上大畧述べたやうに、宗教に就いて學者の見解は種々あつて一致して居らぬが、其は何故であるかといふと、是には主もなる二つの理由があるやうに思ふ。一は、宗教的現象が種々樣々である事で(諸て宗教定義に合應する所の宗教的現象がある譯である)一は學者自身の氣質が相異なる事である(各自己の氣質に適應する所に趣味を感じて相應の定義を下す)。故に彼等が下す所の定義の缺點は、其主張する所に在らずして、寧ろ其見落す所に在るばかりである。

第六節　內容から觀た宗教の性質

宗教の內容を研究する必要

理性上の內容

近代の科學者の大多數は、宗教の心理的要素及び其の發達の過程(プロセッス)に就いて淺からぬ興味を起した代りに、宗教の內容(及び價値)に關する注意が行屆かなかつたやうに思はれるが、注意深き而かも公平な學者は、此の偏頗な誤謬に陷らないやうにして、前者に興味を感ずると共に後者に重きを置く、蓋は宗教の宗教たる所は主として其內容に存するからである。

(一)先づ理性上の內容からいふと。宗教は究竟的實在者又は絕對的眞理に對する熱實なる欲求の表現である。而かも之は啻に宇宙萬有を解釋せんとする欲求ではなくして(これのみであるならば哲學と別に攢む所はない)その實在者なり眞理なりと密着の關係を結んで之に依て實際上の幸福を得んとするの欲求である。勿論劣等な宗教信者に於いては、其知力の程度に應じて實在者若くは眞理に對する觀念が甚だ不完全であるが、知力が進めば進む程其觀念が高尙になり、從つてその對象(實在者若くは眞理)に對する態度も高尙になり、又宗教に依て得んとする幸福の性質も高尙になる。

情性上の內容

(二)次に情性上の內容に就いていへば。一時代の宗教に於ける感情の內容は其時代の理性の內容に聯伴するものであつて、萬有の究竟的實在者が多くあると觀じ又其が威嚴一遍の多くの惡靈若くは善靈と觀ずる時は、主もに恐怖若くは畏敬の感情であるが、觀念が進んで來て、その實在者を仁愛聖善の天父と觀ずるやうになると、渴仰敬愛の感情となる。尙ほ宗教的感情には美的方面があつて、音樂や繪畫や建築や文學などに依て表現せられる(此等の藝術が宗教的感情に由て刺戟せられて發達した事は歷史上著しい事である)。又神と靈交し合一するといふ一方面があつて、其形式には種々優劣の差があるが、大體に於いて神秘的である。

意性上の內容

(三)次は意性上の內容であるが。先づ幼稚で單純な宗教に於いては、神の心を喜ばす要法として又信神者の宗教心を喚起し養成する良法として、供物犧牲又は儀式などを重んずる。之は數千年來連續して行はれた方法があるが其方法の樣式は色々に變化した、其變化の次第を現はすことが則ち宗教の外形的歷史の大部分となつて居る譯である。所が、ヘブル人の宗教は古代に在つて珍らしくも道德的に發達したのであつて、彼等は神を唯一の道德的人格者と觀じ、彼れの聖意に從うて善德を行はなければ一切の禮儀は無益であると考へた(斯樣な宗教なれば今日の宗教學者エシカルセンシイズムは稱して道德的一神教といふ)之はイエス前凡そ八世紀頃から盛んになつた觀念であつて、イエスに至つて最高潮に上ぼつたのである。それで純正の基督教に於ては、道德を以て宗教の最大要素となし、神に對し良心に對して恥ずる所なき精神と行爲とを最も重んずる。たとひ知識上感情上若くは儀式上缺陷がなくとも、神に對する孝道と人に對する仁道とを忘れるならば、決して眞正の基督信者とは認めない。今日西洋に於いて最も元氣善く活動し發達しつゝある基督教は、此の倫理的基督教である。斯教は常に主張して曰く、汝神に喜ばるゝ愛子とならんと欲はゞ、善良なる國民となり親子となり夫婦となり友人となり、凡ての倫理的關係に於いて仁愛と公義と淸潔と誠實

とを重んせざる可らず、加之惡人にも日を照らし雨を降らし給ふ博愛の天父に倣うて『汝等の敵をも愛み汝等を詛ふ者をも祝し汝等を憎む者をも善視し虐遇迫害もの〻爲にも祈禱せざる可らず』と。斯くの如き宗教の感化によつて、今日世界に於ける宗教觀は段々向上し、凡て高尙なる宗教は其行爲の上よりすれば、全く道德的でなければならぬといふ事に略ぼ一致して來た。

宗教は統一體のものである

＊　＊　＊　＊　＊　＊

右のやうに內容を區別していつても、宗教は此等の諸要素を併合して始めて起るものであると思ふてはならぬ。宗教は統一した一體のものであつて、其一體の內に種々の方面がある、而して其種々の方面の發達の模樣によつて諸宗教の大體の性質が其々違つて來るのである。要するに、宗教は人間が或る幸福を得るために全性全心を以て崇拜の對象に對する態度である。其の求むる幸福は劣等な形式に於いては物質的肉體的利慾的また現世的であるが、高尙な形式に於いては心靈的道德的また永遠的である。最も高尙な所に進んでは、神と合一する事に由て己が品格を神化する事である。神と偕に宇宙の眞善美を共有して、神の子の如き豐富清美なる生活をする事を以て最大幸福とするのである。

高尙な宗教

宗教の心理的性質に關する第四學派の見解

そこで一歩を進めて宗教の心理的性質を研究するには、宗教の主もなる內容を見る必要があるが、此處には比較的に不完全な第一第二第三の學派よりも、比較的に完全な第四學派の意見だけを少しく述べることにしやう。この第四學派の意見によれば、宗教は知情意の三つの作用に依て成立つものであるが、この三つの作用を惹き起すものは實際の生活である。蓋し、人間が實際の生活に於いて多くの困難と鬪つて居る中に、人間以上の力を有する者に依存せる事を感ずる。此の感じに由て種々の神觀を起す、さうして其神觀に應じて神の祐助を得るに適當と思ふ行動を取る。所で、其神觀は知性の發達につれて進んで來て、神の力の範圍

に關し又神の品格上の性質に關する思想が變つて來ると、從つて自己と神との關係に就いての考も變つて來る。一方に於いては、人間に就いての觀念も進んで來て、神人の間の類似點を認めるやうになる。人間には未發の能力が潜んで居る事を識つて人性の價値を認めると、人間は變遷常なき浮世の與ふることの出來ない高貴なる福利を取るべき運命を有するといふ信仰が起る。斯樣な次第で、宗教は、消極的には心身の不完全より起る害惡から救はれたいといふ願望から起り、積極的にはヨリ高き心靈的な者と交通する事に由て自我の實現を完ふしたいといふ願望から起る。詰り宗教は、神の助けに依て救濟と幸福とを得ることが出來るといふ信念の發現である。宗教を奉ずる者は、宗教の中に人生の意味と目的とを求むべく又宗教に依て之を得べしと信ずる。宗教は單に心内の事に止る主觀的のものに非ずして、客觀的の驗證がある、例へば、神は人間の祈禱に應へ給ふ、神は自己の意思と經綸と品格とを人間に顯はし給

宗教の起因

高尚なる宗教

人性の高貴なる發現

ふ、神は敬虔誠實の人と靈交し給ふ、といふやうな事に就いて堅く信ずる。高尚なる宗教に於いては、神人の靈交を以て最高福とする、即ち神の最大恩惠は物質的のものにあらずして心靈的のものである、物を與へらるゝよりも神それ自身を與へらるゝが無上の幸福であると信ずる。

人間又は人間が奉ずる宗教が、此處まで進んで來ると中々高尚なものである。人間が自己の力の有限にして不完全な事を強く感ずるに拘はらず、無限完全な宇宙の究竟者と密接な關係を結ばむことを熱望するのは實に珍らしい事と謂はねばならぬ。單に之を熱望するのみならず、實際究竟者と交際することが出來ると確信し、神の現在即ち神に咫尺する信念を養ひ、神が我心の内に宿り給ふと自覺する。彼等はこの信仰と實驗とに據つて、究竟者の品格も又萬有の目的も大體解し得たと自信し、さうして其品格及び目的を自己の生活の上に實現し得るのみならず實現しつゝあると思ふて居る。斯く宇宙萬有の究竟者と自己との關係の親密な

るを信じ且つ感ずる所から、彼を天父と呼び我を其子と稱へる。且つ又、究竟者と自己との關係は短かい現世に止らず永遠に繼續して斷ゆることがないと信じ、現世はたゞ永遠の生涯の準備であつて、死後に於いては今生よりは尙ほ完全に尙ほ密接に神と交際し、神の聖意を識り、神の品格を慕ひ、益々神に同化せられむことを望むやうになる事を信ずる。斯の樣な宗教心を有する人は、儀式信條又は教理の如きものを以て宗教の眞髓とはせず、唯神の天父なることを信じ、神と親密にして而かも高潔な交際をなし、神の聖意を實行し、神の目的經綸の實現に與ふる事を以て最大要件とする。斯かる宗教觀は頗る高尙なるものであり、又斯かる宗教觀を有する人は其觀念を實現するほど益高尙な品格を造るのである。

右の四學派は宗教の位置に就いて必要な暗示を吾人に與へたものである

＊　＊　＊　＊　＊　＊

前節に述べた四つの學派は、宗教の種々なる要素に就いて吾人の注意を促がし、吾人をして宗教的現象の複雜な事と、宗教の目的は單一でなくして其々の宗教によつて異つて居る事とを了解せしめた、故にこの四學派は、吾人が宗教の正當な位置を定むるに必要な指導を與へたと言ふべきである。

知識類別に於いて宗教を何處に置くべき乎

然しながら、以上述べたやうに、宗教に關する學者の見解が種々に異つて居るとすれば、人間の知識を類別するに於いて宗教を何處に置くべきである乎。宗教を以て知識とするのと感情とするのとは、其位置が非常に違ふ。宗教は一種の知的説明であるとすれば、其は哲學又は形而上學の傍に置かればなるまい、が、若し哲學と衝突する場合には、どちらが主であるかを極めねばならぬ。宗教は根本的に感情のものであるとすれば、或人のやうに之を美術の中に入れるが正當かも知れぬ。又宗教は根本的に行爲に關するものであるとすれば、寧ろ倫理に類似するものではなからうか。若し又この三つの何れにも屬しないとすれば、全く獨立の位置を取らねばなるまいが、さすれば、知識類別表に於いて他のものよりも高い地位に置くが宜いか但しは低い地位に置くが宜いか。是等の事に關する意見は實に澤山で、其の判斷は中々容易なことではない。

予は今日に於て最も進歩した宗教思想のみを

私は茲に、凡ての時代と凡ての人種との經驗若くは思想を類別する考はないので、たゞ現代の比較的に最も深く考究した人々の現はした比較的に最も完全と見える思想のみを類別しやうといふ考である。喩へば、今日に於いて天文學といへば古代の不完全なものを取らずして現代

類別する考である

の進歩したものを取る如く、又今日に於いて化學といへば、昔の魔術的なものを差し措いて今の最も進歩したものを取る如く、今日最も進歩した宗教思想を類別しやうと思ふのである。いはゆる基督教の中にも時代の進歩に後れた種々の思想があるが、今は其等を取り入るゝの必要はない。

第七節　宗教の心理的作用（本節の終りにある表を參照せよ）

本章の結尾として、聊か宗教の心理的作用に就いて述べやうと思ふが、該節の大體は終りに表として諸君の一覽に供する考である。

宗教は科學又は哲學と同樣に、心の種々の働きの産物である。一方に於いては、客觀世界の刺戟を受け其刺戟に由つて種々の心理作用を起し、又一方に於ては、其の心理作用に由て宗教の種々なる客觀的現象を生ずるのである。

宗教の主觀的現象と客觀的現象

(一)　主觀的宗教と客觀的宗教との區別

宗教を研究するには、先づ第一に主觀的現象と客觀的現象との區別を明かに立てねばならぬ。主觀的宗教は凡て心の内に在るもので、宗教的の感情や思想や希望や渴仰や信仰などは其れである。が然かし客觀的宗教は此等の心的作用が外部に現はれた行爲であつて、詰り主觀的宗教の所産である。我々が宗教を研究するに方つて、直接に識る所のものは自心の外にたゝ客觀的現象のみであつて、これから推理して他人の心の狀態を略ぼ推察するのである。第二十世紀に生存する我々は、宗教の眞髓＝眞正の宗教の全體は主觀的であるといふ事を明白な眞理と思ふが、昔しの人はさうでなかつた。主觀客觀の區別を立てるといふやうな事は僅か近頃の事であつて、昔には或る少數の人の外は思ひも寄らなかつた事である。昔しの一般の人々また今の幼稚な人々は、宗教は全く客觀的の活動や儀式や制度や建築などであると心得、これらの客觀的事物を變ずるか又は滅ずるかすれば、宗教は腐敗し若くは退歩すると考へる。

此の樣に主觀的現象と客觀的現象とに區別する事に就いては、批評的思想のない所謂常識家も承認するが、客觀的事物の究極的性質に關する問題になると、批評的思想家と大分違つて來る。例へば、常識家は時間

や空間や又は物質や勢力などを以て、人又は神の心より離れて全く獨立する絶對的存在物と考へるが、批評家はさうは考へない。然かし此は認識論の問題として他の處で述べなければならぬ。

宗教的生活の起因

(二)宗教的の感情思想信仰を喚び起す現象及び自發の經驗

人間の初代から人間の宗教的生活を引起したものは自然界の現象と心の自發の經驗とである。其中或るものは恐怖心を起し、或るものは悲哀苦痛の感覺を生じ、或るものは喜悅希望の感情を來たすのであるが、人間は己れに強い刺戟を與へる其等の事物を了解し且つ之を支配せむことを欲し、己が厭ふ所のものを減退し己が好む所のものを增進するために努力した。

宗教的生活を引起す三種の現象

本節の主意に基き宗教の心理的作用の性質を細かに分析する前に、凡ての時代凡ての種族を通じて一般の人の宗教的生活を引起す所の普通の現象、若くは屢繰返へさるゝ現象に就いて研究するが適當であらうと思ふ。而して其現象を三種に分けて(一)自然界の事物と(二)自然界の物理的事件と(三)人間の心理性の自發的事件とにするが便利であらうと思ふ。此等三種の現象は、人間の追求なくして唯外部から起つて來て人間に接觸するのであるが、屢之を經驗するに從ひ、自身に接觸して來るものを支配することが出來るといふ事を發見し、益々之を支配せむと努力するに至る。

(一)自然界の事物

(一)偖て、先づ自然界の事物から述べやう。昔から幼稚な人間は、例外異常の物に注意して尋常普通の物に注意しないのが常であつた。異常の木石山河若くは動物を始めとし、進んでは日月星辰、尙ほ進んでは時間空間に對して不思議といふ感じを起し、從つて尊嚴又は恭敬の念を起し、而して此等の物を解釋する仕方に由て其物を神々として崇拜することもあつた。近代の人、殊に科學的教育を受けた人は、異形の木石などに由て餘り宗教的情念を起さないが、然かし自然界の廣大に感じ、日月星辰

又は時間空間の高妙に感じて、宗教的情念を起す者は少なからぬ。尤も物質的の開化につれ都會的の感化の增すに從ひ、人心は漸く自然界から遠ざかり、直接の感化を受けることが段々薄くなるが、併し今日に於いても、自然界の偉觀、例へば日出日沒の光景、星斗月輪の美妙、或は虹霓の懸る所、或は彗星の現はるゝ所、或は白雲の湧く所、或は大濤の漲る所などの狀態を見れば、大抵の人は一種崇高な宗教的感念を起す。親しく自然界に接する人は、餘り接しない人よりも比較的に宗教心が深いのは常である。

(二)自然界の物理的事件

(二)次に自然界の物理的事件に就いても、之を尋常の事と例外の事との二種に分け、又兩方を有害の事と有利の事との二つに分けることは便利であらう。前に言つたやうに、昔しの幼稚な人間は主もに例外の事に注意し尋常の事件は當然として珍らしく感じなかつた。例へば、突然に起る地震とか暴風とか流星とか疫病とかいふやうなことを神々の下す禍と考へ、稀有の豐作とか漁獲とか或は吉夢の應現とかいふやうな事を神々の惠みと感じ、之に由て宗教心を起した。所で、人間の經驗が廣くなると共に物事の解釋法が進步するに從ひ、これまで例外異常と觀た事件は法則外のものでなくして法則的のものであることを識つて來ると、以前に奇蹟と思うた事も宗教的感興を與へないやうになつた。然かし、宗教心のある人は、尋常普通な自然界の作用の中に宗教的意義のあることを發見し、其が總て神の奧妙なる働きに由つて起るものであることを悟識するやうになつた。例へば、日常實驗する萬物の生死に就き又は宇宙間に働く勢力に就いて神秘を感じ、自然界全體が整然たる法則によつて支配せらるゝ事を認めて、其全體が信用すべきものである事を感ずる時、宗教的情念を引起したのである。斯くの如くして、昔日の奇蹟的宗教心よりも、自然界の尋常の作用の刺戟に據て立つ所の自然的宗教心の方が、廣大にして又堅固なる基礎を有する事になつて居る。即ち近代の進步し

た宗教は、極く少數の人が經驗する非常に稀なる奇蹟的事件を土臺とせずして、寧ろ一般の人が經驗し得られる自然界の普通事件を土臺とするのである。

又初代の幼稚な人間に取つては、有害若くは有利な非常事件が特別に宗教的刺戟となつた。飢饉、洪水、大火、地震、暴風、破船、疫病などに就いては、今代の人でも恐怖心を起して知らず識らず天佑を求めるのだから況して無智な古代人は尙更である。其に反して、或は危險に瀕し或は飢餓に迫り或は大患に陷つた場合に不思議に助かるやうな事があると、自然に天佑を感ずる。昔から人間の多くの經驗の中で死といふ事は一般に最大の害惡と考へられて居るのであつて、此の死といふことは人事の常であるに拘はらず强く宗教的刺戟となるのは古今同樣である。或は月や星の美に感じて之を拜し、或は四季の變換に應じて受くる福利に就いて四季の神々を拜し、或は寒國に住む者が太陽の光と熱とに就いて深き感謝の念を起して之を拜するやうな事は、自然界の尋常作用の刺戟に基く。之に據て見ると、自然界の突然異常の出來事のみならず、日常普通の作用も又人間の宗教心を喚起した事は明かである。

(三)人間の心理的事件

(三)次に人間の心理的事件に就いても、普通の事件と異常の事件とに分けられる。初代の人間は、夢か現か幻かに於いて人間以上の靈物が働くと考へた。夢の中に他人の靈魂や祖先の魂魄や神々などが現はれたとか、目が醒めて居る間に幽靈が見えたとかいふ話は頗る多かつた。併し、人間の經驗知識の進歩に從うて、人間の心理性及び其作用が益々明かになり、斯樣な事は心理作用の狂亂によると解釋するに至つては、最早宗教的刺激の材料たる資格を失うたのである。そこで思慮の深い人又は宗教心の濃やかな人は、普通の健全な心理作用に心を傾け、研究を積むに從ひ益々その靈妙なる事を感じた。例へば知情意の働き方や記憶力や道德性や宗教性などの實に不思議なことを感じ、之が宗教的情感の刺戟とな

つた。

大昔から偉人英豪は、一般人の尊敬を受け、其死後に於いて崇拜せらるゝ、所謂先祖崇拜又は英雄崇拜といふことは世界に於いて普通な宗教的現象であるが、其は斯かる人物の中に人間以上の勢力が具はると信じ又は神々が顯現せるものと信ずるもので、詰り例外異常の心的作用に對する宗教心の發現である。其が道德上の進歩に伴うて、段々道德的に理想とすべきものを崇拜するやうになり、今日では昔しのやうな不道德な英雄又は神々を崇拜する者は稀になつて居る。多數の佛教徒が釋迦を崇拜するのは、彼れの品格が高尚にして理想的であるからである。又多數の基督教徒が基督を崇拜し殊に基督の顯はされた天父を崇拜するのも同樣である。

今日に於いても宗教心を喚起すべき事物がある

大體からいへば自然界若くは其作用又は心理的作用が宗教心を喚起するのは、其等の作用に對する解釋に由ることが多い、近代の科學者の解釋は古代の人の解釋と全く違ふから、昔に於いて宗教心を喚起した物事が今に於いて喚起しないのは、敢て怪しむに足らぬ。其代り、昔しに於いて少しも宗教心を喚起しなかつた物事が、今日に於いて大いに喚起する例が澤山ある。自然及び人生の不思議は今尚ほ多く殘つて居る。著し今日は最早吾人の宗教心を喚び起すべき事物は一切無くなつたと考へる人があるならば、其は頗る珍らしい人と謂はねばならぬ、其人は實際宗教のない人であるが、斯かる人が果して有るであらうか、其は甚だ疑はしい。

(三)主觀的宗教上の心理作用

客觀世界は斷えず人間の複雜な心理性に刺戟を與へて、種々の心理作用を喚び起す。本節の終りに添附してある表に於いては、此等の刺戟を矢の印しを以て示してある。

人間の心理的作用を普通に知情意の三種に分けるから、茲にも其樣に

知情意の作用は相關す

分けて說明するのが便利であらうと思ふ。勿論、この三種の作用は元來別々のものではなくして、相互に關聯し相互に刺戟を交換する（その相互の刺戟交換を矢の印を以てす）。此處で其の相關や刺戟交換の事を述べるのは私の本意ではないが、私の見る所では、情的作用は非常に知的作用に由る、其々の事物を解釋するに由て始めて之を取るべきか將た避くべきかを定めるのである。斯樣に情性の働きは知性の判斷に由るものであるが、然かし、情性は屢知性作用の完成を待たずして、知性を促進して不完全な解釋を下さしむる事がある。又之に反して、知性作用が情性作用に關係する事も中々多い、此等の關係問題の精密な所に入つては難問も亦少からぬ事であるが、今は其解釋を待たずして直ちに其大體を述べるに止めて置かねばならぬ。返すがへすも我々が心得て置かねばならぬ事は、知情意といふ別々の名稱を用ゐ又表に於いて之を別々に示す爲に其本質までも別々のものと思ふてはならぬ事である。本質に於いては實際一つのものであつて、唯之を說明する便宜上斯く分けたものと心得ねばならぬ。

（一）情的作用に就いて

（一）それで先づ情的作用からいふと、宗教の情的作用は二種に分ける事が出來る、甲は求めずして自發するもの、乙は求めて養成するものである。我々が生活上の經驗には自ら求めずして愉快に感ずるものと不愉快に感ずるものとがあるので、我々は之を取捨する、即ち一方は再び起らない樣に又起つても成るべく之を減縮するやうに力め、一方は再び起るやうに又益々之を增進するやうに力めるが、客觀的宗教は宇宙又は人生の或現象に就いてこの取捨的動作をする一種の制度である（故に宗教的感情は快と不快との二種に分ける事も出來る）。多くの人間は目に見えぬ或物に對して神秘の情又は尊敬の念を自然に起し之に賴て一種の幸福を得たといふ感じをしたので（最初は自ら求めずして此情念を起したのである）其情念の再現することを望んで之を養成する。或者は明かに神の存在を信じ、其神と交際し又は其神と一致する事に依て靈妙な能力又は平和を得たといふ經驗をなし、其經驗の再現增進を求める。

自然のものと養成のものとの比較

喚起さるる感情の

最初は或る一人がこの經驗をなし、段々その經驗が擴がつて客觀的宗教を生じた。或者は其の客觀的宗教の中の儀式とか祈禱とか魔術とか何かの方法で災禍を遁がれたと感じて、益々其方法を信用するやうになつた。要するに、最初の宗教的感情は自ら求めずして突然に起つたのであるが、後には其感情を呼び起すに適當なる事情を故らに求めて養成するに至つたのである。歴史を研究して見ると、養成された宗教的情念は自然に起つたものよりも遙かに優つて居る。自然に起つたものは非常例外の場合であるが、養成されると之が度々起るものとなり又多數の人の經驗し得るものとなる。其養成法として、或は禮拜默念修行讀經聽教などの習慣を繰り返へし靜かな境遇を撰び、或は社寺會堂又は山林などの淸らかなる場合を撰び、繰り返へし養ふ。このやうに養成された宗教的情念は頗る多く、之に比すれば自發的の情念は極めて少ない。

前にも言つたやうに、或事物に由て喚び起さるゝ感情の趣きは大いに

趣きは知的説明の如何に由る

其知的説明による。例へば、或る野蠻人は日蝕を見て、之は自分共の崇拜する神が惡鬼のために食はれて居るのであると信じて非常に恐れるが、終に太陽の勝利を見て欣喜雀躍する、さうして其所に自から一種の宗教的感情が湧いて出るのであるが、近代の天文學上の解釋を知つて居る人は、日蝕を見ても別段宗教的感情を起さない。飢饉地震疫病などを神の憤怒刑罰と解釋する時は、之に由て宗教心が非常に働いて來るが、此等の出來事を自然界の物理的機械的原因に由て來るものと解釋する時は、其感情が大いに違つて來る。宇宙間の事物及び作用を（普通に異常のものに限らず尋常のものも）神聖にして智慧と慈愛とに富み給ふ唯一の神の顯現及び活動と解釋する人の感情と、其を意志もなく目的もなき機械的盲目的の勢力の發現と解釋する人の感情とには、非常なる相違がある。

(二)知的作用に就いて

(二)次に知的作用である。人間に理性がある以上は、自己が生を寄する宇宙萬有を道理的に解釋せむとするは自然の欲求である。勿論、之を解

釋するには自身の經驗に據るの外はないから、經驗の範圍が狹くて知つて居る事柄の少ない時は、解釋法も餘儀なく不完全である。初代の人間の樣子を推想すると、彼等は一つの現象に對して自然に起つて來る觀念をば、直ちに確實なものと信じたやうに見える、例へば彼の地此の地に存在する惡魔とか神とか幽靈とか又は魔法とかいふ種々樣々な妄想を描き、矇昧なる自心の幻影に對して頻りに恐怖した。人間の歷史又は人間の生涯の中には、如何に無理無法な宇宙人生の暗示も直ちに之を正當と思つて信受する幼稚な時代もあるが、時代が進み又は年齡の進むにつれて經驗の範圍が廣くなつて來ると、舊說明法を棄てゝ新說明法を取る、哲學科學の進步は畢竟茲にあるのであるが、宗敎の進步も亦これと異ならない。宗敎思想の歷史は、人間が舊來の宗敎的觀念の誤謬缺點を發見すると同時に、ヨリ適當な觀念を發見した經驗の記述である。科學若くは哲學の歷史に於いて見る如く、宗敎史に於いても種々なる思想上の生存競爭があつて、比較的に適當なものが不適當なものに入り換はりつゝある、之を稱して宗敎の（若くは神學の）進化といふ（知的觀念若くは解釋が變つて來れば、從つて感情の變化も來たすのは自然の勢である）。

宗敎は二つの時代を經過して來た

私は此處で宗敎進化史の多くを語る考はないが、世界に在る進步した宗敎が二つの時代を經過して來たことに就いて一寸述べて置きたい。最初には凡ての民族の宗敎は殆んど同じものであつた、即ち精靈敎（アニミズム魂魄崇拜）と拜物敎（フエチシズム庶物崇拜）とであつて、何れも魔術的であつた。其時代には、死人の靈魂が活ける人に禍福を下す力があると信じ、又人間にならなかつた所の善靈若くは惡靈の存在をも信じた。其が經驗の廣くなるに從うて、其信仰又は觀念は事實を適當に解釋するに足らない事、殊に人間の高尙な倫理性に滿足を與ふるに足らない事を知り、其理を深く考へたので宗敎の進化を著しく促した。或は漸々に或は突然に宗敎改良者が現はれ、從來信仰せられた群小の神々又は不德の神々の代りに、廣大な能力を有し又

良善の德を有する神々を信ずるやうになり、尙ほ進んでは、萬有の裏面に存在し、總ての物質と心靈とを創造し且つ支配する所の神とか佛とか上帝とか絕對者とか若くは究竟的實在者とかいふ者を考へ出すやうになつた。其者に對する觀念は人種又は國民に由て、或は二元的或は汎神的或は一神的であつて、今や其優劣の試驗中である。今日存在する種々の宗教的宇宙觀の中で、何れが最も良く人間の理性と良心と及び實際上の要求に適合する乎といふ問題は、未だ充分に解決されて居ないのであつて、之は第二十世紀に至つて吾人が意識的にやり始めた一大討論である。向後百年間か五百年間か分らぬが、兎に角この問題は盛んに論究せられて、終には一つに歸するであらうと想はれる。

意的作用に就いて理は意のために働く

(三)次に意的作用に就いて少しく述べやう。人間の理的作用は情と意との兩作用の中間に立つものと普通に言はれてあるが、近代の進化學者の見解によれば、人間が有効に活動する手段(即ち意力を造る手段として)として段々養成されつゝ起つたものであるといふ。即ち人間は働くために理性を運用して思考するといふ見解である。而かも其働くといふのは、境遇を支配し生活狀態を改造して以て禍害を遁れ福利を得むがためである。詰り情性の滿足のために働くのである。人間はヨリ豐富なる生活を欲するから、今得て居る所のものを以て滿足しないで其の欲するものを要求する。それで、人間の理性及び意志が働く動機は情にあると言つて宜しい。人間の理性は實に奇妙な一種の機械であるが、この機械の發達しない動物や劣等な人間は、或る情が働くと理性の判斷を待たずして直ちに其れに應じて活動をする、併し心の發達した人は、情が働き出しても理性を以て其是非をたゝし、之を是認すれば情が要求する物を得る道を開き、又其働き方を定める。斯樣に情の活動を許否する働きをば普通に稱して意志の働きといふ。近代の心理學者の證明によれば、心理性のこの三方面(即ち知情意)は思想上分けることが出來るけれども、實際は一つのものである。

理は情のために働く

知情意は一つのものである

理は斷えず情と意との刺戟を受く

さうして心理性が發達するに從うて、其働き方は益々入り組んで來て、純粹に或る一方面が働くといふことはなく、常に三方面が相共に働く。之を三方面に分けるのは、人間の複雜なる心理性を解し易いやうに思考する便利法であつて、決して之を個々別々に考へてはならない。この三性が恰度如何なる關係を有つて居るか、一性が他性に恰度どれ程の影響を及ぼすかといふ問題は、心理學上實に興味あることであるが、今こゝで論究する暇がない。但し近代の心理學者が能く主張する點は、一寸こゝで諸君の耳に入れて置きたい。其は近頃まで學者の考へたやうに、理性が情性及び意性より離れて全く獨立で働き冷やかな理窟ばかりを追ひ求むるものではなくして、斷えず情と意との刺戟を受けつゝ思考の方向を定めるものである、といふ事である。少し深い問題の結論に至ると、或信念を要するが、其は矢張り情付きの思想である。昔しの學者等の考では、理性は人を支配する高尚なものであるけれども情は卑屈なもの全く排除すべきものであるといふ事であつた。それで眞面目で思想の深い人達が、事物の解釋に就いて正格な論理を用ゐるならば、必ず同じ結論に到ると考へたのであるが、今日になつては其考が多く事實に反することを語り、理性は大いに情と意との指圖によつて働くものである事が分つた。

心理性の最も深い部分は意志である

尙ほ近代の心理學者は、人間の心理性の最も深い部分は意志であつて、情と知とは比較的に表面的のものであるといふ事を主張する。意志は啻に人間の動作を決定するばかりでなく、心中の凡ての活動を決定するもので、心理性の土臺たるものである。情と知との全體の結果を總括するものは意であつて、人の本性は畢竟こゝに在る。人の思考する事柄は意志に據て定まる。客觀世界の事物の中何れに注意し何れを差し措くべきかといふ事は意志の決定する所である。又他人に對する凡の態度も意志が決定する。宗教上の決定に於いても、啻に情又は知の働きのみならず、

意志の働きも非常に大切なもので、或は一番大切なものではないかと近頃の學者は考へて居る、さればとて三性の對立を云爾するのは餘り面白くない。何となれば、一個の人間は一個の人格者であつて個々別々の者ではない、人格を分析すれば種々の要素があるけれども、其の凡ての要素が働いて一個の人間となつて居るのである。一個人が奉ずる宗教の中にもその凡ての要素は働いて居る。宗教は單に感情のみならず、思考のみならず、又活動のみならず、其等の全體を統合した一體のものである。

宗教は知情意の統合的作用である

(四)客觀的宗教

人間の主觀的生活は斷えず客觀的生活の上に表現されつゝあるが、宗教に於いても同じ事である。而してその主觀的生活の發達は客觀的生活の發達を來たすから、客觀的宗教の進化がある所以である。即ち崇拜の對象は勿論儀式や建築までに變化を及ぼすのであるが、其變化の方向又は程度は、知的進歩若くは文明上の進歩に伴ふ。其進歩を大體に於いて二つの階段に分けることは適當であらう。甲は人間の反省力の發達しない時代、乙は反省力が發達して從來の事物を批判し又は破壞し、組織的に建設し、而して自己生涯の全體を支配する所の高尚な時代である。本節の終尾に附してある表の中には、この二つの時代の主もなる現象を簡單に示してある。

進歩の二階段

こゝで諸君の注意を請ふべき點は、客觀的宗教は人心の內にある宗教性を刺激し又此性を養成する爲に非常に肝要なものであるといふ事である。例へば客觀的の祈禱は主觀的の祈禱心を助成する。此は單に宗教上の事に限らず、心理學上の一原理であつて、我々の生涯の萬事に應用されるものである。一二の例を擧げていへば、初代の人間の中或る獨りの者が弓矢を發明した所で、其者の主觀的思想に止まる間は、餘り完全な物は出來ず、又他の人も其製法に就いて考へないが、一たび客觀的に現はれて來ると、他人の思想を喚起し、其中優れた思想を客觀化する

客觀的宗教は主觀的宗教性を刺戟し養成するに肝要である

に至つて、弓矢は益々巧みになり又其數も益々多くなる。又或る人の愛子が大病に罹つた時、信奉する神佛に祈願を籠めて快癒するならば、其人が其祈願の効驗を信ずるのみならず、他人も其結果を實見して大いに祈禱心を惹起する。或は放心狀態（エクスタシー）に入つた者が將來の事を預言して其が珍らしく應現すると、益々放心狀態に入る術を研究する。近代睡眠術に於いて暗示と稱するものは、昔に於いて其理窟は分らなかつたけれども、宗教上實際に能く用ゐたものである。前に言つたやうに、最初の宗教は自然の事物又は作用又は心理性の自發的作用に因て起つたのであるが、一たび客觀的の宗教が起つて來ると大いに主觀的の理性と情性とを動かした、即ち客觀的宗教は主觀的宗教の增進する一大原因となつた。斯くして客觀主觀の兩方が斷えず激勵助長して兩方ながら段々進歩したのである。譬へば、大工が高樓の屋根に登るに、一段毎に梯子を上げて繼ぎ繼ぎ登つて行くやうなもので、主觀の宗教が客觀に現はれ其客觀の宗教が又主觀の宗教に現はれるといふ工合に、繼ぎ〳〵に進んで行つて際限ないのである（以上の説明を表に照らし覽るべし）。

科學又は哲學は永續する

第八節　宗教の永續

科學又は哲學が永久に存續することを疑ふ人はあるまい。人間の在らむ限り、人間が己れの理性に滿足を與へむと欲する限りは、必ず宇宙又は人生を組織的に研究し且つ精細深淵に解釋せむと力むるに相違ない。科學や哲學がなくなつたら、人間は直ちに昔しの野蠻に後戻りを始めるであらう。

科學哲學の進歩に從うて宗教は退歩すると考へる者がある

所で、その科學と哲學が進むほど宗教は退いて終に消滅するであらうと考へる者がある。宗教は幼稚時代の產物。弱者や愚者の玩弄品、たい知力意力の乏しい徒輩（やから）のみに依て維持されて居るものだから、文明の進歩に從つて衰頽を免かれざるものと主張する人は珍らしくない。宗教は

未開人や下等社會や婦人などには結構だが、教育ある民族階級又は個人に取つては無用であると考へて居る人は、今日に於いても未だ隨分あるやうだ。中には、科學と哲學とが一國民全體に普及するに至つては、宗教の入るべき餘地もなく又之を容るゝ必要もなくなると豫想する人もある。

斯かる考は誤つた宗教觀に基く

私思ふに、斯様な考は誤つた宗教觀に基く、宗教と迷信とを同一視する見解から起る。彼等は宗教を一見して直ちに弱者の所產であると斷定する。即ち幼稚な又薄弱な者は自然界の勢力若くは人間界の出來事に對して非理な恐怖心を起し、早速自力の頼むべからざるを感ずるので、人間以上の神々を想像してこれに佑助を求める、其處に所謂宗教なるものが生じたのだから宗教は凡て空なものである、其空なものを愚夫愚婦が一心眞と信じ込んで居る、其弱點に乘じて僧侶が眞らしく信神喚はりをするので漸く維持されて居るのである、併しながら、人智が進んで來て自然又は人生の各方面の眞理を識つて來ると、恐怖心がなくなり、是迄己れを脅かして居つた物どもを征服するから、宗教心を喚起する原因はなくなる、恰も惡夢が目の醒めると共に消えて了ふのと同樣になくなるであらうと、斯樣に考へる。第十八世紀及び第十九世紀の前半迄に、歐米に於いて進步的教育のあつた仲間に斯かる考を抱いた人は隨分多かつたが、第十九世紀の半ば頃から宗教科學また哲學が盛んになるに從ひ、斯かる考は根本的に間違ひであつて、詰り宗教の本源とその性質を誤解して居つた所から起つた謬見であるといふ事が分つて來た。若し前に說明したやうな高尙な宗教觀を取るならば、右等の考が間違つて居ることは識者を俟たずして明かである。

尤も、二三百年前からの科學及び哲學が、宗教上の思想と活動とに對して破壞的の影響を及ぼしたことは明かな事實である。又宗教それ自身が或時代に於いて腐敗して全く勢力を失ひ、或は數十年の永い間引續い

人心は宗教なくして永く滿足することが出來ない

て全く無宗教な個人若くは階級のあつたことも事實である。が其れと同時に、その無宗教の狀態が一國民の全般に及んで來たとき實に忌むべき種々の害惡が起つた事も亦明白な事實である。此は今後に於いても同樣であらうと考へられる。

歷史上又は個人の經驗に徵すれば、人間の心は宗教なくして永く滿足が出來ないやうである。人間以上の勢力なく、現象以上の實在なく、現實以上の理想なく、一言以ていへば神と其助けなくては、人心は無力を感じ空虛を感じ寂寞を感ぜざるを得ない。勿論、科學も哲學もなかつた時代に宗教が與へた所の感情思想の中には、科學哲學の起つた爲に癈滅に歸したものがあるが、非宗教家が取て以て宗教攻擊の材料となす所のものは則ち其癈滅の分子である。成程、科學上の知識に進んだ者は幼稚時代の思想感情で滿足の出來ない筈であるから、活ける宗教は人智の進歩と共に進歩しなければならぬ。之は早くも第十八世紀に於いて起つた問題であつて、哲學も科學も長足の進歩をしたから宗教も其に伴うて進歩すべき筈であつたのに、比較的に後れたものだから無宗教的現象が比較的に多かつた譯であつた。然かし幾ら科學哲學が進んでも、人間の宗教心を喚び起す原因は無くなつて仕舞ふ氣遣はない。たとひ自然界に對する科學の支配が絶頂に達しても、決して人生の最大悲哀である人間の死を無くすることは出來まい、決して愛する者と此世の永別をする人々の心から悲哀の感を取去る力はあるまい、決して人間をして生死苦樂飽飢寒暖などの慾念感情又は自然界の大體の作用から獨立さすことは出來まい。又科學は宗教的經驗を度外に措いて、決して過去にありし事及び將來あらむとする事を悉く推知することは出來まい、何となれば人間の經驗は狹く且つ短かいから信念の力を借りなければ遠い事物を發見する事が出來ないからである。哲學も宗教的經驗を度外視して宇宙人生の解釋は不可能である。科學は勿論哲學と雖も、手近かな物を說明し得るけ

幾ら科學や哲學が進んでも宗教は無くならぬ

れども宇宙人生に關する凡ての神秘を取去ることは出來ない、況して究竟の實在者を明示することは覺束ない。科學と哲學とだけでは慾情を制裁し惡心を改善し高潔純美なる心靈を造り得る見込が立たない。科學及び哲學の進歩は宇宙に對する奇異の念若くは尊嚴の念を滅却しないで、却て智者識者をしてヨリ深淵にヨリ幽玄に宇宙を感考せしむる。さきに言つた樣に「人間は決して唯現象のみに據る所の世界觀を以て滿足するものでなくして、眼に見えぬ實在若くは究極者を要求する、之に據て初めて宇宙萬有の眞相を見、眞意義を悟り、眞目的を識り、從つて自己の生涯の意味も價値も解し得るものである。人は自己の生涯の眞價を解しない間は高尚で而かも清快な生涯を送ることは出來ない、否な時としては人生の味氣なきを感じ生くる甲斐なきを思うて悲觀に陷るのである。深く善を尊ぶ人は、人間界に有り觸れた善に滿足しないで、善の本源と其標準とを究竟者の中に見出さむとし、深く眞を重んずる人は、人間界に於いて見る位な眞に滿足せずして、人間以上の靈界に偉大なる眞を見出さむと欲する。」各國各時代の經驗をよく調べて見ると、眞善美の高尚な理想を求めず、其理想の本源を人間以上に認めず、其本源に社會の權威を見出さず、人間以上の者を尊敬し崇拜する宗教的精神のない場合に於いては、決して高潔なる人物と秩序ある社會とを興すことは出來ない、縱し或時まで其精神があつても其が無くなると、其人物なり其社會なりは腐敗に流れ壞崩に傾いて元の野蠻狀態に立戻ることは顯著なる事實である。吾人が生息する宇宙は土臺から眞なるものであり善なるものであつて信用すべきものであり、其宇宙の究極者は吾人が信賴し崇拜すべきものだといふ事は、人間の頭腦も心情も良心も共に要求して止まない所である。詰り、宇宙萬有は宇宙萬有が生み出した人間に妥當な滿足を與へるものでなければ、人間は其心を滿足さすことが出來ない。滿足の出來るやうに人心の活動に對して充分の餘地を與へなければ、人間は此宇

宗教の永續及び發達

宙を矛盾なものと感じて悲觀せざるを得ない。宇宙は宇宙の產物より低いものと考ふることは、吾人の理性の許さぬ所である。此等の理由に據つて、吾輩は宗教の永續を信ずる。

さきに申したやうに、宗教は進化するもので、其の客觀的形式は時代の變遷と共に變遷し、又其の信念も人心の進步と共に進步することは必然の道理であるから、宇宙萬有に對する奇異の感や恐怖の念や希望の情は、其人の人格の發達と共に發達するに違ひないが、人間が人間である限りは、さうして茫漠たる此天地の間に生息し變遷定まりなき此世に不安の生涯を送りつゝ斷えず外界の刺戟を受くる間は、宗教は永久に存續するであらう。そして人間の發達に應じて純正の宗教は段々發達し、今日のやうに少數の人の信奉に止らずして一般の人の信奉する所となり、又宗教の支配力が今日のやうに或る事件と或る時間內に止まらずして總ての事件と時間とを支配するに至るであらう。

之を要するに、人間の宗教心を喚起する所の元來の勢力は、人間が依て以て生き依て以て存する所の宇宙萬有の永久的事實及び其作用である。故に宗教は人類のあらん限り永續する。如何に人間が其事實と作用とを了解し又は支配する事が出來ても、其は唯枝葉の點であつて根本に到ることは到底出來ない。科學や哲學の力で病氣や苦痛や死を減少し又は日延べすることは出來ても、全く癈して仕舞ふ見込はない。宗教と雖も之を癈する力はないが、然かし其苦痛なり死なりの意味を的確に信ぜしめて之に對する恐れを除き、更に靈的の元氣と希望とを與へる。苦痛は啻に我の禍害にあらずして天與の敎育と觀、死は我生の終りではなくして永遠の天國に移る門口と信じ、以て綽々たる餘裕あらしむるものは宗教の力である。科學や哲學は人間死後の生活に就いて幾らか推想することが出來るけれども、元來其は大いなる謎であり神秘である。吾人は科學の助けに依て或る程度迄は自然界の作用を了解し得るけれども、然かし

それだけでは全體の作用に比して格別の事はない。況んや萬有の意義目的に至つては、科學の表面的見解では一向分らない。人間は合理的目的的倫理的の生物であるから、宇宙も又然りと觀なければならぬが、此の宇宙觀の立脚地は宗教的經驗から得るの外はない。而して後に哲學的また神學的研究に據て其觀念の內容を明かにしなければならぬ。

以上述べた所は甚だ雜駁ではあつたが、宗教の永續問題に就いて多少諸君の參考になる點があれば幸である。之に據て、宗教の盛衰變遷はあるけれども消滅はないといふ事を略ぼ信ずることが出來るであらう。宗教の衣裳は時代と共に變ずるが、其本質は人間の存續と共に存續するといふ斷案を下すことは我田引水の早計ではなからうと信ずる。

『序での話であるが、明治時代の教育ある日本人が無宗教となつたのは、科學、哲學の進歩のために在來の宗教が破壞せられたからである。所が近來になつて、段々と無宗教の由々しき弊害を認めて來たので、祖先崇拜といふやうな事を再興して、小學校の生徒等に舊式の宗教心を鼓吹した。けれども其は舊式の天文學を再興するやうなもので、第二十世紀の日本人をして舊式の宗教に心服させるは到底覺束ない。果して宗教が新時代の日本人に必要であるならば、時代に相應した形式を取らねばなるまいと思ふ』

第六章　神學

第一節　神學と宗教との關係

前章に於いて述べたやうに、宗教は人間の性質の全體即ち知情意の三性にかゝるものであるが、人間は其知性の働きに由て生ずる思想觀念に支配せられ、殊に價値ある思想觀念に支配せらるゝ者だから、宗教に於いても其知性の働きを抽象して特別に之に意を注ぐ者のあるのは當然である。

廣義に於ける宗教と神學との區別

最も廣い意味に於ける宗教と神學との區別は丁度此處に存する。宗教は一つの全體で神學は其の中の知的方面である。宗教は思想感情信念希望などの心的現象及び其作用に應じて、客觀的の形式を有する具體的のものであるが、神學は其中の思想のみを抽き出して特別に之を研究する。故に宗教は神學よりも範圍の廣いもので、神學のみが決して宗教ではない。併しながら一方からいへば、宗教は神學なしに存在しない。

宗教は神學なしに存在しない

時としては神學は宗教的思想に依て成立つものとも謂はれ、又時としては宗教的思想を組織的に研究する科學とも謂はれる。

意義の變遷

第二節　神學の意義に就いて

英語の Theology といふ言葉は、希臘語の θεος (Theos) と λογος (Logos) との二語から成立つのであるが、前者は神を意味し、後者は知識又は科學を意味する。最初の意味では、神學は神に就いて組織した知識といふことであつたが、基督教が希臘の文明に入り込んでから、直ちに此意義を取り、神又は宗教を組織的に研究する科學的哲學的の學科といふ意味に用ゐた。併しながら、其後種々の用法が生じ、或は廣義に用ゐ或は狹義に用ゐ、基督教神觀を取るか取らぬかに由て差違があつた。

現代に於ける英語の用法の意義

現代の英語の用法に就いては、少くとも五つの違つた意義を知らなければならぬ。(一)最も廣い意義に於いては神學は宗教の知的方面である。

之を組織的に研究するかせぬかを問はず、又宗教思想の優劣正否を論せず、苟も知的方面を研究するものは之を神學と稱する。(二)其より稍狹まい意義に於いては、神學は唯宗教を組織的に研究するものである。さうして其目的は神の事を研究する事でなくして唯宗教を研究する事である。此意義の神學は二つに分けられる。一つは凡ての自然科學と同樣に、唯昔から今日までの宗教上の事實即ちその信仰その歷史その習慣を唯事實として研究するもので、之を宗教科學といふ、他の一つは多くの宗教の一般的原理を見出し合理的說明を下すもので、之を宗教哲學といふ、(三)モー一つ廣い意味の用法は、神學校で教ふる諸ての學科を神學と稱する事である。さうして之を三種類に分けて(甲)準備的學科、即ち希臘語、希伯來語、聖書解釋學、教會史、教理史、辯證論、宗教科學、宗教哲學等と(乙)規範的學科、即ち教理學、組織神學と(丙)應用的學科、即ち牧會學、說教學、傳道學とにする。(四)狹義に於いて、神學は唯教理學を意味する

ことがある。希臘語のドグマ即ち教義、又その教義を表はす信條を、細かに辯解し組織的に叙述する學科である。即ち前項に述べた神學の規範的學科中の教理學だけを神學と稱するのである。(五)又少しく廣い意味で、組織神學のみを神學といふ場合がある。即ち基督教の信仰を組織的に叙述し、且つ其の經驗的基礎を論究し、而して之を承認する理由をも明かにするのである。之がためには、宗教の知的方面の統一を證明し、其の合理的なる事を辯解する。この組織神學は、一方に於いては一種の科學である、何となれば宗教の經驗上の事實と其經驗より得た所の確信とを明かに區別するからである。併し他の一方に於いては一種の哲學である。何となれば其確信の合理的性質と基礎とを證明するからである。

右の第四と第五との意味に於いて、神學は思想上及び信仰上の規範を示さむとし、從つて宗教家の行爲に關する標準をも立てやうとする。故にこの意味の神學は宗教科學及び宗教哲學より優つて居る。この二學は、

宗教に關する興味に就いて滿足を與へる爲に授けるものであつて、元來之には直接な實際的目的はなく、唯廣い深い宗教上の知識を養成する目的であるが、然かし、第四第五の意味の神學は更に一歩を進めて、人間と神との關係を明かにし以て人間の信ずべく且つ行ふべき事を示さむとするものであるから、此行爲を決定せむとする點からいふと、神學は一種の應用科學のやうなものである。言ふ迄もなく、神學は傳道界に入つて教職を執らむとする人を養成する學校に於いてのみ授けるものであるから、神學校と教會との關係は、師範學校と一國の教育との關係と同樣である。

宗教には知的分子がある

第三節　科學及哲學に對する神學の位置

神學といふ言葉の最も廣い意味は、宗教の知的方面を研究する學問といふ事である。宗教の中知的分子のないものはない、何となれば、宗教には必ず崇拜の對象があり、さうして、其對象の性質に就き、其對象の目的精神に就き、其對象と人間との關係に就き、又其對象の意志に從へば如何なる利德を得るかといふ事に就いて、成るべく委しく且つ明かに思考する必要があるからである。宗教は凡ての感情思想及び此等の感想の客觀的表現の全體を意味するものであるが、神學は其中から思想の方面だけを抽いて、之を研究し之を組織し之を表現するものである。殊に發達した宗教に於いては、其神學は隨分組織的であつて、さうして教理的若くは哲學的の方面を高調する。それで、高尚な意味に於ける神學は、宗教の中に在る宇宙觀を哲學的に組織することを目的とし、神、人、及び兩者の關係を成るべく矛盾のないやうに調和的統一的に叙述し、諸ての教理の關係聯絡を精確に論理學的に説明するものであると言つて宜しいと思ふ。宗教が人生の他の問題のために害せらるゝ時、例へば科學や哲學のために害せらるゝ時は、神學は或は其問題の缺點を指摘し、其問

高尚なる意味に於ける神學

題と宗教との調和を求めて、宗教を保護するのである。

神學がその宗教的宇宙觀を構成する時は、當時に行はるゝ思想を成るべく採用する。故に、時代が變り、哲學又は科學の思想が變るに從うて、神學も亦變つて來るのは自然の勢である。而かも、其の變るや、大抵は哲學又は科學の變化の後である、從つて神學は大抵時勢に後れ勝ちになる。

神學と時代思想との關係

科學と宗教との衝突の理由

こゝに所謂科學と宗教との衝突の理由が存する。

併し、之はその實宗教と科學との衝突ではなくして、神學と科學との衝突である。更に正當にいふと、實は神學の内に入つて居る舊科學的思想と新科學的思想との衝突といふべきである。譬へば、地球中心の思想の思想は何千年の永い間引續いた科學的思想であつて、宗教家は固より神學者も又他の學者も之を是認したのであつた。所が、第十五六世紀の頃になつて、天文學の進歩につれて太陽中心の新科學的思想が起り、少數の科學者の是認する所となつた。一般普通の人々は勿論、神學者すら

其の衝突の眞性質

もこの新思想の眞意義を知らず、且つこの新思想は舊來の宇宙觀及び其れに從ふ所の宗教的信仰と衝突するものと見たので、之に反對した。それでこの衝突の實際をいふと、其は純粹の宗教と科學との衝突ではなくして、たゞ舊式の科學に依て構成せられた宗教的宇宙觀と新科學との衝突であつたと謂はねばならぬ。眼の明いた神學者は、段々天文學者が提供する證據を研究して、太陽中心の思想を承認すると同時に、宗教的宇宙觀を改造して此の新科學的思想との調和を計つた。或る非宗教者は、之を以て科學の勝利宗教の敗北と見做し、向後益々このやうなことが重なり重なつて、終りに宗教は全滅し唯科學のみ遺存するであらうと豫想した。然かも、前述の如く之がたゞ新舊科學の衝突であつたから、この豫想は却て敗滅に歸し、其後今日に至るまで宗教は依然として固有の大勢力を揮ひつゝあるのである。

勿論、神學者は科學者を兼ぬる者でないからして、科學者に先つて新科

學的思想を發見するやうなことは滅多になく、大抵は科學者の意見が略ぼ一定する時を待ち、愈々確實と認めらるゝに至つて、その神學説を改正する、故に、神學は惡意を以て見れば時勢の後車と見えるが、好意を以て見れば、人生に最も必要なる宗敎を保護するは勿論、浮沈消長の甚だしき科學を批准し精選するものである。言はゝ科學の尺度衡器である。荒波の如く又はマラリヤ熱の如く、浮沈昇降の激しい科學思想の平衡を取つて、着實に上進する神學は、啻に宗敎の親族であるのみならず、亦科學の良友であると謂はねばならぬ。

眞正の神學は宗敎の親族であり科學の良友である

＊　＊　＊　＊　＊　＊

唯物論又は自然論

近代の科學者の中或者は、人間界を度外に措いて、たゞ物理的の科學又は哲學を以て完全な宇宙觀を建てることが出來ると考へ、凡て超自然の勢力や靈物を否定して了つて、現象世界の外には何物も認めず、而してこの現象世界をば無數のいはゆる自然の勢力と法則とに依て成立つ所の大きな機械と見做し、其運動は機械の運動の如くに永遠より永遠まで決定されてあるものと論定した。之が則ち唯物論又は自然論と稱するものである。

此論に對する評論

此論を眞理とするならば、勿論宗敎は悉く瘢滅に歸して仕舞ふ。此論は啻に宗敎若くは神學に反對するのみならず、東洋又は西洋の哲學の大部分にも反對するものである。吾輩が第一章に於いて講究した科學の定義に據ると、この唯物論は純正の科學的宇宙觀ではなくして、哲學や宗敎の領分を侵して居るものであり、形而上學を否定しながら一種の素朴な形而上學説をなすものであり、人間經驗の一部分を本據として宇宙全體を解釋せむとするものである。是れ此論の根本的誤謬ではない歟。斯かる科學が宗敎と衝突するといふならば、其は實際の所兩者の衝突ではなくして、寧ろ一種の非宗敎的哲學と似而非科學との衝突であると謂はざるを得ない。局部的のものを全部と誤解し、人間の心靈的經驗（例へば倫理、

宗教（若くは美術）に無頓着なるが爲に、此方面の興味を感ぜず聖權（サンクション）を認むる事が出來ないのである。

一方からいへば、斯のやうな極端な宇宙觀の起るのも不思議ではない。

此論の出るのも亦故なきにあらず

といふのは、專門家になると兎角、その眼界が自家目的の局部に制限されて他の部分にまで屆かないからである。宗教家の中これと同樣な誤謬によく陷つた者も珍らしからず、唯物論者の握つた眞理を度外視して、單に宗教的經驗のみに據て宇宙觀を立てやうとした者もあつた。我々は宇宙の諸ての現象と人生の諸ての經驗とを總合して公平な宇宙觀をたてねばならぬ。

第四節　現代神學の解決すべき問題

近代科學の光に照らされた人々は、百年前の人間が夢にも想はなかつた事柄を多く識り、從つて前代に幾十倍した自然界の支配力を得、新天地に入つた心地して、益文明の開拓に熱中しつゝある。故に、これ迄舊式の思想に依て永く維持して來た宗教の不完全な形式は、進歩した人々に滿足を與へることが出來ない。若し今日に於いて新知識新文明に適應する所の宗教の新觀念を建てなければ、一般の人心は恰も舵なき舟の如く非常な禍に陷らなければならぬ。此處に新神學が正に解決すべき問題がある。即ち如何にして新科學及び新哲學が示す所の世界に適應した宗教の觀念若くは確信を建てる事が出來る乎といふ問題である。現代の神學は、進歩した科學と哲學とを容るゝ充分の餘地を有つと同時に、宗教的經驗をも維持し得る所の新しい宇宙觀及び神觀を建てねばならぬ。科學が示す所の自然界の事實また歷史が示す所の人類發展の事實を充分に承認すると同時に、人間が神と充分に靈交して自然界人間界以上の靈的實驗をなし得る道を開かねばならぬ。一方に於いて神學が科學者に對して科學的知識を求めると共に、他の一方に於いて彼等をして宗教的宇宙

新知識新文明に適應する所の宗教の新觀念を建つること

觀を承認せしめねばならぬ。尙ほ切にいへば、神學者は科學者及び哲學者に對して、科學的で又宗教的である所の宇宙觀にして始めて科學が現はす物理上の事實なり又は哲學が示す道理上の原則なりが妥當な解釋を得るのであるといふ事を證明せねばならぬ。要するに現代神學の問題は、近代の學問の光に照らして神と人と萬物とに關する正當な觀念を得、さうして此等の觀念を組織的に統一して完全なる宇宙觀を建つるの方法如何といふ事である。基督教の確く信ずる神は、決してたゞ一つの主觀的理想ではなくして、宇宙の大靈たる實在者であり、全智全能の活ける神であることを明かにし、此確信なくては科學又は哲學の取る宇宙觀も本當に成立しないといふ事を證明し、宗教的經驗を離れては決して宇宙全體に關する圓滿なる解釋を得られないといふ事を辯證するのは、現代神學の負ふべき任務である。

神學の必要

勿論、神學は宗教ではないが、宗教を保全するに缺くべからざる一つの學科である。宗教的經驗の裏面に在る思想若くは感情を組織的に叙述し、其内容の調和を表現し、斯くて近代の科學哲學と矛盾しないことを辯護して、以て宗教維持の大任を盡すものである。

所謂衝突の理由

第五節　所謂神學と哲學との衝突に就いて

或人は、哲學を以て神學を破壞する者であると思ふ。或る意味に於いては實際さうであつて、歴史を見ると、哲學を研究した爲に舊來の神學又は宗教を否定するやうになつた者は多くある。併しながら、斯かる結果を來たしたのは、舊來の神學なり宗教なりが哲學及び科學の方面から見て不完全であつて、而かも研究者が適當に其神學又は宗教を改善する道を知らなかつたからである。又中には、哲學者の立つる宇宙觀がたゞ純粋な智的一方のみで宗教の靈的經驗を容るゝ餘地を置かなかつた爲に、宗教又は神學を否定する結果に立至つた者もある。其場合に於いては、

誤謬は啻に宗教又は神學の方にのみあるのではなくして哲學の方にもある。哲學者が萬有の（若くは人生の）唯一種の現象を土臺として立つる宇宙觀（若くは人生觀）は、唯部分的であると自認するならば差支ないが、其部分的のものを絶對的の宇宙觀であると主張するならば、勢ひ宗教上の宇宙觀と衝突を起さざるを得ない。而して思慮の淺い人々が、哲學者の部分的宇宙觀に盲從して宗教を否定した事が度々歴史上に現はれたのである。幸に今の時代になつて、部分的の宇宙觀の缺點を悟り比較的に完全な宇宙觀を建つる必要を感ずる者が多くなつた。それで進歩的神學の餘地が大分出來た次第である。

偏局な哲學觀

茲に一つ奇妙な事は、哲學といふ言葉は人間の總ての經驗を公平圓滿に研究して一つの合理的宇宙觀を立つる學問を指す筈であるのに、是迄の多くの人々は、唯人間の理性的經驗のみに基く宇宙觀を哲學と稱した事である。彼等は人間の道德性と宗教性とより起る經驗を殆んど見ないで、絶對者を識るには唯理性のみに依て足れりと考へたやうである。而して、三性を合して研究し以て宇宙觀を建てむとした者は大抵神學者と稱へられた。それで哲學的でないと思はれた神學者の中には、隨分哲學者と謂はれた者よりも深い哲學的のものがあつた。

第六節　神學の定義

私は茲に神學の歴史や又は神學史上の有名なる學者などに就いて別に述べないが。（此等の事に就いては、諸君が拙著「獨逸神學略史」又は拙譯『基督教要義』を讀まれたら、大體明かになるであらう）その代りとしてモー少し委しく神學の定義に就いて述べて置きたいと思ふのである。

進歩的宗教家の神學觀

今日英米に於ける進歩的宗教家の見解によれば、神學は人間の經驗の全體に基き（就中倫理的及び宗教的經驗）、究竟の實在者の性質に就いて統一した論理的又實際的の觀念を得ることを以て目的とし、其究竟者の性質から演繹して、

宇宙萬有及び人生の意義と目的と歸趣とを識り、且つその目的を實現する爲に如何なる精神と行爲とを要するかを研究する學科である。それで近代の最も進歩した神學者の用法に於いては、神學は同時に科學的であり哲學的であり且つ規範的である。總て經驗上の事實を確め、其等の事實の道理上及び實際上の價値を判斷し、又其等の事實の裏面にある合理的原則＝凡ての事物に統一を與ふる原則を研究する。之がためには色々の要素を分拆し、其の諸要素の關係を明かにし、又其の諸要素を總合し統一する。而して之が結局の目的は、思想上及び行爲上の規範を立つるに在る。

追つて科學哲學宗教及び神學の關係を示す表を掲出する時に、この進歩した神學觀から神學の位置を明かにしやうと思ふ。

第七章　科學、哲學、宗教の衝突及び調和（併せて三者の性質、關係、範圍を論ず）

第一節　科學、哲學、宗教の衝突

シンタグマ

科學と哲學と宗教とが各、或時代に於いて人生の興味の全部を占領しやうとした事は、歴史上著しい事である。近來評判の高い獨逸の哲學者オイケンは、斯かるものをシンタグマ(Syntagma)と名付けた。此言葉は希臘語であつて永い間餘り使用しなかつたが、近頃オイケンが使用した爲に少しく流行するやうになつた。即ち一つの不完全な理想を以て人生の全部を支配しやうとするものは、之をシンタグマといふ、其理想は實際部分的なものであるに拘はらず、自らは其が部分的であると承知しないで全部であるといふ風に考へるのである。

宗教のシンタグマ

このシンタグマを最初にやつたものは宗教である。宗教は何百年間、

人生の全體を一手で支配しやうとした。人間に必要な凡ての知識を供給し得るものは宗教である、曾に目に見える世界のみならず見えざる世界に關する知識を與ふるもの、曾に現世の生涯のみならず死後の生涯をも支配するもの、人間に關する事は固より幽魂に關し又神明に關する知識を授くるものは、みな宗教であると考へた。

科學哲學宗教の衝突が起つて來た

所で、哲學と科學とが希臘人の間に同時に起り、人間の道理性が盛んに働いて來て、宗教が教ふるまゝでは滿足が出來ないやうになると、宗教外に知識の立脚地を求めて、觀察と究理とに依て萬有を解釋せむとした。最初の間は其哲學なり科學なりが宗教と衝突するとは思はなかつたが、段々其差別が明かになり、終には宗教と衝突を引起すやうになつた。又最初の間は科學と哲學とは違つたものとは氣付かなかつたが、段々と其區別が立つて來て、科學は主もに有形の自然界を研究し、哲學は無形の心靈界を研究するやうになつた。それから兩方が全く獨立なものと考へて來て、そして各我れ獨り人生の全體を支配せむと力むるやうになつて來た。そこで宗教と哲學と科學との三者相爭うて、一つが盛んになれば他の一つ若くは二つが衰へるやうな事が度々であつた。殊に哲學と科學とが流行する場合に、宗教が衰運に傾いた事は、何れの國の歴史に於いても見る所である。三者各が自分の有する眞理を自尊する餘り、他者の有する眞理を認めることが殆んど出來なかつたほどに極端に陷つた時代もあつた。

(甲)宗教萬能主義の特質

(甲)宗教萬能主義(レリヂヨニズム)の性質

此主義は、神と人間との間に在ると信ぜらるゝ所の關係を以て人生の興味の中心とするものである。勿論、其中に哲學的及び科學的の分子はあるが、其中心點は神人の關係であつて、而かも實際的方面に重きを置く主義である。此主義の初代に於いては、其の哲學的若くは科學的分子は、今日我々が謂ふ所の神話の形式を取つて現はされた。が哲學及び科學が起つた後は、自分の中心的要素に衝突しない限りに於いて其の哲學又は科學の教ふる所を取つて我が有(もの)とした。併しながら、元來その中心興味が哲學的又は科學的のものでないから、何時でも哲學的又

は科學的には時勢に後くれるのは自然の勢である。又何時でも哲學と科學とに對して恐怖心忌嫌心を懷くのも止むを得ぬ、何となれば、二者の進歩のために自己の領分を侵害され、信徒を奪取されるやうな事が度々あるからである。

宗教萬能主義は、物質界若くは歴史上の現象を説明するに、神又は神々を以てする。この浮世の中に於ける實際的助力の必要な場合には何よりも先づ神の佑助を求める。政治上社會上倫理上の神聖權を主張し或は行爲の動機に就いて立論する時は、常に神に對する信念を基礎とする。萬事斯くの如く、信仰的であり、心靈的であり、神中心的である。

宗教萬能主義は大體に就いていへば、素朴的な直覺に據り、感情を重んじ、死後の生命を貴ぶ。比較的に理性より出づる理論や歴史上の事實に重きを置かぬ。客觀的經驗よりも主觀的經驗を確實とする。時間的の事物よりも永久的のもの、外部的のものよりも内部的のもの、物質的のものよりも心靈的のものを求める。人生の支配力を腕力的又は政權的のものに置かずして、寧ろ信仰的直覺的のものに置く。

斯くの如き宗教萬能主義を執る者は、其主義に適ふ宇宙觀人生觀を立て、之を標準とし尺度として萬事を判定する。何處までも神はその根本的觀念であつて、宇宙萬物の存在する目的は此神の目的と一致すると考へ、又萬物の存在する所以は神の目的に由ると信ずる、故に此主義の本來の性質は目的的（テレオロヂカル）のものである。

(乙)理性萬能主義の性質

(乙)理性萬能主義の特質

此主義は、經驗の中に含まれて居る合理的の原理に人生の興味を集注するものである。事物の道理を第一に尋ね、現象の説明を最も重んずる。此の主理的立場からして、人生の全部を己が領分の内に籠めて悉く之を支配せむとする。

此主義を執る者は、今日の人間の爲しつゝある事の中に、不合理な事の多くあるを認めて、之を迷妄として否定する。殊に宗教の中に其迷妄の多いことを評論するので、所謂宗教と哲學との衝突を屢惹起した。理性萬能主義はその性質上常に批評的の態度を執るが、人智の比較的に幼稚な時代に於いては、唯自己にのみ眞理があるといふ慢心を懷いて、舊來の傳説を頼りに批評し攻擊し、偏へに破壞的の事をやつた。而して自らは宗教的若くは道德的な敬虔の念を有たず、隨分專横な振舞をしたのであつた。此主義は宗教萬能主義と同樣に永い歴史を遺こし、種々なる現象を起した。或時代には隨分進歩し且つ包容的になつた。斯樣に其現象は時代によつて種々樣々であるが、兎も角事物の解釋といふ事が其の根本興味となつて居る。

或人はこの理性萬能主義を哲學と同一視するが、其は間違つて居る。之は哲學の偏頗に傾いたものであるが、哲學は必ずしも理性萬能主義ではなく科學も宗教も輕視しないのである。此主義の内容を糾して見ると、多い少ないの差こそあれ批判的になつた所の一種の直覺論である。即ち宇宙及び人間を解釋するに用ふる所の原理を直覺的に自己の心に求め、批評的に確定した所の合理的原理を以て人生の萬事を支配せむとする、感情を排斥し、神秘的要素を蔑視する。

此主義も宗教萬能主義と同樣に目的的（テレオロヂカル）であるが、後者の其れの如く意識的のものではない。

（丙）自然萬能主義の性質

（丙）自然萬能主義の性質

之は自然界に於ける物質的現象の研究を其の中心興味とする所のものである。自然界に見出す所の事實と作用とに最も重きを置き、其事實と作用とを説明するに用ふる所の觀念を以て、生物界の凡ての現象、人間の身體のみならず人間の高尚なる心靈的方面をも説明し、以て人生の全部を支配せむとする主義である。

此主義を執る者は、直覺的知識を悉く否定して、凡て純粹の經驗主義を執る積りである。心理性の働き心靈的の經驗も皆な客觀世界から得た知識及び觀念を以て説明せむとする。目的的（テレオロヂカル）の説明は凡て否定し、機械的原因を以て物質世界の現象は固より精神界の現象をも説明し得ると考へる。所謂自然界の法則を以て人生の萬事を支配せむとする者である。宗教萬能主義者は神を以て萬有を説明し、理性萬能主義者は心を以て萬有を説明するが、此の自然萬能主義者は物理を以て萬有を説明する。

殿重な意味でいへば、之は科學主義ではなくして唯偏屬な科學の產物である。或意味に於いては合理主義ともいはれるけれども、形而上的哲學から生ずる所の合理主義とは隨分異つて居る。事實々際を高調するの餘り、形而上的觀念を蔑視し、哲學上又は宗教上の解釋所説を全く空想と見做し、殊に宗教が人間行爲上の神聖な權能となし眞正の動機となす所のものを否定する。此主義は比較的に近代に起つたもので、歐洲に於いて其勢力を得たのは二百年このかたである。

科學哲學宗教の調和の傾向

* * * * * *

以上簡單に述べた通り、三主義は宇宙に就き、人生に就き、萬づの事物に就いて、其興味を異にし、其理想を異にし、其見解を異にし、而して各自家滿足の樣子である。宗教萬能主義が純正の宗教と異なる所は、恰もその自家滿足の精神に在り、理性萬能主義が純正の哲學と異なる所、自然萬能主義が純正の科學と異なる所も、亦その自家滿足の精神に在る。斯の樣に各自己の觀る所思ふ所を無上の價値あるものと思ひ込んで、他を輕視した爲に、永い間三者相爭ひ相鬪うた譯である。斯くて各自分が人間福利のために寄與した所は多大であると自惚れると共に、他が人間の福利を損害した事にも眼を留めて、自贊他誹の兒戲に耽つたのであるが、近來濶大の精神を以て諸説を大觀し公平な學究を勉むる一つの仲間

が起りつゝあつて、右三者が提供する眞理を總合せむと企てつゝある。彼等は三者の中に其々棄つべからざる眞理があり、其々人間の福利增進のために必要なる要素のあることを認め、其々その見地に立ち其主義を用ふる權利のあることを許し、而して今や人生の諸方面に亘る高尙なる興味を供給して人心に滿足を與へむために、三者の調和を必須とする時代になつたと主張する。

近代の公平な學者の調和的意見

第二節　科學、哲學、宗教の調和

近代の公平な態度を取る學者の意見に依れば、右に述べた三主義中の一つだけでは、人間の興味の全部を受持ち人生の幸福の全體を擔保することは出來ない。宇宙若くは人生は、其の一主義のみを以て取扱ふには餘りに廣大であり複雜である。天文學者は自己專門の範圍では其れ相當の權能があるが他の學問の範圍に入つては其れ程の權能がない如く、科學は科學の範圍では立派な權能があるが哲學の範圍に入つては其權能は誠に少ない。宗教又は哲學の權能にしても同じ事である。故に、其々の學問の性質職能を善く了解し、且つ之を實地に取扱ふ事に於いて正確を得るために、其々の專門家を要する。而かも其專門家は數年否な數十年の研鑽錬磨を要するのである。一學科の專門家が他の專門學科に關して越權な判斷を下すことは出來ない。科學の專門家は哲學の領分を侵すことが出來ず、神學者は科學の領分を侵すことが出來ず、科學者は神學の領分を侵すことが出來ないのである。

宗教と科學と哲學との範圍のわかる所

斯樣に、人間界には三種の專門家を要するといふのが、近代の進步した學者の意見であるが、宗教と科學と哲學との範圍は、第二章に於いて述べた人生の根本的三問題即ち何乎（ホツト）、如何（ハウ）に乎、何故（ホウイ）乎の問題に由て分かるゝ（即ち事物の狀態と原因と目的若くは意義との問題となる）。此の三問題の中で第一の問題即ち事物の有樣を研究する事が最も易くて事物の意味を識ることが最も六づかし

三者の起つた順序

いと思はれるが、奇妙にも、人間は其の最難の問題を一番先きに研究したやうである。宇宙及び人生の意義如何といふ問題に最初に觸れて茲に宗教が起つた。其後幾十年經てか分らぬが、知性が働き出し智的興味が生じて、宇宙及び人生の現象の原因を尋ねるやうになり、茲に哲學が起つた。近代になつて始めて事實を明確に識らむことを求め、茲に科學が起つたのである。（今日に於いても、三者何れも未だ充分に出來ては居らないが、其研究の結果、以前に確かな事實と思はれた事でたゞ心の中に描いた想像に過ぎないものがあることが明かになつた。殊に宗教及び哲學の中に、理想や理窟を立てむとして實際の根據のないものを客觀的事實のやうに考へたものがある。近來學問の進歩に從つて、自然界又は人間界の事實を正當に識ることの實に六づかしい事が分つて來た。萬人が日常實見しつゝある水や木のやうな物でも、其實際は能く分らぬ。故に事實は何であるかといふ問題に對しては、其識る所は誠に少なく其識らぬ所が實に多い。最も進歩した自然科學であつても、今日の所たゞ部分的に解答し得るのみで統一的に解答することが出來ない。）

今日に於いても學問上の眞の知識は未だ幼稚である

却説、前述の如く、科學は『何乎』（ホツト）の第一問題に對し、哲學は『如何』（ヘウ）に乎』の第二問題に對し、宗教は『何故乎』（ホワイ）の第三問題に對して解釋を下さむとするものであつて、此の第一第二第三の順序を辿つて研究してゆくのが正路であると思はれるが、歷史に於いては此順序を取つて進まなかつた。併しながら、此順序は絶對的のものではないので三者は何時でも相伴はなければならぬ。相伴うて進んでこそ圓滿の解釋に到達し得る望みあれ、其一に偏しては缺陷なきを得ないのである。以下、三者の性質に就いて少しく述べやうと思ふ。

宗教と科學哲學との進歩は相伴はなくてはならぬ

（甲）科學に就いて

（甲）科學に就いて

科學の定義

（一）先づ積極的方面から科學の性質を述べるならば。科學は經驗上の事實を明確にして、之を最も簡單な便宜な且つ普汎的な言語若くは文句を以て表はさうとする人間の知的活動である。が併し科學は離れ〳〵の事實を識ることを求めないで、其事實の空間的又は時間的の關係を識らむとする、（殊に繰り返へして現はるゝ作用に就いて連絡的の知識を得む事を求めるる）。其事實若くは作用を成るべく簡單な文句を以て表はし或は數理學上の公理を以て表はしたものを名付け

自然界の法則とは何ぞや

て自然界の法則といふ。科學は經驗に基いて其法則を一般的のものと假定し、又た自然界の凡ての作用は空間上時間上一樣（ユニフォーム）なものであると假定して、將來に起ることを預言し、且つ過去に於いて如何なる事があつたかといふことをも推定する。即ち時間を超絶して現在の立場から過去及び將來に於ける宇宙現象の歷史を達觀せむとするのである。然も科學の目的は唯斯樣な知識を得るのみではなくして、此知識に依て自然界を支配する能力を得むとするに在る。このやうに考へて見れば、科學は客觀主觀の兩面を通じた現象世界の全體を其研究の範圍に入れて居るのである（斯樣な宇宙全體にわたる知識は果して正當に得られるものであるかどうかといふこと、其は其公準（ポスチュレート）（又は前提）の適否に由り、又事物の共存續起を確定するの完不完に由り、又得たる所の知識を簡單で便宜でさうして普汎的な言文若くは公理を以て妥當に表はして居るや否やに由る。例へば事實の觀察に誤りがなくとも之を表はす公理が間違つて居れば其知識は不完全である）。

科學的知識の正否廣狹の因由

科學の目的

科學の範圍

精密なる觀察に依て物の現象を研究するといふ方法を、科學が先立つて物理的の現象に應用したので、或る人々は、科學の範圍は自然界に限るものゝやうに考へるが、今日の進歩した人は、啻に外界の事物のみならず、心の内の諸現象を觀察實驗に依て研究し且つ其研究の結果として所謂法則を立てる事をも科學の範圍に入れる。それで心理學は固より、審美學倫理學宗教學の如きも科學の部類に屬する。凡て科學は理論よりも先づ第一に事實を調べる。苟くも事實を調査した其結果は科學の圏内に入るべきものである。故に科學といふ言葉は、物の研究法の形容詞として用ゐ、又其方法の所產を指す言葉ともなる。或る科學者は、科學の意義を狹く取つて、唯精確な測量の出來る物のみに限る、即ち數學を應用することの出來る現象を材料とする學問のみに科學といふ名稱を與へんとする。其見解からいへば、心理學や倫理學や論理學などは科學の中に入らないが、併し其樣な見解を取る人は少ない。

消極的方面から觀た科學の性質

(二)次に消極的方面から少しく科學の性質を述べやう。科學は現象又は作用の意義と目的とに就いて更に問はない。其問題は人間に取て甚だ必

越權な科學論

要であるが、科學は之を論明する義務もなく又權能もないので、之を哲學若くは宗教に一任すべきである。又科學は自己が善く用ゐる諸觀念を解釋し得ない場合がある、例へば時間とか空間とか物質とか勢力とか心とか感情とか思想とかいふものゝ本質は如何、主觀と客觀との本當の差別は何であるか、心と物質との眞の關係は如何なるものであるか、原因が如何にして結果に變化するか、といふやうな問題に就いては、科學は解答することが出來ない。之が解答を試みるやうになれば、其は科學の範圍を越えて哲學若くは宗教の範圍に入り込んだのである。若し積年の素養がなくして妄りに入り込むならば誤謬に陷る。歷史上有名な科學者にして飛んでもない誤謬に落ち、哲學上宗教上の問題に對して實に不完全な解釋を下した事さへある。いはゆる自然論又は唯物論は其一例であつて、哲學上多くの矛盾を現はしたのみならず、人生の高貴な部分を棄毒した所のものである。斯かる不都合な見解を執つたのは、科學者が其本分を越え部分的の不完全な觀念を以て宇宙觀を立てたからである。斯樣に哲學的思想を振り廻はした或る科學者は、少なからぬ弊害を遺したけれども、科學は其全體に於いて實に多大の貢獻を致したのであつて、人生に必要缺くべからざるものである、決して科學を棄てゝ哲學又は宗教のみを以て人心を滿足さすことは出來ない。

科學もよく直覺的觀念を使用する

(三)科學も亦直覺的觀念を用ふる事は、吾々の注意すべき點である。科學は元來實驗主義のものだから、普通の科學者は、主觀的經驗に重きを置く所の直覺主義や神秘主義を非常に嫌ふが、茲に我々の注意すべき事は、科學と雖も知らず識らず直覺主義を善く用ゐて居るといふ事である。科學者が用ゐる所の大抵の根本的觀念、例へば時間、空間、原因、結果、分量、性質、主觀、客觀、物質、心といふやうな諸觀念、又は數學や論理學に於いて用ふる觀念は、科學者が別に批判を加へないで直覺的に其儘取つて用ふる所のものである。時空の觀念はどうして起つたか、因果

併し科學者が直覺的觀念を用ふるのは敢て差支ない

の觀念はどうして我心に働いて來たかを問はず、此等の觀念のあるのは勿論當然の事であつて何も批判するの必要はないと考へて居る。のみならず、自分が此等の觀念を直覺的に得たといふ考すらも恐らくは起つて來ないであらう。哲學を一向研究しないものは直覺といふ事も分るまい。

併しながら、科學者が嚴重に自己の本分を守る以上は、此等の觀念を用ふることは別段差支ない事である。科學者の本分は此等の觀念を批判して其是否を正し其意義を確める事に在るのでないから、之を直覺的に採り用ふることは敢て不都合ではない。但し、宇宙全體にかゝる所の意義又は作用を識るには、是非とも此等の觀念を批判せねばならぬから、其處で哲學が必要になつて來る。

哲學の必要

(四)余は此處で科學の種類に就き又は各種類の範圍に就いては何も述べないが、科學の數と其々の內容とは、人間の知識の進歩に從ひ、興味の增加に連れ、或は研究の便宜に由て、斷えず變化することを一言して置く。それで一時代の科學の定義が他の時代の定義と異なつて來るのは怪むに足らぬ。今日に於いては科學の數が實に多くなつて、其名さへも知らぬものが少なくない。

科學の數と內容とは斷えず變化する

(乙)哲學に就いて　哲學の定義並にその性質、職分

(乙)哲學に就いて

哲學は合理的の原則を以て、事物及び事物の續起(シークエンセス)を說明せむとする人間の智的活動である。科學が確かめた事實を受取つて、其の內容に就き、其性質に就き、其の無形的關係即ち思想上の關係に就いて研究する。斯學は啻に事物の存在する所以を問ふのみならず、各事物があるが如く有る所以を問ふ所の學科である。其他、事物を說明するに用ふる諸觀念を批評的に研究し、又人間の知識作用を研究する。心又は物質の本性幷に双方の關係に就いても哲學は研究の職分を有つて居る。蓋し心は心外の客觀世界を識るけれども客觀世界は心を識らないやうであるが、双方を如何にして統一し調和することが出來るかといふ事は知識上の一大問

題である。哲學は如何に外觀上無關係のやうに見えても、凡ての事物を一つの統一的合理的の宇宙觀に包容せむことを求める。故に、哲學が人生の一大事實である宗教をも研究して之を合理的に說明せむとするのは自然の成行であつて、哲學と宗教とは其所で隨分相近寄り、時としては其經界線を殆んど立て兼ねるまでになる。

哲學と宗教との接近

このやうに哲學の範圍は非常に廣大であるが便利上之を種々の部分に分けて研究する。各科學には其に伴ふ所の哲學があるが（即ち其々の科學の形而上的方面である）これらの部分的哲學を總括的に論ずるものを名付けて形而上學又は實體學といふ。之は凡ての科學の形而上的方面を總合して、個々別々の現象が發現する所の究竟的實在者の本質を考究せむとするものである。此點からいへば、バウルゼンのいつた通り、哲學は諸科學の科學であるといふことが出來るが、斯樣にいふと、哲學はたゞ合理的組織的に諸科學の結果を研究するに過ぎないものとなる。蓋し諸科學者の研究する現象

形而上學又は實體學

は其々相異なる、（例へば天文學者の研究する物質現象は化學者が研究する物質現象とも異なる、又心理學者の研究する物質現象とも異なる）。そこで若し形而上學が凡ての自然科學が敎ふる所の現象を總合して究極的說明を下すならば、一種の宇宙觀を立てることが出來る。其れで滿足するなら、素朴的な實在論や唯物論や又は自然論を立つるに至るかも知れぬ、さうして其等の論も又一種の形而上學說といふ事が出來る。併しながら、哲學を深く研究した人であり形而上學の歷史に精しい人であるならば、斯かる宇宙觀は唯部分的研究の結果である、人間が經驗する凡ての現象を圓滿に取り入れない宇宙觀であるとして、決して滿足しないであらう。自然界の現象の上に心靈界の現象を公平に取り入れるならば、自然論又は唯物論と全く違つた見解を起すに相違ない。殊に人間の社會的藝術的倫理的宗敎的の現象を包容して研究すれば、宇宙の究竟的實在者に就いて大に違つた見解が起るであらう。眞正の形而上學が求める所の究竟者は、曾に物質世界のみならず人間界をも說明し得る所のもので

偏頗な哲學

偏頗な哲學の倒れた理由

ある。自然論や唯物論や理性萬能主義や宗教萬能主義や實驗哲學や多神教や凡神教などが倒れた譯は、其各がたゞ一部一面の現象を觀て立論したからである。彼等の認識しない又は解釋しない事實が他の部面に存在して、其事實が彼等の立論を倒したのである。

哲學の性質

却説始めの論に立ち歸つて哲學の性質に就いていへば、哲學なるものは要するに事物の現象の裏面に立ち入つて其内に働く所の原則を探求する所の學問である。科學は宇宙萬有に於いて働く所の作用の一樣なる事、又其法則の一般的なる事を假定するが、哲學は其假定の意義をたづね或は其假定の價値を明かにするために、宇宙の本相眞質に就いて考へるのである。斯樣に考へて見ると、科學が宇宙全體に關係を附けて研究する如く、哲學も又全體を研究するものであつて、唯その研究の方面又は問題が變つて居るばかりである。科學は事實を確めむとし、哲學は其事實の原因若くは統一を知らむとする。是故に、科學と哲學との間に衝突は

哲學と科學との相違點

ない、のみか衝突といふことは元來不可能であつて、却て相互に補助し合うて完きを得るのである。科學が確實な事實を供給しなければ哲學は建築を始めることが出來ず、哲學が事實の無形の方面を開拓し、又事實を適當に決定し叙述するに用ふる觀念を明確にしなければ科學は棟上げをすることが出來ない。哲學は科學を深い誤謬の淵から救ひ上げる。哲學の助けによつて科學は自己の使用する觀念若くは原理の何たるかを明かにする、此知識がなくては科學は由々しき誤謬の淵に陷らざるを得ない。これまで其淵に陷つた爲に、いはゆる科學と哲學との衝突とか科學と宗教との衝突とかいふやうな事が起つた次第である。

科學と哲學とは相互に補助すべきものである

哲學もよく直覺を用ふる

爰に吾人の注意すべきことは、哲學も科學と同樣に直覺を善く用ふる事である。哲學が起つて來た時に既に直覺的概念が多くあつた。歴史的に調べて見ると、哲學者は其等の直覺に全き信用を置いて之を採り用ゐたのである。例へば自己の研究する事實は何であるか自己の主義とする

合理的說明は何であるかといふやうな事は直覺的に明白に分つて居る積りであつた、が思想が進歩するに從うて自己が用ふる凡ての直覺的觀念を評論するやうになり、研究を積み重ねた上で隨分明白になつて來た(哲學に於ける大特質は則ちこの認識論である)。而かも進歩した哲學は進歩した科學と違つて、自己が直覺的觀念の上に立つて居ることを明かに自識して居る、からして此等の直覺的觀念を批評的に研究することに由て始めて堅固な哲學說が立てられるといふ事を知つて來たのである。それで近代の哲學は此等の直覺的觀念の起源性質若くは價値に就いて善く研究する。其結果として、永く信用せられた直覺的觀念にして否定されたものは少ないことはない。

哲學の四種類

大體に就いていへば、哲學は(一)Naive Realism 即ち素朴的實在論(二)Critical Realism 即ち批評的實在論(三)Naive Idealism 即ち素朴的唯心論(四)Critical Idealism 即ち批評的唯心論の四つの種類に分かれる。其種類は直覺的原理に對する評論の程度に由て分けられるのである。此の四種の哲學の代表者は今日に於いても在るのであつて、各個人は其知識發達の程度に應じて四種の中何れにか屬する。各個人の哲學的進歩は、自身の直覺的觀念及び直覺的心理作用を批評する程度に由るといつて宜しい。

哲學的進歩の標準

たゞ自然科學のみに基礎を置く所の形而上學に據る時は、自づから機械的宇宙觀を造るやうになる。此世界に於いては必然法が萬事萬物の主であつて、萬事萬物は宛かも後と押しの滊罐車が列車を推し進めるやうな原因によつて必然的機械的に起るものと考へられる。併しながら、人間の心理的現象(道德的宗教的美術的社會的の諸現象)に基く所の形而上學に據る時は、自づから目的的宇宙觀を立てるやうになる。此の宇宙觀に於いては、原因なるものが後と押しするのではなくして寧ろ前から理想として引き出すものと考へる。必然的宇宙觀に於いては運動因(エフィシエントコーズ)のみを認めるが、目的的宇宙觀に於いては目的因(ファイナルコーズ)(結局原因)のみを認める。人々は前者を科學的宇宙觀といい

機械的宇宙觀と目的的宇宙觀

兩方は相補足すべきものである

ひ後者を神學的宇宙觀といふが、實は兩方とも形而上學的宇宙觀であつて、而かも其名を異にする所の現象に基く宇宙觀である。自然論者も又宗教萬能論者も、各自身の眞理は絶對的のものであつて他の論のいふ所は誤謬であると主張するけれども、眼の開いた人は、兩方に取るべき眞理があると共に又不完全な形而上學的思想があると認める。善く兩方を調べて見ると、相反對するものではなくして相補足するものであることが分る。目的的宇宙觀が根本的に眞理であるならば、目的因（ファイナルコーズ）を認めると共に運動因（エフィシエントコーズ）も認めなければならぬ、即ち外面から見れば運動因若くは必然原因のみと見えるが、內面から見れば目的因を見る。この進歩した哲學の立場からすれば、これ迄は迚も調和の出來ないものと見えた差異點が見事に調和せられ、幾百年の永い間激しい論戰をやつた所の科學と宗教との間に平和の曙光の燿々たるを見るのである。

科學と宗教との調和

（丙）宗教に就いて

（丙）宗教に就いて

宗教は人性の全體に働く

科學と哲學とは人間の知的活動若くは興味に限るものであるが、宗教は本來實際的のものであつて人性の全體に働くものである。宗教の心理作用は知情意の三つにかゝるもので一つに限らるゝものではない。主觀的にいへば宗教は直覺的の確信に由て起る。第一は宇宙の目的と意義とに關する確信であつて、此確信を簡單に現はすに神といふ觀念を用ゐ又種々の教理を立てる。第二は神に對して人間が正になすべき行爲の標準に關する確信であつて、之を簡單に現はすに人觀や罪觀や救濟觀や來世觀などを立てるのである。此等の確信の或部分は知的であり或部分は意的である、確信たる以上はどうしても此の三要素がなくてはならぬ。人は宗教によつて宇宙及び人生の眞相意義目的に關する根本的觀念を現はして來るが、併し其は知的に表現しやうとするのではなくして實際的に表現するのである。

宗教の因

宗教の實際的動機

例へば、此世に生活する間には屢々困難に出逢つたり、苦痛悲哀が起

つたり、愛するものを失つたり、自己の希望計畫が崩れたりする、さうして自分は終に此世を去らねばならないのである、此世に於ける日常の生活に於いては誠に無意味な味氣なき事柄が多くある、又私心我慾が働いて己にさへ克つことが出來ず本心の思ふまゝならぬ事も屢々である、斯の浮世の中に處して盛んな希望を得元氣を起して健全な生活をするには如何したら宜しい乎、如何して都合よく自己の理想を實行して理性と情性と良心とに滿足を與へることが出來る乎、又家族に對し同族に對し同胞に對し國家に對し社會に對して繁多な責任を盡すに如何して充分の動機を得る乎、といふやうな實際問題に就いて、科學や哲學の解決を俟たずして直覺的に悟識する。此等の問題は當面緊急のもので一日も猶豫が出來ないから、科學又は哲學が解決を與へて呉れるまで待つて居る譯にはゆかない。斯かる實際的の必要が元來人生にあるから、人間は既に大昔に於いて論理的解釋を俟たずして直覺的に理想を立て確信を定めたのである。而して此の理想確信は宇宙人生の目的と意義とを正當に解釋したものとして、之に據て生涯の主もなる方針を定め行爲を決したのである。之が則ち彼等の宗教であつた。彼等は茲に人生の價値を見出し、茲に萬有に對する偉大なる神聖權を見出し、茲に誘惑に對する勝利の力を見出し、茲に慰藉と希望と永遠の生命とを見出した。幾千年間に於ける慘憺たる生存競爭の間に人類を激勵しつゝ今日まで遺存させ且つ發達させた最も有力なる原因は、この宗教的確信であらうと思ふ。

宗教の必要は今日に於いても依然として變らぬ

批評的哲學や科學が未だ起らぬ前に、宗教は人間の生涯の殆んど全體を支配したのであるが、哲學と科學とが起つて、宗教の中に經驗上の根據のない空想が多くあることを明かにした爲に、宗教は大いに其力を殺がれた。人間の發達に從うて、宗教は自己の直覺的信仰を哲學及び科學に批評して貰つて、保存の價値なきものを削除する必要が生じた。此事の爲に或時代に於いては、宗教は終に全く消滅して仕舞ひ其代りに科學

又は哲學が全く人生を支配するであらうと多くの人々によつて豫想せられた事もあつたが、然かし今日に於いて斯かる豫想は段々無くなる。今日の進歩した宗教學者は、公平な立場からして宗教科學哲學の關係を研究し、三者相共に保存せねばならぬことを明かに悟つて居る。哲學と科學とはたゞ智的活動であつて而かも今日未だ完全の域に達して居らない、宗教には科學及び哲學が與へることの出來ない特有のものがある。人間の根本的問題例へば宇宙の目的意義又は人生の價値及び歸趣といふやうな問題に就いては科學も哲學も未だ完全な解答を與へる事が出來ないのであつて、其は宗教的信仰に依るの外はない。今日の科學者は今日の科學が幼稚な時代に在ることを自白する、或程度までは自然界を識つて居るけれども識らない部分の實に多くあることを認めて居る。それから哲學の方に於いても、哲學者の間に議論が紛々として未だ一般の人に滿足を與へるほどの哲學が成立つて居ない。縱し科學と哲學とが其爲すべき

科學哲學の權能の制限

宗教は永久に必要である

事を完成した所が、要するに知的方面のみの完成だから、其が宗教の代りになつて情性若くは意性を支配することは出來ない。人間は曾にどういふ樣に考へねばならぬかといふ事ばかりでなく、どういふ樣に感じ又どういふ樣に行はねばならぬかを知らむと欲する。宇宙に對して如何なる感情を持ち如何に意志を働かすべきか、人間に對しては如何なる態度を取るべきかを知りたい。而かも此事は目下緊急の事だから、科學哲學の完成を待つては居られない。此の實際問題に對して宗教は獨特の職能を有つて居る。宗教は直覺的に宇宙の根本は善であり眞あると假定し、また宇宙の究竟的實在者が人間に對して善と眞とに從うて行はむことを要求すると假定する、而かも此假定は單に知的のものでなく情感も意志も共に働いて立てたものである。宗教家はこの假定を梶として大膽に浮世の航海をやるのだから、若しこの假定が誤つて居るならば終に破船するが、果して眞理であれば安全に其向ふ所の港に達する。

宗教が科學及び哲學と異なる特質

宗教が取る所の凡ての確信は同等の價値あるものではない

右大略述べた所によつて見ると、宗教が科學及び哲學と異なる特質には大體に於いて四つある。即ち(一)宗教は人心の全體を支配するものである事、(二)宗教は啻に人間の主觀的方面に關はるものでなくして、人間生活の全部に關はるものである事、(三)宗教は人をして宇宙の全體に對する態度を定めしむる事、(四)宗教は宇宙と人生との意義及び價値の問題、またこの意義と價値とに對する人間の適當な行爲といふ問題に其興味を集注する事である。

尤も、宗教が取る所の凡ての直覺的確信が同等の價値あるものではない。或確信は暫くにして消え失せ、或確信は永久に存續する。人智の進歩に從うて、或確信が他の確信と調和しないやうな事も起る。宗教歴史を批評的に研究して見ると、實際には無かつた想像的歴史を土臺として自己の教理を表はすやうな事もあるので、科學的若くは哲學的研究の結果と矛盾する場合もある。其場合にいはゆる宗教萬能論者は科學や哲學

進歩的宗教家が批評的科學若くは哲學に對する態度

に反抗し非難するけれども、近代の進歩的宗教家は、歴史上の事實を決定するのは自分の本領でないと承知して、自分の提供する事實を批評的科學若くは哲學が精確に研究して吳れるのを喜ぶ。たゞ望む所は、科學者なり哲學者なりが僻見を去つて全く公平に宗教上の現象を研究する事である。斯くて近來、宗教科學又は宗教哲學なるものが起つて、一は宗教史上の事實を調べ、一は其事實の中にある原理を究めるやうになつた。進歩的宗教家は科學や哲學の教ふる所を謹聽し、兩學を以て宗教發達の上に缺くべからざる案内者とする。近代の教育を充分受けた人は、どうしても合理的また歴史的の宗教を要求する。彼等は人間が後から造つた僞作的歴史上の上に自分の宗教的確信を起すやうなことは敢てしない。又道理に照らして明かに矛盾である事を自分の宗教的確信とするやうなことはしない。今日の進歩した宗教家は自己の宗教的確信の起源性質及び基礎を明確に知らむことを欲し、之がために公平なる科學若くは哲學

哲學と宗教との經界線

の批評的研究を求めるが、然かも科學と哲學とが其任を幾ら盡しても、究竟の眞理を論理學的に明示することは迚も出來ない事を知つて居る。故に結局奥深い所に入つては到底信仰の外なきことを覺悟して居る。この信仰は詰り直覺的のもので理論的に之を證明したり又は反證したりすることは出來ない。之を實際生活上に實行して實驗的に其眞僞を自識せねばならぬ。故に宗教は其信仰を證明するために科學や哲學の補助を求めるのではなくして、唯舊來の信仰の中に在る妄想や迷信や又は無益な分子を取除くために補助を求めるのである。斯くて宗教は自己の缺點弱點を去つて純粹なものとなる。

前に哲學と宗教との經界線を立てることは六づかしい事であると言つたが、此處では比較的に立て易いやうに思ふ。哲學は萬有の究竟的實在者を假定してこれに依て萬有を說明するが、其が啻に說明に止まらずして、其實在者に對して敬虔の念を發揮する時、或は其實在者は我々の崇拜し服從すべき者であると敎へる時、或は宇宙の中に目的のあることを認め、此目的によつて宇宙の意義と人生の價値とを定める時は、最早哲學の界を出でゝ宗敎の界に入つたのである。之に反して、宗敎家が己が信ずる神に據て唯智的に萬有を說明せむとするのみであるならば、宗敎の界から哲學の界に入つたのである。

(ヲ)科學と哲學と宗教との類似點

(T)科學と哲學と宗敎との類似點

人心の三大活動である科學と哲學と宗敎とを正當に了解するには、啻に其差異點を觀るのみならず其類似點をも觀る必要があるから、茲に少しく述べて置かねばならぬ。

三者の目的

(一)三者の目的に就いて◎第一、現象世界に於ける無數の事物の中に秩序を見出す事は科學の一大目的である。第二の目的は將來に起る事件を預見する力を得る事であり、第三の目的は、この知識とこの預見力とに依て自然界を出來得るだけ支配し、以て人生の福利を增進する事である。

この第三は科學の實際的目的であつて、此目的が善く達せられるならば、科學が執り用ふる物質觀若くは勢力觀などが果して絶對的眞理であるかどうかといふ事に就いて餘り顧慮しないのである。その觀念がその實際的目的を達するほどに有効であるならば、其れで滿足する。此點に於いて宗教も隨分似寄つた所があるが、宗教の領分は見ゆる世界ではなくして見えざる世界である。この見えざる世界にも無數の事實があるが、宗教は幾多の信念に依つて其等の事實の秩序を見出し一定の働きに應じて一定の結果の生ずることを預見し、而して心靈界に起り來る不利の經驗を遁れ有利の經驗を呼び起す所の支配力を得むとする。科學は客觀世界に關し宗教は主觀世界に關する相違はあるが、其目的は等しく秩序を發見して預見力及び支配力を得るに在る。故に、科學と宗教とは主もに人間の實際的要求を滿足させむとするものであるが、哲學は之と違つて、主もに人間の知識的要求に滿足を與へんとするものである。哲學の主も

三者の出發點

なる目的は、凡ての現象若くは經驗を總合して統一した組織的秩序を見出すに在る。之を見出すには、總ての物を合理的關係の中に在るものと見、總てを支配する一大原理の下に在るものと見做す。

(二)三者の出發點に就いて◎近代まで凡ての思想家は、宗教の起源は神(又は神々)の奇蹟若くは特殊の顯現といふべき動作に在ると考へ、科學と哲學との起源は、人間が客觀世界を觀察し推理する動作に在ると考へたが、近代になつて斯かる考は間違つて居るのであつて、三者共に經驗から出發するものであるといふ事が分つた。人間が生きて居る間は、何時でも實際の經驗と密接の關係を保持する、而して其經驗から科學も哲學も又宗教も起るのである。初代の人間、のみならず今日でも幼稚な人間は、たゞ説明の出來ない例外の事柄に於いてのみ神を考へるが、進歩した人間は有らゆる物の中に神の活動と顯現とを見出す。啻に宗教のみならず科學も哲學も、經驗より離れるならば誠に無益な思辨に傾き迷妄に陷つ

て仕舞ふ。三者共通の出發點は經驗である、たゞ其經驗に關する問題と研究の方面とが異なるによつて性質が違つて來るのである。

三者の研究法

(三)三者の研究方法に就いて◎一見した所では、科學は觀察と實驗とに據り、哲學は推理に據り、宗教はたゞ權威に據るものゝやうであるが、仔細に之を見れば、三者とも臆說(ヒポテーゼ)を土臺とし、其臆說をば實驗によつて判斷するのである。三者ながら結局は信念から出る確信(コンヴィクション)を主張するに外ならぬ、而かも其確信は理論的にも又實驗的にも充分に證明することは出來ない。例へば、科學は引力といふものが宇宙の何處にも普遍的に働いて居ることを信ずるけれども、之を充分に證明することは不可能である。此の引力說は最初は唯一人の臆說(ヒポテーゼ)たるに過ぎなかつたが、其臆說を實驗にたゞして段々確實なものであると感じ、今日では之を物質世界の凡ての運動を說明する金鍵とするやうになつた。併しながら、此說は果して宇宙萬有の全體に通用し得るかどうかといふと、其は觀察も實驗も出來ない事だから、一つの信仰であるといふ外に仕方がない。又例へば、哲學に於いて論理學上の原理を以て永久的普遍的のものとし、最も遠い星の世界に於いても同樣に眞理であるとするが、之も又觀察上實驗上のものではなくして一つの信仰である。科學に於いても哲學に於いても、確實と思うて永く使用した臆說が經驗に據て否定されて今は忘れられたものも少ない事はない。宗教上の教理の中にも同じものが多くある。宗教的實驗のために舊式の思想が打ち崩されて新式の思想が確立した例は乏しくない。又其の倒まに一たび立てられた新思想の誤つたことを悟つて舊思想に立戻つたものもある。佛國の大革命の時に宗教が一般に否定され排棄され宗教なしに國家を維持しやうとしたが、其がために多くの禍害を釀したので宗教に復歸した人々が多くあつた。

前項に於いて述べたやうに、科學と哲學と宗教とは、其表面から見れば研究法が違つて居るが、其根本に入つて見れば、何れも經驗法に依り

三者の權能の制限

實驗的に自己の臆說を判斷するのである。

(四)三者權能の制限に就いて◎或人は、今日の哲學殊に科學を今日の宗教に比して大いに優劣の差を附けて居る、科學者は世界開闢以來の歷史を精確に知り尙ほ將來の成行を預知し得るが、宗教家が神に就き人間に就きまた人間死後の狀態に就いての考は非常に漠然たるものであつて之を知識と稱するに足らないといふ。併し其は科學研究の淺薄な人のいふ所であつて、深く科學を研究する人はそんな事は言はない、世界の過去及び將來に關する、所謂科學的知識なるものは多くは想像的のものであつて、漠然たる點が少なからぬ事を認めて居る。勿論これらの想像は據所のない空想ではないが、確實な知識といふことは出來ない。それで今日に於いては、科學の唱へる事の不確實な點が多く分つたので、其權能の制限されたことは實に非常なものである。

宗教が解釋を試みむとする問題は、科學の問題よりも遙かに六つかしい種類のものである。科學者の實驗する所また其實驗に由て得る所の推理は、宗教者の其に比すれば容易い。科學は眼前有形の事物を研究しながら宇宙及び人生に關して完全なる知識を吾人に與ふることが出來ないのだから、宗教が幽界無形の事に就いて完全なる知識を與へないことを惡評するのは出過ぎた話であるまい乎。神の事や來世のことや宇宙の目的意義に關する事などの無形的問題の解決を專ら宗教に要求するのは、果して正當であらう乎、果して宗教は獨り死後の狀態などに關する精細なる知識を得なければならぬ責任を擔ふべきものであらう乎、予は强ちさうであるまいと思ふ。其は暫く措き、科學盛大の今代に於いても、唯科學のみに據て己が生涯の全體を處置せむとする人は甚だ稀である、其に反して科學的知識の多い人でも、宗教上の信仰に依賴するものは實に澤山である。啻に科學の力のみでない、哲學の力も其範圍の狹いことは哲學を知つて居る人の明かに認めて居る所である。要するに、今日の所

では宗教が與へる知識の不完全と科學若くは哲學が與へる知識の不完全とは、五十歩百歩の差であると謂はねばならぬ。

三者の實際的價値

(五)三者の實際的價値に就いて◎三者は未だ不完全であつて其權能には制限があるにも拘らず、之に依て人間の得る幸福は亦實に多大なものである。科學に依つて人間はその物理的境遇即ち自然界の事を比較的に明かに了解して來て、種々の方面に其知識を利用し、以て身體上の福利を夥しく獲得しつゝある。宗教に依つて人間はその心靈的境遇を比較的に善く了解して、人生の意味と價値とを識り、高尚な理想と動機とを得、以て己が生涯を善良にし豐富になしつゝある。斯樣に科學も宗教も人間の活動を作興するに與つて力あるものだから、今日世界幾億萬の人間は、兩者に附き添ふ幾多の理論的困難あるを認めながら、其解決を待たずして其が教ふる所に從つて莫大の福利を獲つゝあるのである。又哲學は科學及び宗教が其々の實際的目的を達する爲に多大な助力を致す。眞正の哲學は吾人に實際上の利益を寄與する、差當り實益のある所を取つて、六つかしい理論上の謎の解釋は暫く傍に置いて差支ないと吾人に教へる。人間がその純理上の難問題を解釋してゆくに、決して科學上倫理上宗教上の實際生活を阻害するの必要はないと唱へる。近代の哲學によつて明かにされた一事は、哲學上の問題の解決は思索に依るべからずして實際生活に依るべしといふ事である。

(戊)結論

以上に大體述べたやうな事情からして、近來の進歩的教育を受けた人は、科學と哲學と宗教とは密接な關係を有し相互に補足すべき性質のものであることを承認する。科學は事實を確かむることを特有の職分とし、哲學は現象の裏面に在る原理を發見し、比較的に小さな原理をば一大原理(即ち究竟の實在)の中に包括して萬有を統一的に説明することを特有の職分とし、宗教は經驗に基きながら直覺的に宇宙及び人生の意義と價値とを識得し、之に據つて人間の實際的生活の深淵廣大なる點を教示することを特有の職分とする。而して三者は相連關して各職分を完ふする。科學の助けがなくば、哲學も宗教も抽象的な蜃氣樓の中に浮んで居つて現實の世界に堅固な基礎を置くことが出來ない。哲學の助けがなくば、宗教も科學も多くの迷謬と矛盾に陷る、

科學は自己の目的範圍又は方法に就いて明確な知識を得ることが出來ず、多くの無意識な直覺的要素に醸弄せらるゝ事になり、宗教は非理な迷妄の内に籠居して我儘勝手な振舞ふ事になる。宗教の助けがなくば、科學も哲學も宇宙と人生との目的意義及び價値を辨へず、人事の神聖權（サンクション）を悟らぬ事にある、吾人は宗教に依つて人生に崇高神妙なる意義を與へる所の理想を得聖權を握り、且つ其理想を實現するに必要なる動機を捉へることが出來る、宗教に依つて自己と絶對者との關係を結び而して自己の無限の價値を悟得し且つ之れを實現する。

吾人は、人間を以て一時的の有限者となし一個の物理的若くは動物的な者たるに過ぎないとする見解を、人間の全體を説明し得たものとして承認することは出來ないで、人性の神聖を信じ、且つ其信ずる所を實際生活の上に實行する。殊に宗教的生活に於いて自己の所信を實現し自己の理想を成肉さすのである。但しこの實現成肉は、自己が現に生活して居る世界の事實より離れては出來ない、其は恰も鷹が眞空の中に飛翔することが出來ぬと同樣で到底駄目なことである。又假作の想像的歴史を住家とする不合理な宗教に依つて、吾人の神性が見事に發揮せられやうとも思はれぬ。之が爲めには、どうしても堅固な事實の世界を踏み臺とし、事實の世界に行はるゝ永久的原理に從つて活動せねばならぬ。

是故に、圓滿な性格を作らむと志す人は、自己の奉ずる宗教は歴史的合理的科學的のものでなければならず、自己の取る所の哲學は確實なる事實を基礎として崇高なる宗教的信念を籠めたるものでなければならず、自己の用ふる科學は哲學の光明に照らされ宗教の洗禮（バプテスマ）を受けたものでなければならぬ事を思ふのである。而して、宗教と哲學と科學とが其々の特質を發揮し自由に其々の職分を盡して眞好なる結果を收めむことを希望する。近代の進歩した人の眼には、三者は其裏面に於いて同根一脈のものと見える。彼等は宇宙人生の根本的統一を確く信ずるから、三者の間に到底纒りのつかぬ衝突があらうとは思はない。結局は三者の調和が成ることを信じて居る。固より三者は今進歩の途中に在るから、往々異なる意見が出て來て其が衝突の象を呈するけれども、却て之に由つて進歩を促進する。之に依つて各自の見解の缺點も分る譯で、其缺點の分るのは三者調和のために祝すべき事とする。公平なる心を持つて居る者は、三者の一に偏することを好まず、三者相共に働いて人間の福利を增進することを望むのである。

第八章　美の念並に美學

美念は人間の強い固有性である

美によつて生を飾らんと欲する心は、人間の強い固有性である。一般の人に美醜の識別力があるのは、善惡の識別力のあるが如くである。如何に劣等な人種と雖も好美心がある。人類の最古の遺物として知られて居る、前の石器時代（Paleolithic）の器具にも、當代に存在した動物の繪が見事に書かれてある。

美念の對象物に就いては人によつて異なる

斯樣に美の念は萬人共通のものであるが、如何なる物を以て美とするかといふ事に就いては色々の差違がある。其差違は、個人の間にもあり又人種の間にもある。同じ家族の者でも甲と乙と相同じからず、同じ人種の者でも時代によつて相異なる。小兒と大人との趣味は大分違つて來る。故に、美の念は人間の固有性であるけれども固定したものではない。發育や敎育や境遇の事情に由つて變遷し、心の全體の進歩に連れて發達する。それが發達すればする程、美醜の識別が明瞭になり、其に伴ふ快不快の感覺が鋭敏になり、生活上の萬般に於ける美感の勢力が增大して來る。

我々の日常生活に現はれて居る美の觀念

我々の日常生活に現はれて居る美の觀念を細かに調べて見ると、意外に廣く且つ多いことを發見する。例へば、衣服の形や色や模樣などは美の觀念に基いて定められて居る。元來衣服は裝飾心から起つたもので、防寒又は耳風として用ゐる習慣は、裝飾的仮備が隨分進歩した後に起つたのである。禮服は固より、平服と雖も美の觀念の織り込んで居ないものはない。色に依つてか、模樣に依つてか、縫方に依つてか、何か必ず美の念を現はして居る。ボタン一つ附けるにも不釣合にならぬやうに注意してある。囚徒の着物は甚だ殺風景であるが、其さへ赤色とか鉄色とか多少の美念は添へてあるやうだ、たとひ無地白裝束の物でも少くともその縫目と斷方とには美の心配が籠つて居る。若夫れ、大祭日に繁華な場所へでも行つて見やうなら、千紫萬紅、百花爛漫、衣服に就いて如何に美の觀念が運用せられて居るかを窺ふことが出來る。一國民の發達の消息は、衣服を見ても大抵窺はれる、何となれば、衣服は美念の發達の程度を表はしその程度は文明の一大標準となるからである。尙ほ人間の美念が日常生活に於いて表現して居る例として、家屋に就いて考へて見るのは適當であらう。家屋なるものは大體利用的のものであるが、審美的の所も隨分多い。極貧者の家の外は多少の美的工夫がしてある。屋根の形

美學の起源及び發達

とか、壁の色とか、天井の目とか、柱の置樣とか、疊の敷工合とか、室の色合とか恰好とか、中々美の念は多く働いて居る。故に、大工は啻に建築者であるのみならず、又一種の美術家である、此處が大工たるの趣味の存する所であらう。美的趣味のない所には人心自ら荒む。近來工場に於いて働く職工が、兎角不平の波を起して忌々しきことを仕出來すのは、色々の原因もあらうが、器械的の働きの間に美的趣味の缺けたる爲に、心が自然と荒立つのは、一つの重もなる原因でなからうか。如何なる仕事に於いても美的趣味の必要な事は、食物に鹽氣の必要なるが如くである。小は一日の食事より大は幾年若くは幾十年の渴案に至るまで、美の感念に支配せられないものは殆んど稀である。人間生活の趣味の大部分は美の觀念に在るといつても過言であるまい。

然かも、美に就いて深く研究し了解する人は少ない。實は美を科學的に研究する所謂美學なるものは、最も新しい科學の一つであつて、大體に於いて最も幼稚な科學の一つである。諸人種の中で、科學的若くは哲學的に美の研究を試みた卒先者は希臘人である。而して美と善との關係に關する論の發頭人は、恐らくはソクラテスであらうと思ふ。彼れの見解によれば、美と善とは同性である、兩方ながら人生を益する故に美でもあり又善でもある、美の美たる所以は、人間に何かの利益を與へ滿足を與へ或る合理的目的に達せしむるに由るといふ。此見地からして、プラトーン及びアリストテレースは美論を開拓しつゝ色々の思辯を立てた。それから四五百年を經て、新プラトーン學派の開祖といはるゝプロチノスが、百尺竿頭一歩を進めて、美學はやゝ系體を造らむとするに至つたのである。かれら希臘哲學者の論の大體からいふと、人間の活動の結局目的は眞と美と善とに在る。其は今日の心理學者が識別する心の三性質、即ち知と情と意とに對する三大目的であるといふ事になる。近代になつては、獨逸の學者によつて美學が一層精確になつて來た。美學といふ名稱も、獨逸人なるバウンガーテン(Baumgarten)が、五官によつて得る所の知覺といふ事を意味する希臘語のアイスセシス(αἴσθησις)から取つた者である。當時論理學が非常に盛んであつたが、斯學は知性の働きであり、思考の結果であり、其目的とするものは眞理であるからして、彼は之を以

て五官の働きに餘り關係しない主觀的のものとし、此外別に五官の働きによつて得るところの知識を組織的に研究する學問が必要であるとして、Aesthetics 即ち美學といふ一新科學を立てた、而して其目的は美であるとした。此時から美學の範圍は段々狹くなつて、終には五官の働きによつて得る總ての知識に關せず、たゞ美に關する學となつた。

美學上の問題

美の研究に於いては、道理上また實際上多くの難問題がある。例へば、美の本質に就き、美の起源及び發達に就き、美の賞鑑に就き、美を表現する最良方法に就いての問題がある。斯かる問題があるから、美學と云ふ一つの學問が起つた譯である。それで斯學を深く研究するに從うて、益種々の見解が生じ、理論が立ち、事實が現はれて來る。美學の歷史の興味多い理由は亦こゝに在る。

美學の分類

普通に美學を分けて建築と彫刻と繪畫と音樂と劇と文との六つとする。六つとも各その術とその學との二方面がある　其内の一分科に達するにも中々の時間と勞力とを要するから、自然に六種の專門家に分れる。其がために、各分科とも割合に長足の進歩をなして、今日の域にまで及んだのである。專門家の美的觀念若くは技術の上進は、一般の人を感化して、社會の美的要求を增殖する。

美念の大部分は情に在る

美の觀念の内には知的要素があるに相違ないが、その大部分は情的要素である。概していへば、知性は眞理又は事實の問題を取扱ふものであるが、情性は物の價値に關する問題を取扱ふ。いはゆる價値判斷といふ術語はこゝから生じたものであるが、美の觀念は重もにこの價値判斷に支配せられる（此術語は宗教又は道德にもよく用ゐられる）。

今日の美學に於いて論究せらるゝ問題

今日の美學に於いては、美念の起源や性質や、美念と知性又は感覺又は想像力との關係や、莊嚴凜慄身に染みわたるやうな美的感覺の心理的及び生理的解釋や、美と數學との關係や（美は形や色や音の調和に關係するが、この調和は數學に關係する）、美の中に入るべき情の種類や其數や、美の主觀的部分と客觀的部分との區

別及び其關係や、美學の歴史的起源と發達と傳播や、美學の類別法や、美と利益との關係や、美と究極實在者との關係など、多樣多端の問題を論ずる。

美學の位置

こゝに一つ重要にして且つ興味ある問題は、美學の位置如何といふ事である。本書第四章に於いて諸學者の知識分類法を略述したのであつたが、其處にも見らるゝ通り、諸學者は餘り美學に注意を拂はなかつた。普通の學者は大抵、美學を以て科學の範圍外のものと見做し、科學分類表の内に入るべき價値のないものゝやうに考へた。然かし百五十年この方、多くの哲學者は美の問題に就いて多少論じ、知識類別表の内にも大抵は美學を入れて居る。今日の我々は、美學は正當の位置を占むべき科學と見做すのであるが、斯學がよく美の事實を研究し且つ叙述する所からいふと、叙述的科學の内に入るべきものと思はれ。又斯學が美の感念を解釋したり、美の基礎を論究したり、主觀的美念とこの美念の客觀的表現との關係を説明したり、その裏面の原則を尋求したり、美と究極實在者との關係を考究したりする所からいへば、解釋的科學の内に入るべきものと思はれ。又更に、美の標準を立て、之を以て思想上及び行爲上の規範となさんとする所からいふと、規範的科學の内に入るべきものと思はれる。それで詰り、この三種の科學の部類に係るのである（尚ほ美學の性質と部分と位置とに就いては、ページを參考せられたし）。

第九章　道德並に倫理學

人間が道德の觀念を有し、且つ道德的生活の大切なることを感ずると共に、道德の標準の必要を悟り、而して此標準が偉大の權能を有することを認めた其淵源は實に遠く且つ深い。道德は人生に於ける著しい事實であり、從つて道德を科學的に論究する倫理學の位置は重いのである。されば本章に於いて、少しく其位置を論ずるのは無益でもあるまいと思ふ。

第一節　術語に就いて

英語の Moral 又は Morality は羅典語の Mores 又は Moralis から出たもので、其元の意味は、或場合に於ける普通の行爲、例へば、風俗上又は習慣上の行爲を現はすものであるが、羅馬の有名な學者シセロは、それよりも深い意味、即ち希臘語のエソス (ἦθος) 又はエシカ (ἠθικά) の意味に用ゐた。

シセロの用法

この希臘語は、元の羅典語と同樣に風俗習慣を意味したものであるが、希臘人がその風俗習慣を研究して人間の行爲上の標準を立てんとしたので、今日我々がいふ所の道德(モーラル)又は倫理學(エセックス)の意味が段々附着して來た。シセロは則ちこの發達した意味に用ゐたのである。

今日の用法

今日の英語では Moral (道德)を以て具體的の行爲を表はし、Ethics(倫理學)を以て道德的行爲を科學的若くは哲學的に研究する學問を表はす。間々この區別を立てずして兩方を交る〴〵用ゐる人があるが、嚴重な意味で用ゐる時は此區別を立てる。

(日本語の道德といふ言葉は、羅典語や希臘語の其れよりも優つて居るやうに思ふ。何となれば、此道といふ言葉は人の歩むべき根本的大道を意味するので理想的の要素があり、又この德といふ言葉は實際の行爲を意味するので具體的の要素があり、主觀と客觀との兩方を同時に表はすからである)。

第二節　道德的生活

人間の道德的生活の起源は古いものである

歷史が示す通り、人間の道德的生活の起源は社會的生活の起源ほど遠かなものであつて、前者は後者の一方面と觀るべきものである。人間が團體を造ると、個人々々の關係を整へ全體の統一を結ぶ所の規律若く

は理想の必要を生ずる。例へば、男女の關係、親子の關係、主從の關係などに就いて、或る規律規範が無くてはならぬやうになる。之が無くては放縱逸亂に陷つて全體の統一を保つことは覺束ない。曾に人間相互の關係のみならず、人間と神との關係に就いても、一定の習慣が生じ、やがて之が一種の規律となる。此等の規律は一般に承認せられて或る權能を持ち、之に對する行爲の如何によつて是非善惡を判つ。斯のやうに、人間が團體的生活をなす以上は、道德的生活の必要がある、從つて團體的生活の內には理想的の要素があるのであるが、此要素の出所は何處ぞと尋ぬれば、其は詰るところ直覺であると謂はねばなるまい。

道德的生活若くは理想には色々の種類がある

所で、道德的生活若くは理想は、異なる民族や種族やの間にのみならず、同じ民族種族の間にも思想の程度により又は時代の前後によつて、色々の相違がある。時としてはその相違の餘り甚しきを怪まざるを得ない事がある。太古或る地方に於いては、親が年老ゆれば子が之れを殺すのは道德的行爲であると考へた、勿論子が喜んで之をするのではないが、親の命令であるから之に從ふのは正に爲すべきの義務だと考へたのである。又弱體の子を殺す事を以て親の爲すべき義務と考へた地方は少なからぬ。プラトーンすらも、或場合に於いては、子が老親を殺すのは至極適當である。此性が少しもなければ、社會は決して成立し得ない。例へば、人間に善務責任の念が少しもなければ、少しも信用が出來ないから名個人は全然孤立の生活をしなければならぬ。若し或地方の總ての人が突然に道德心を失つたならば、忽ち暗黑紛亂の狀態に陷り、或は竊盜、或は强奪、或は爭鬪、或は殺害、其他忌々しき樣々の罪惡が續々行はれて、迚も住むに堪へぬ地獄となるに相違ない。斯かる慘憺たる優勝劣敗の巷には、生命を完ふする者は甚だ少數であらう。女子も男子と同樣に道德心を失つて了つたら、滅多に子を生まないであらう、縱し生んでも暫らくにして育兒の勞に倦み疲れて打遺つてしまふから、終に種滅するであらうと想はれる。そは兎に角、道德心は社會の統一を保持する纖維であつて、之が無ければ社會は存立しないと云ふ事は、疑はれない。近代の社會及び其文明を研究する人々がよく主張することは、今後に於ける社會の發達は、第一に道德の發達に俟たなければならぬといふ事である。

人間の道德性は社會の結締纖維である

世界的道德心の發生

これ迄の道德は、多くは家族的種族的若くは民族的であつて、他から

侵害せられるとか又は團體の利害に關するとかいふ特別の場合には盛んに働くけれども、平素無事な時には眠つて居るやうなものであつた。所で今や交通の發達と文明の進歩とにつれて、個人の道德狀態は團體に影響し團體の道德狀態は世界に影響することを認識して來るので、道德心は段々廣くなりつゝある。各個人が社會的精神を盛んにして全世界の幸福のために努力しなければ、決して滿足な文明を產み出すことは出來ないと、段々感ずるやうになつて來た。若し各個人が廣い社會的道德心を以て、交際又は業務に就いて正直であり忠實であり精勉であるならば、社會的道德心が盛んになれば、社會の狀態が如何に良くなるであらうか。社會的道德心が盛んになれば、破倫非行詐僞竊盜損害爭鬪などのバチルスは容易に發生しない。社會の惡瘤たる警察や裁判所や監獄なども、用事がなくなるから、其莫大の費用を他の生產事業に轉用することが出來るのみならず、信用道德が堅固になり、事業上の重もなる危疑がなくなるから、生產的興業が盛んになるであらう。斯くて人間進歩の大障害物となつて居る憂慮と疑念との荊棘が取除かれて、全力を殖產的活動に集注することが出來るならば、其結果や實に測るべからざる事と思ふ。

社會的道德心の結果

倫理學の生ずる所以

されば、各個人の公共的社會的道德心を高むる道如何といふ事は、社會の第一問題である。此問題を解決せんとして、或は道德的生活の現象や、或は道德的理想の性質及び之を實現する方法や、或は道德的實行の困難なる理由や、或は道德的標準の相違する理由などに就いて、調査し研究する其結果として、一種の學問が起つた、いはゆる倫理學は則ち是である。

第三節　倫理學

宗教研究の結果として神學が生ずる如く、道德研究の結果として倫理學が生ずる。この倫理學は知的方面から、道德を研究するものであるから、必ずしも實際の道德と結合するものではなくして、不道德の人であつても理論上之を研究する。

倫理學の性質

斯學に於ては(一)道德上の事實と(二)其事實の解釋と(三)其事實を判斷する標準とを研究する。故に斯學は、一方からいへば科學であり他方からいへば哲學であるが、啻に叙述と解釋とに止らずして、行爲に直接の關係を結ばんとするものである。道德的理想の可否や價値や權能に就いて研究するものであるから、規範的の科學である。

倫理學と哲學及び宗教學との關係

如斯、倫理學には種々の方面があるからして、之を研究するには廣い知識を要する。啻に道德ばかりでなくして哲學及び宗教學をも研究しなければならぬ、何となれば、この兩學は倫理學に多大の光を與へるからである。道德的生活は他の生活と關係せずして立つものでない、之は人間生活の一方面であつて、他の方面と大切な關係を有つて居る。吾人が或は道德或は宗教或は科學或は哲學と其々に區別するけれども、其は言語上若くは思想上の便宜に由る區別であつて、人間生活そのものは一體のものゝ或る部分を抽き出して特別に研究するので、色々の學問に分れるのだけれども、一部分は他の部分と共に一個の人格として密着に織り込まれて居つて之を離すことは出來ない。故に倫理道德を研究するには、之に關聯して居る哲學及び宗教に及ばざるを得ないのである。

善と惡との區別、善惡と利不利との區別

第四節　倫理學上の根本觀念

いづくの人も、善と惡との區別を立て、又善惡と利不利との區別を立てる。此等の觀念の意義を明かにする事は、倫理學の一つの役目である。其は明々白々であつて別に研究を要しないやうに思はれるが、よく其意義をたゞして見ると、案外明白でない事がある。比較道德學が示す通り諸國又は諸代の道德思想は樣々に違ふ。同じ種類の道德思想であつても、或人は其内の此要素に重きを置き、或人は彼要素に重きを置く。時としては甲と乙との意見が全く反對する事もある。故に一見明白のやうに思

はれる倫理學上の根本觀念も、研究を要しないほどに單純なものではない。

第五節　倫理學上の重もなる問題

(一)是非善惡の心理的起源に關する問題

(第一)是非善惡の心理的起源に關する問題

之は人間の行爲に就いて道德的判斷を下す標準を如何にして得るかといふ事であるから詰りは良心の起源問題となる。此問題に就いては直覺說と超絕說と功利說と進化說との四種があつて各々の哲學から出て居る。前の二者は人の知識の原則は先天的にして心の內から生ずるものと見做し、後の二者は經驗的にして心の外から來るものと見做す。此哲學的見解に基いて、四種の倫理說が分かれ出て居るのである。

(甲)直覺的倫理說

(甲)直覺的倫理說によれば、是非善惡の區別を立てる能力は人間固有のものであり、未だ經驗をしない先から人心の內に具はるものである。我

我は之によつて總ての經驗を判斷する。故にこの先天的知識は、感覺を經て得るところの後天的知識に優るものであつて、總ての行爲を判定し支配する權能がある、道德上の神聖權はこゝに基するのであるといふ。

(乙)超絕的倫理說

(乙)超絕的倫理說によれば、人間の道德心は究極的實在者の一種の顯現であり活動である。自然界に於て眞又は美の顯現と活動とを見る如く、人間界に於て善の顯現と活動とを見る。彼は特に人間の良心に於て人間に接觸する。良心は即ち神の聖殿である、此聖殿の內より發する聲は則ち神の聲であるといふ。

(右の兩說とも人間の道德心又は道德の規準の根源は、感覺を通して得るところの經驗よりも遙かに深いものだと見る。但し、甲は其根源の果して何であるかを說かないが、乙は之を說くの差異がある)。

(丙)功利的倫理說

(丙)功利的倫理說によれば、凡ての道德的觀念は經驗の結果に由つて生ずるのである。其結果を省察して行爲を判斷する原則を得る。即ち過去の經驗を概括し一般化したところのものを道德上の規矩標準として、現

在又は將來の行爲を判斷するのである。而かもその規矩標準は利福を本とするのであつて、利福を來たす行爲は是であり善であるが禍害を來たす行爲は非であり惡であるといふ。

(丁)進化的倫理說

(丁)進化的倫理說は前說によく似て居るもので、前說が進化した一形式といつても宜い位である。その違ひは、前說の個人的であるに對して人類的である所に存する。而も啻に人類發生以後の經驗のみならず、其以前の經驗をも含めて論ずるのである。幾百萬年間の斷えざる經驗によつて、行爲に關する利害禍福の觀念が、神經腦髓に印象を遺し、其が遺傳となつて萬代に繼續する。いはゆる良心は、この遺傳的の働きである。遺傳的の働きであるから直覺的に感ずるけれども、實は本來經驗に由つて生じたものである。良心の判斷に冒すべからざる權能があると感ずるのも、畢竟遺傳の作用に外ならぬといふ（此の見解は頗る面白くもあり又道理もあるが、果して之で滿足が出來やう乎、大いに論ずべき餘地がある）。

(二)道德的行爲の目的及び動機に關する問題

(甲)快樂觀

(第二)道德的行爲の目的及び動機に關する問題

(甲)此問題に就いて古代の希臘人は頻りに論究したのであるが、或人は普通の行爲の目的と同樣に快樂であるとした。希臘人の用ゐたヘドネー(ηδονη)といふ言葉は、英語の Hedonism 即ち快樂說を意味する。尤もこの快樂說にも、肉慾的快樂を目的とするものと精神的快樂を目的とするものとの別がある。古代のエピキュリアン說や、近代の功利說又は進化說の或一派は、快樂說（ヘドニズム）に屬する。

(乙)自我實現說

(乙)又或人は、道德の目的及動機は人間本性の實現にあるとする。凡て人には未だ實現しない多くの性能があるが、其內の道德的性能を發揮せむとするのが道德の目的であり動機である。即ち其欲求は客觀的でなくして主觀的である。人間の本當の滿足は、肉體上の快樂に依つては勿論理性上の快樂に依つても得られないのであつて、人格性の圓滿なる發達に依らなければならぬ。と斯樣に主張する說を、英語で Perfectionism（完全

說)又は Selfrealization (自我實現說)といふ。

(三)意志の運動に關する問題

(第三)意志の運動に關する問題

(甲)自由說

(甲)自由說(リベラリアニズム)によれば、人間は啻に道樂的判斷をなし得るのみならず、其判斷に據つて自己の行爲を自由に決定することが出來る。この自由決定の働きがないならば善人と惡人とを差別して褒貶する事は出來ない。人間の行爲が星辰の運轉や微分子の運動の如く必然的のものであるならば、道德的の意味はない。我々の生活に於ける凡ての經驗が必然の法則に支配せられて居るものなら、道德的判斷を下すことも出來ねば道德的標準も立ち得ない。勿論、人間の生活に於いて又その心に於いて、從はねばならぬ法則があり、從つて必然的の部分のあることは明白であるが、意志の自由撰擇がない所には道德上の行爲とか觀念とかいふものは有り得ないといふ。

(乙)決定說

(乙)決定說(デターミニズム)には二種がある。一は全く意志の自由を否定し、人間の行動は物質の運動の如く必然的のものだから、正邪善惡の差別をなすべきものでないといふ。他の一は、物質的必然と心理的必然との區別を立て、前者の場合に於ては道德的意義は無いけれども、後者の場合に於ては其が有るといふ。即ち心理的必然は自然界に行はれて居る物質的必然とは違つて、動機や目的などの感化に由つて心の働きが定まるのであるから、必然とはいひながら道德上の義務責任があると主張するのである。

中和な決定說

それで第一種の極端な決定說はさて措き、第二種の中和な決定說によれば、我々人間は、必然的の法則が働きつゝある世界に住んで居るから道德者になり得るのである。我々の身體のみならず心の働きさへも一定の原理に從ふので、責任があり義務がある譯である。若し此世界に必然の法則がなく一定の原理がなくして、凡て偶然の運動や出來事ばかりであるならば、人間の行爲は宛ながら波間に漂ふ藻草の如く、一向據所がないから、道德的生活は現はれない。のみならず道理的生活すらも現は

今日の決定論

れないといふ。

昔日の決定論者は、神の主權といふ事を土臺として、人間のあらゆる行動は神の意志によつて決定さるゝと說いたが、今日の決定論者は、近代の自然科學及び實驗心理學が現はす所の事實を土臺として、人間の行爲は自然界の法則によつて決定さるゝと說く。近代科學の說によれば、人間の體（神經も腦髓も）の變化は物理學的法則によつて定められてある、即ち體を組織して居る細胞また其細胞を組織して居る微分子の結合若くは運動は、必然的に決定せられて居るから、體が自由の運動を取り得ることは不可能であるといふ。螢に體の事ばかりでなく、心の變化運動も又同樣であつて、その變化運動の狀態は一々その先行狀態に由つて決定せられるといふのである。

此論に對する批評

『果して其が眞であるならば我々が謂ふ所の意志は全く心外の勢力によつて支配せられるものと云はればなるまい。さすれば意志の自由といふ事は迷妄である、義務とか責任とか褒貶とか賞罰とかいふ事は無意味である。けれども、實際の人間社會に於いては責任も問へば賞罰も行つて居る、蓋は其が無ければ社會は成立たぬからである。精神上の自由行動は、物理上の必然運動に比して優るとも劣らざる明確な事實であるから、一方の事實のみを取つて他方の事實を打消すことは許さぬ。』

『自由說と決定說との討論は、既に幾百年も引續いて居るのであるが、將來とても永く行はれるであろうと想ふ。何となれば、兩說ともに經驗に基いて或る眞理を有するからである。』

(四)道德的責任の起源に關する問題

(甲)自律說

(乙)他律說

（第四）道德的責任の起源に關する問題

（甲）自律說（オートノミック、セオリー）は、道德的責任の起源を心の內に認むるものである。意識的若くは無意識的に道德的理想を立てるのも、又その理想に從はねばならぬといふ觀念を起すのも、又その理想に從ふ原動力の發するのも、心のものゝ働きに由るとする。但し、其が知性の働きに屬するものといふ見解と、情性に屬するものといふ見解との兩種類がある。

（乙）他律說（テロノミック、セオリー）は、道德的責任の起源を心の外に認むるものである。即ち道德の基礎又は法則は心外の或る權能に由つて來ると考へる。此說に於いては、道德上の原則と道德上の原動力とを明かに區別し、前者は客觀的に存するものとし、後者は主觀的に存するものとする。而してその道

德上の原則は團體全體の意志に在るといふ者と、神の意志に在るといふ者との差別がある。

（五）倫理學の位置に關する問題

（第五）倫理學の位置に關する問題

本書第四章に於いて述べた通り、學者等の科學分類法は樣々であつて、倫理學を一種の哲學として觀る者もあれば、應用科學として觀る者もある。而かも銘々、倫理學を以て自分が專門として居る學問の領分に屬するものと主張するのは、頗る面白い事である。昔から神學者は倫理學を神學の一部分と見做したのであるが、近來は、又奇體にも心理學者及び社會學者は勿論、生物學者も――物理學者すらも――各自家專門の原則を以て倫理學を說明するのみならず、自分の說明法でなければ本當に倫理學を解することは出來ないと主張する。例へば、心理學は道德生活の心理的要素を以て最も重要なものと考へ、宗敎家は道德生活の宗敎的要素を以て根本なものと考へる。所で、倫理學の專門家は、斯學の獨立を主張して、道德的現象の精細な觀察研究は自家特別の本領であるといふ。勿論道德的現象は諸他の現象と密接な關係があるから、倫理學外の諸學からも道德的現象を觀察し研究するのは尤もではあるが、其は序での事であつて本領とする所でないといふ。

第六節　西洋倫理學史の概觀

西洋に於いて、倫理學の研究は希臘人から始まつた。其萠芽はソフォイ派（頁參照）に在るが、ソクラテス（ソクラテス）は此派の淺見と詭辯とに反動して、一般人の承認し得べき正確なる道德的原則を現はさんとしたので、之が正統な倫理學の端緒ともいふべきものである。彼が最も高調したことは、智慧を愛するといふ事、則ちフィロソファーであつて、眞正の智慧を得るのは眞正の德を得る所以である。故に、惡人を善化するの道は唯眞知識を與へるの外はない。人間第一の務はこの眞知識を得るに在るとした。

ソクラテスの弟子の時代の學派

所がソクラテスの弟子の時代になつて、道德上の見解が四つに分れ（マヽ）（リアン派、プラトーン派、シニック派、サイレネイック派）互に論辯し且つ實際生活に應用したのであるが、段々論議の末 Hedonism 即ち人生の目的は快樂に在るといふ說と、Stoicism 即ち人生の目的は德にあるといふ說との二學派に歸した。前の快樂說は又エピキュリアン說ともいふ。

基督敎が道德に及ぼした影響

基督敎が歐羅巴に入つてから、道德及び倫理學に新らしい要素が加はつた。斯敎の道德主義は、心の狀態に重きを置き品格を尊ぶ點に於いてストイックの道德に似て居るが、又大いに違ふ點がある。ストイック派が純粹な道德は眞正の知識に由つて生ずるとしたのに反して、基督敎倫理學者は信仰と愛とに由つて生ずるものとした。一體、希臘の倫理學者は、人の道德は知性に基くものであると考へたが、基督敎の倫理學者は意性と情性とに基くものと考へた。又前者は男女間の道德的關係に就いて何も敎ふる所がなかつたが、後者は之に就いて嚴正なる敎を立て、當に行爲のみならず精神を聖潔にしなければならぬ、『凡そ女を見て色情を起す者は心中既に姦淫したるなり、若し右の眼汝を罪に落さば抉き出して之を棄てよ……』と示して居る。尙又、前者は個人の價値といふ事に就いて餘り敎へなかつたが、後者は此事を非常に重んじ、各個人には無限不朽の價値がある、而かも其價値は地位や血統や學識や技倆などに由るにあらずして、人間本來の性質そのものに由る。故に奴隷や又は赤子を殺すことを嚴禁したのであるが、希臘の倫理學者は之に就いて殆んど無頓着であつた。其他、基督敎が尊重した博愛又は謙遜などの道德的主義は、希臘若くは羅馬の倫理學者の敎訓に餘り見えないのである。

近代の科學及び哲學が倫理學に影響したる

近代に至るまでの基督敎倫理學は、科學的若くは哲學であるよりも寧ろ實踐的であつたが、近代の科學及び哲學の興隆は倫理學に影響を及ぼし新たな發達を促がした。道德は人間生活の最大要件であるから、近代の凡ての哲學者は、自己が執るところの哲學上の根本的觀念に基いて倫

理說を立てる。その倫理學說の種類を擧ぐれば、直覺說、超絕說、功利說、進化說、意志決定說、意志自由說、ヘーゲル說、新ヘーゲル說、主理說、主情說などである。

第七節　宗教及哲學と道德及倫理學との關係

道德又は倫理學及び宗教哲學と深い關係を有つ

或る倫理學者は、宗教を以て寧ろ道德の能力を弱め且つ道德の品質を下げるものとするが、之に反して、健全な道德は宗教の基礎なくして立たないと論ずる倫理學者も少なからぬ。哲學と道德との關係に就いても、又兩樣の意見がある。それで今此問題に就いて少しく卑見を述べて見たいと思ふのである。

(一)人間生活の一方には他方に聯關する

(一)抑も人間の心は一つの統一的のものである。固より生活上の現象は種々雜多であるが、其等は個々別々のものではなくして同じ心の幹から出て居る枝である。科學なり、哲學なり、倫理學なり、道德なり、宗教なり、凡ての思想知識經驗は一つ心の泉から出て居る流れである。故に一方の現象は他方に關聯する。例へば、熱誠な道德的精神が動けば其が生活全體に善い影響を及ぼすが、之に反して道德に冷淡であるか又は卑劣であるかすれば生活全體に惡き影響を及ぼす。全體といへば其內に宗教的生活や知識的生活や經驗的生活などを含むことは言ふまでもない。又例へば、形而上學に熱心を籠めて甚大の興味を感ずると、其が宗教にも道德にも又實際の生活にも影響して來る。哲學上の思想にしても、唯物的であるのと唯心的であるのと凡神的であるのと有神的であるのとで、其思想が道德上の生活に及ぼす結果が其々異なつて來る。

(二)歷史上の事實

(二)歷史上の事實に徵しても此事は明かである。例へば某の國民の中に劣等な宗教思想が入つた爲に　道德の標準が低くなり生活の狀態が惡しくなつた事實は多い。又或る時代に唯物的哲學が盛んであつた爲に、其

迄非常に有効であつた宗教的信仰も道德的觀念も破壞せられ從つて實際生活に由々しき惡結果を來たした事實もある。又或場合に於いて、高尙な宗教又は哲學が比較的に劣等な民族の中に入つた爲に、萬事が革新せられた事實もあり、又之が爲に從來の信仰や道德標準を離れて無宗教と不道德との狀態になつた事實もある。高等なものが入つて來た爲に劣等な物が廢れた結果、沈退若くは墮落の狀態を現ずる事は間々ある、布哇民族の如きは其一例である。斯樣な次第で、宗教及び哲學と道德及倫理學とは重要な關係があるから、之を全く別々に離して研究しては、到底不完全を免かれない。

(三倫理學は孤立し得べきものではない)

(三)然らば、倫理學はたゞ道德上の智的識見のみによつて立つべき乎、將た其以外の觀念をも俟つの必要ある乎。思ふに、狹義に於いては前者の見解で差支あるまい、即ちたゞ道德的現象を研究する科學として道德に關する判斷をなし識見を表はせば足るであらう。が然かし、熟ら〳〵考へて見ると道德上の判斷をなし識見を表はし得るのは、第一に當人の心理性に依り、第二に社會の性質により、第三に宇宙の性質に依るのであるから、心理學と社會學と形而上學とを度外に置くことは出來ない。

試みに心理學との關係を考へて見ると、道德上の研究は心理の研究と離れることは出來ない。凡ての人は自分の行爲若くは意志に就いて責任を有し、善行善意は之を自賛し惡行惡意は之を自責するが、其は心理の法則に由る。即ち凡ての人は自由撰擇といふ心理的働きによつて或は善を爲し或は惡をなすのであり、又之によつて判決を下すのである。左れば、近代の或る心理學者が主張する通り、人間の行爲と意志とは絕對的に條件附きの者である。若し其が必然的のものであるならば、善惡の區別又は賞罰を爲すことは出來ない。果して道德は心理的意志に由つて起り心理的狀態に依つて判斷せらるゝものとせば、倫理學と心理學とは密接な關係があると謂はねばならぬ。

又倫理學は形而上學と緣のないものではない。凡ての人は何かの目的を以て働いて居るが、其目的は直接に又は間接に意識的に又は無意識的に、人生に就いての觀念若くは宇宙に就いての觀念に關係する。若し人生若くは宇宙そのものゝ本來の性質が惡であるならば、人間が如何に善事の爲に努力しても竟に失敗するに極まつて居るが、其が善であるならば、竟に成功すると信じて勇ましく活動することが出來る。斯くの如く、形而上學の觀念は道德の觀念に大いなる影響を及ぼす。故に、人生觀宇宙觀の土臺から決定してかゝらねば、倫理學を堅固に打建てることは覺束ない。而してその人生觀宇宙觀の決定は形而上學又は宗教の問題であるから、倫理學は形而上學又は宗教に對して不關焉の態度を取ることは出來ない。詰り、倫理學の基礎は之を倫理學外に求めねばならぬ事になるのである。

(四)實際上の證明

(四)且つ實際の方面から見ると、倫理學は宗教又は形而上學と無關係でない事が明かである。蓋し、倫理學が人に倫理の實踐を促がすに當つて最も重要であり且つ困難であるものは、道德上の知識や理想や判斷を與へる事ではなくして、其實踐の動力たる確信と熱誠とを與へる事である。我々の經驗がよく示す通り、道德の實行といふ事は容易なものではない、實行しやうと思うて努めて見ても度々失敗するからして、兎角自己の力に就いて失望する方に傾き易いのである、そこで道德上の旺んな希望を鼓吹し信念を培養する宗教的精神的の方法が是非必要になつて來る。凡て道德の實行は善の成功勝利を確信しなくては六つかしい。他人の利福のために熱誠德を行うて倦まないのは、自他の利福と敢て矛盾しない。否な畢竟一致であるといふ確信に由る。古今の道德家はこの確信を養ひこの熱誠を起す爲に、或は形而上的觀念を借り、或は宗教的情感に訴へたので、而かも此外に道を見出さなかつたのである。即ち倫理外の動機に依るの外はなかつたのである。

若し有神的哲學や高等宗教の教ふる所が眞であるならば、我が現實の生活は我が生活の全部ではなく、現生は全生の端緒に過ぎない、而して又、我は社會といふ全體の一小部分に過ぎないのである、されば目前の利益に執着したゝ自己の幸福に腐心するといふのは、根本的に自我を誤解して居るのである。永遠の將來に亙るところの我が生の全部を達觀し、全局に廣がるところの我が生の全體を大觀すれば、他人若くは社會の福利のために盡す德行は、自己の福利と一致して居るのである。といふやうな大識見と大信念とに動かさるゝならば、道德の實行はさまで困難ではない。人間生命の無限を肯定する者と之を否定する者との生活狀態が異なるのは、自然の勢である。前者には後者にない所の永久の希望があり進歩がある。今生に於て播く所は後生に於て必ず穫る所となると信ずるから、自己の心靈を傷け品格を破ることを敢てしないのみならず、何處々々までも積極的に心を磨き德を修めて行く。又、我れ一個の生命のみを愛重してたゝ自己の福利を欲ふ者と、人類を我同胞として社會を我が一大家族と信じて他人の福利を欲ふ者との生活狀態が異るのも、當然の結果である。後者の生活には前者の生活に見えない所の公共の精神があり献身の德行がある。時としては他人のために損失を受け苦痛をなめる事もあらうが、敢て之がために悲觀する事はない。斯かる兩者の差異は平時に於ては別段現はれぬかも知れぬが、何か事のあつた時には現はれる。故に哲學上又は宗教上の觀念が倫理學や實踐道德に影響を及ぼすことは少々ではない。

近代の最も進歩した形而上學や心理學や神學は、有形世界の外に無形世界のある事と、前者は後者のために存在する事と、又前者に於ける困難又は害惡は精神の鍛錬即ち人格の造成のためである事とを示すやうであるが、果して其が眞であるならば、世界の根本性は善であるといふ信念を可能ならしむるからして、道德上の根本的難問は取除かれるのであ

る。世界の根本性が善であると信ずる以上は有形世界に善が增し加はり善が最後の勝利を得ると信ぜられる。更に又近代の進步した宗教や哲學は眞の我は我れ一個の範圍では見出すことが出來ないのであつて、我以外の物との關係上から見出されるのであるといふ事を示すやうであるが、果して其が眞であるならば、個人の利益と社會の利益とは結局一致であつて、個人は社會のために其權能を奪はれず、社會は個人のために其統一を破られず、從つて道德はヨリ圓滿に行はれるであらう。要するに、倫理學又は實際道德は、宇宙の根柢が善である事と、人間の本質に無限の價値がある事とに就いて、深き信仰と感興とを與ふる所の形而上學殊に宗教の力を俟たねばならぬ次第である。

(五)宗教の必要

(五)哲學や心理學や倫理學などは、道德の理論的根據を堅ふするけれども、活潑なる實力を與ふるは不充分であるが、宗教は人の情性と意性とに訴へるので其實力を與へるに特有の効能がある。高尙なる宗教に依れば、他のものに依つては得ることの出來ない道德上の信念と希望とが起つて、之が非常に道德上の能力となる事は、多くの實驗によつて疑ふことは出來ない。故に哲學上又は宗教上の要素を容れなければ、倫理學は科學として立つことが出來ず、道德は事實として行はれない。

道德は不必要であるといふ人はない

第八節　餘論

(一)哲學や宗教は人間の實際生活に取つて不必要であるといふ人はあるが、道德が不必要であるといふ人はあるまい。自身は道德的生活を送らなくても、他の人には送らせたいと望み、自分の行は道德に悖ることを自覺しながら、家族の者には恃らしたくないと願ふのは、普通一般の人情である。

道德は知性の力に依るよりも寧ろ情性と意性との力に依る

(二)惡行は無教育の人に限らず、隨分教育のある人にも現はるゝのは非常に例の多い事實である。彼等は其が惡であることを明かに知りながら敢て行ふのであるから、實際道德は知性の力に依るよりも寧ろ情性と意性との力に依らねばならぬ。

道德は意志に由つて行はれ

(三)道德的生活は道德的意志に由つて行はれ、又其に據つて判斷せられる。意志が良くなれば諸の行爲は良くなり、意志が惡ければ諸の行爲は惡くなる。而して凡ての行爲はその意志によ

且つ判斷せられる

つて眞正の善惡が定まる。幾ら外部に現はれた所の行爲は善くあつても、其行爲の由て來る所の意志が惡るければ善とは云へぬ。又眞心に少しも關係のない行爲は、善とも惡ともいはれない、眞心の働きがあつて始めて行爲の性質が定まるのである。

人間活動の目的の二種類

(四)人間の活動の目的には、大體に於いて二種がある。一種は幸福とかいふ外部的のものであり、他の一種は平和とか價値とかいふ內部的のものである。前者の目的を達するには種々の法則物理的、社會的心理的の諸法則を識つて之に準據せねばならず、過去の經驗を學んで賢明なる識見と巧妙なる手腕とを得なければならぬ。後者の目的を達するには、最高最善の宇宙觀人生觀を得、且つ之に對する意志の態度を純正にせねばならぬ。

倫理學の定義

倫理學は面の生活に直接關係する所から、斯學の一種の定義を立つれば倫理學は人間の生活を了解し且つヨリ眞く誘導するために、經驗の裏面にある原則を明かにする科學である、といふ事が出來ると思ふ。

人間の行爲を測る二方面

(五)人間の行爲は、其が現はす成績と品質との二方面から見ることが出來る。前者は利害を尺度として測るのであるが、後者は正邪を標準として定めるのである。

道德は心と行とが一致を要す

(六)行爲の動機を主とする倫理上の道德と、行爲の結果を主とする法律上の道德とは區別せねばならぬ。前者に於ては、疑もなく善なる意志が中心であるが、然かし其善なる意志が有効のものとなるには、行爲上に何か眞き結果を現はすことが必要である。ただ善なる理想に從ふのみならず、其の理想が何か行爲となつて實現せねばならぬ。即ち意志は客觀世界の法則に從つて

道德は意志と並に感情も知識も眞く働かれねばならぬ

活動せねばならぬのである。此點からいへば、道德は決して抽象的に考へることは出來ないのであつて、具象的實際的に考へる必要がある。詰り、主觀的の善と客觀的の善とが一致し調和するによつて始めて眞正の道德が成るのである。客觀的善を缺いては、啻に自身の調和を失ふのみならず、又宇宙との調和を失ふことを免れない。

(七)單に意志の働きが眞いばかりでは不充分であつて、感情も知識も共に眞く働かねばならぬ。例へば、餘り大事でもないことに執着して却つて大事を忘るゝやうな事は、道德の完全を缺ぐものと謂はねばならぬ。斯かる人の知性又は情性には缺陷があるのだからして、倫理學は之を咎めざるを得ないのである。

道德又は倫理學の位置

(八)以上述べた所を可とせば、道德又は倫理學は人間生活に於いて重要な位置を占むべきである。但し、倫理學は單純な科學ではなくして、他の科學や哲學に俟つ所が甚だ多いからして、正當に其位置を定めるには、諸他の學問との關係を考察せねばならぬ。其位置に就いては第十章に於いて明かにする積である。

第十章　諸科學の關係（卷尾の表と對照せよ）

本章の目的

本章に於いては、諸科學の關係を概觀し、尙ほ之を一覽表に包容して、以て本書の結論とする考である。七章迄は言はば此結論の準備であつて、科學哲學宗教及び神學などの其々の性質と範圍とを預め識つて置かなければ、之を總括することが出來ないから、其れの大體を述べたものであつたが、喀ぼいふべき事が濟んだから、此處には是迄述べた所に照應して、粗略ながら之が結論を試みやうと思ふのである。

特別に諸君に顧びたい事は、私がこれから述べる所を卷尾の表と對照して考へて貰ひたい事である。表と對照しなければ私の話は漠然たる感じがあり、又興味も少ない事だらうと思ふ。

第一節　吾輩の研究の出發點（即ち現實の宇宙）

識られる宇宙と識られない宇宙

吾輩の研究の出發點は、言ふまでもなく現實の宇宙である。此宇宙の中或る部分は比較的に能く識られ、或る部分は唯淺く識られてあるが、全く識られない部分が必ずあるであらうと想はれる。然かし識つて居る部分と全く識り得ない部分との經界線は今明かに立てない、何となれば、

宇宙の全體を識り盡すことは出來ない

近代人間の知力又は活動力は珍らしく進歩して居るので、十年二十年の前に識り得られないと思うた事を今や段々識り得るやうになつて居るからである。但し大體これだけの事は言ひ得られると思ふ、即ち我五官に觸れ我が經驗に入るだけの宇宙は識り得るやうになるといふ事である。

それで吾輩の研究の出發點は、半ばは識り半ばは今識らない所の現實世界であるが、其識らない部分の中識られ得るものがあると想像すると共に、我が五官の能力の性質に照らし又宇宙の性質と範圍とに照らして見て宇宙の全體は識りきれないものだと信ずる。吾々人間が特種の進化をなして靈體となるやうな場合の事は別として、現在の如き形體の人間である以上は、宇宙の幾分又は大部分は永久に識られないかも分らぬ、多分我が經驗以上の部分が何時までも殘つて其に就いて考へる事も出來ないであらう。

吾人の善く記憶せねばならぬ事は、吾人が識つて居ない又識られ得な

存在を識れば其性質の幾分かを識つて居るに過ぎない

いといふ宇宙は盡く想像的であるが、若し存在して居ると實際識つて居るならば、其は曾に存在のみならず其性質の幾分を識つて居るといふ事である。唯その存在だけを識つて其性質を全く識らないといふ事は言へない。其存在を示す所の性質に據つて其存在を識つて居る筈である。漠然として其内容を識らないものは其存在をも知らない、性質を識つて居るから存在を識るのであると謂はねばならぬ。吾輩の作つた表に於いて、一番外部の青色の部分は、即ち吾人が識つて居る所と識つて居ない所又は識られ得る所と識られ得ない所とを合せた現實の宇宙である（現實の宇宙の内には、人間を含む。之は勿論の事であるが、從來、人間界を自然界と區別する習慣があるから、特に此事をいふ必要がある。それで宇宙といつても、自然界といつても、其内には人間の性質や活動や、又人間の産出した文明をも含有するものと知らねばならぬ）。

初代人間の漠然業朴な宇宙觀

第二節　常識に依て經驗、分拆、分類せらるゝ宇宙

初代の人間が物事に就いて思考し始めた時は、最早自分共は朧ろげな世界と人生との中に在ると氣が付いた。彼等は客觀世界が樣々な形を以て自分共の生活を制限し支配し、種々な禍福を下し喜憂を起しつゝある事を實驗した。幾百幾十年の永い間、其境遇に處して段々經驗を積むに從ひ、種々の觀念を起もつゝあつた。斯くて起つた所の觀念は自然であると言つても宜しい、さうしてこの自然的觀念が永い間彼等に滿足を與へたやうである。其等の觀念は、今日から見れば、偶然的のもので實證も出來ず、又非常に矛盾の點が多く、時としては實際と非常に違つたものであるが、其は當時の人間の思想が頗る不規律であり非組織的であり非理論的であり又た局部的であつて批評力は殆んどなかつたのだから、

亦止むを得ない。勿論、彼等は自己の經驗を或る形式に於いて分析し類別し而して客觀世界を解釋せむとしたに相違なく、又これに依て或る程度まで自己の境遇の何たるかを考へ、且つ幾分か其境遇を支配したので、自己の幸福を多少獲たに相違ないが、然かし斯かる知性の働きは自然的であり、大方は無意識的であり、無論批評的でなかつた。自分は何を爲しつゝあるか又は何故に斯く考へて居るかを識らなかつた。斯樣な種類の思考を今日の我等は稱して常識的觀念といふ。

常識的觀念

併しながら、今日の我々が其時代の觀念を輕蔑する理由はない。蓋し、文明上の最も大切な發明は其時代に於いてせられた。例へば言語の發明の如きは著しいものであつて、言語を造るには分析的總合的また抽象的な知性の働きが隨分なければならぬ。其の他、火の發明や、日用物品の製作術や、又は道德上の觀念や、宗教的生活などは、皆な其時代に起つたものである。實は其時代の人間の興した知識は、今日我々が誇る所の文明の土臺であると言つて決して過言ではない。

然かも我等は彼等の觀念を輕蔑すべきではない

所で、段々と人間の經驗が增進し知性が發達し分析的總合的思想力が加つて來るに從ひ、就中優れた或る少數の人が、右の常識的觀念の中に道理上矛盾の點があることを發見して之を以て滿足することが出來ないので、尙ほ細かに思考し始めた。一たび此處に注意して來ると、段々自然界に關する人間の知識の中多くの不確實なるもの又は全く偶然的なるものがある事を悟り、之を改良せむと力めるやうになつた。斯くて幾多の時代を積み重ねつゝ改良に改良を加へた結果、漸く今日の學術的知識を得るに至つたやうな次第である。今日の我々は、我々の先祖よりも己が境遇を善く解し、先祖よりも遙かに廣く且つ深い經驗を有し、更にヨリ精細にヨリ完全に其境遇其經驗の諸要素を分析し類別し得るのみならず之を支配することが出來る。斯樣な次第で、今日進步した人間に取つて、所謂常識は不信用なものとなつた。常識が示す偶然的部分的の知識に滿足せずして、反省的總括的の經驗を基礎とする精確な知識を要求するやうになり。此知識を以て我境遇をヨリ善く支配し我生涯をヨリ豐富

常識的觀念に滿足せずして學術的觀念を起した

にせむと力むるやうになつた。

故に私の作つた表に於いては、常識的知識に就いて別段注意を拂はないで、たゞ外部にある赤色の部分を以て之を示す。而して外界が吾人の心理性に刺戟を及ぼす事を示すに、其赤色の部分に矢の印をかけて置いた。即ち、其最初の刺戟が常識を起す、其刺戟は無數であつて之が主觀的の思想や感情や意志などを喚び起すのである。序での話であるが、今日に於いても大多數の人は、依然として昔しながらの常識狀態に止まつて居るので、此狀態を超越することは中々容易の事ではない。種々の學問によつて深く宇宙萬有を研究し、又よく己が腦髓を鍛錬して精確な思考力を得ねばならぬから、世の行末までも多くの人間は常識の圈內に止まるであらうと想はれる。

表中の赤色の部分

表中の矢の印

常識的觀念は今日にもあるし將來も亦永久にあるであらう

第三節　批評的思想に依て經驗、分析、分類せらるゝ宇宙

懷疑的思想

常識的觀念に對して不信用の念を起す時は、屢懷疑に陷る。其の懷疑心が深くなると、活力を殺ぐから、實際生活の上に少なからぬ禍害を及ぼすが、精密な觀念を得むとするには、幾分か懷疑心を起さゞるを得ない。この懷疑的思想又は批評的思想の潮流は、もはや二千年に餘る永い歲月の間人間歷史の一方に流れつゝあるが、二三百年この方は新たなる時代に入つたのである。それで二千有餘年の間多くの階段を經て今日に至つたのであるけれども、私は此處に於いて其多くの階段に就いては語らず、唯近代の最も進步した批評的思想だけを表に示すばかりである。

批評的思想は凡ての思想經驗の主觀的のものと見做す

この批評的思想に於いては、凡ての思想と經驗とは主觀的であると認める。例へば天上の日星に關する吾人の思想經驗は悉く主觀的であるとする。が然かし、批評的思想が第一に識別する事は、吾人の思想に二種ある事である。即ち甲は何時でも客觀物を指示する性質を有する思想であり、乙は斯かる指示なくして全く主觀的なる思想である（所謂指示（レフェレンス）とは單に純粹な主觀的

但しその主觀的思想に二種類ある

の觀念でなくして外界の實在物）。例へば私がこのやうに鉛筆を持つと、我心に
な指示する觀念のことである
之を持つて居るといふ觀念があり、また此鉛筆に就き我手に就いての觀
念が我心にある。私が識つて居る鉛筆は私の心に在る所の觀念に外なら
ないが、然かし私の心に在る鉛筆といふ觀念に取つて無くてならぬ一つ
の要素は、其實物は我心に在るのではなくして我が心以外に在るといふ
事である。即ち我心內の觀念は客觀に存在する物に關する思想的代表に
過ぎないと云ふ要素が附屬して居る。批評的に考察すれば、總ての觀念
はこの指示的要素が附屬するか又は附屬しないものである、若し之が附
屬して居るならば必ず心外の物があると認めるが、若し之が附屬して居
ないならば、心外の物はなくして其は一つの觀念に止まるものであると
普通に考へられる。例へば、或る人々は半人半馬の生物があるといふ觀
念を有つて居るが、其には客觀的指示の要素がないから全く主觀的のも
のである。幼稚な人間殊に子供は、この指示的要素の一事に注意せずし

幼稚な人間は總て客觀的に考へ易い

て縱令この要素がなくても總てを客觀的に考へ易い。常識の人も主觀客
觀の區別を立てないではないが、批評的思想のある人ほどに明かに又自
識的にこの區別の必要と意義とを感じない。

私の表に於いて、白色を以て現はす廣い部分が凡て批評的思考の範圍
である。この批評的思考の結果、今日は非常に多端の類別が生じて來て、
學者等は之に據つて現實世界を益々精確に深淵に認識し且つ解釋せむと
力めて居る。表に於いてしるした青色の部また赤色の部からかけて白色
の部に達する所の矢の印は、批評的思想を喚起する所の外界の直接の刺
戟と常識の刺戟とを示すものである。批評的思想の人は常識者が受ける
刺戟より深く且つ廣き刺戟を受けて、種々の心理作用を引出す、從つて
宇宙萬有に關してヨリ深く又ヨリ廣い經驗と解釋とを有つ。

表中の白色の部分

矢の印

批評的思想の人は常識者よりも刺戟を受けること事に廣く且つ深い

批評的思想は右に述べたやうに、觀念に伴ふ所の客觀的指示の有無を
識別するが、其指示（レフェレンス）はたゞ觀念に限らずして總ての經驗に伴ふ。或經驗

客觀的指示の有る經驗と無い經驗

は心外の物に關係するが或經驗は心中に止まる。私の表に於いて此區別を示すために、左方に一筋の赤線と二筋の黑線とを以てした。但し常に記憶すべき事は、客觀といふ言葉を用ゐても、其は外界の事物に關する我が心内の觀念に過ぎないといふ事である。

第四節　批評的思想に依て識別せらるゝ客觀世界

客觀的觀念の五種類

批評的思想が主觀と客觀との區別を立てゝから、總ての客觀的指示を有する觀念（又は經驗）、即ち啻に主觀的の觀念に止らずして外界に實在する客觀的事物を指示する所の觀念を成るべく單純に而かも成るべく完全に思考し且つ表言するために、五つの根本的類別をする。其は則ち時間、空間、死物界、生物界、人間界といふ事である（勿論斯樣に五つに分けるのは唯人間の永い間の經驗な現はすに便利なからである）。空間は靜止的なもので萬物の存在し且つ活動する場所と考へられ、時間は川の水の如く流動的なものと考へられ、之が爲めに萬事の生起があり萬物の成長があり歷史の進行があると考へる（勿論此の時空觀は普通の觀念であるが、然かし批評的に見る必要があるから、其は後で認識論の場合に述べやう。）。死物界は生命を有つて居ない凡ての物と其作用とを含有する概念であり、生物界は凡て生命を有する者に就いての概念であるが、其中人間は特別の立場から觀考せねばならぬから別の種類とした譯である。

人間を特種の生物として研究する所以

この生物界には動植物全體は勿論、人間も其身體に關はる範圍に於いて生物界の中に入れて研究するのであるが（例へば身體の生理的作用又は其作用の樣式など）、然かし、人間を三十五萬種の動物の中から抽き出して特別の階級に置くのは、之が動物の一種類であるに拘はらず特有の勢力を有するからである。此人間の經驗は非常に豐富で且つ多方面であるから、人間を研究するに就いて澤山の科學が生ずる。凡そ幾程の方面から人間を研究すべきものかといふと、其は實に多いことであるが、私の表に於いて示すやうに、大體

人間の方面は五つに分けて研究するのが簡便であるとの疑問

予の分類法に關する第一の疑問

予の表に於ける分類上の順序

之を五つに分けるのが簡便であらうと思ふ。此の分け方に就いて或人は問ふかも知れぬ、何故國家や家庭や教育などを第一種のものとしなかつたか、又人間は言葉を語るものとして別に考へる必要はないかと。然かし第四章に於いて述べたやうに、人間知識の類別表は之を造る人の興味に由るもので、唯其人に取つて便宜な法を用ゐるの外はない。それで私の作つた表に於いては、凡て左の方に掲げ出した事柄に應じて右の欄へ順々に書き現はす方法を取つた、之を倒まにいへば、凡て右方の欄に書出さうと思ふ事柄は則ち左方の欄に掲げ出した項目に準據し並行してゆくやうな方法であるから、表の通り寧ろ五つの項目に分けるが簡便であらうと思うたのである。即ち(一)社會的(二)心理的(三)美術的(四)道德的(五)宗教的としての人間とするのが、私に取つては便利であるからである。そこで又或る人は、既に社會的といへば其中に總ての方面を包容して居るではないかといふかも知れぬが、其も矢張り見方によるので、社會學者で

予の分類法に關する第二の疑問

予の分類法に關する第三の疑問

あれば、社會學は總ての學問を包括するもので人間の心理性でも社會學の一部と見ることが出來る。又心理學者であれば、人間生活の全體を心理學の中に包容し、理的美的道德的宗教的の活動みな其中に在ると見做されぬでもない。けれども、其樣に一纏めにしないで別々に人生の各方面から研究することは、必要でもあり利益でもあり之に由て人間に關する新しき光明も出て來る。例へば道德的若くは宗教的の方面から人生の現象を見ると、種々興味のある新しい知識を得るのである。兎に角、私の表の全體は右の五つの方面よりする觀察研究を本としたものであるといふ事を豫め承知して戴きたい。

爰にモー一つ該表に就いて起る疑問は、どういふ譯で該表に示すやうな順序を取つたのであるか、例へば宗教を上に置いて社會を下に置いたのは何故であるか、審ろ心理性を根本的なものとして社會の前に研究すべきではないか、心理性がなくして社會的又は美術的のやうな外部の現

象は起らないではないか、といふやうな疑問が起る。この排列順序の問題は、餘程込み入つたもので頗る精密な思考によらなければ明かになつて來ないものであるが、極簡單にいふと、私の採つた順序は其表の全體の主意から割出したもので、殊に第四章の終りに述べた所の知識類別上の原則を應用した積りである。即ち劣等なものから高等なものに一般的のものから具體的なものに外部的なものから內部的なものに進んでゆくのであつて、此原則から考へ又全體の意義から考へると、私が採つた順序は正當であるやうに思ふ。然かし之が正當であるといふことは、唯それだけの說明では充分に分らぬのであつて、表の始終をよく吟味して見なければならぬ。

予が分類上の主義

客觀的現象を五種類に分ける理由

吾人の觀念の中、客觀的指示を有する物を右の五種類（時間、空間、死物界、生物界、人間界）に大別する譯は、其々の種類內の事物は互に類似點を有し離すべからざる關係を有するからである。例へば太陽と星とは一方から見れば非常に相違して居るけれども、批評的に見れば兩方の差異點よりも類似點が多くあるから同種類となし、生物の間には種々樣々の差異があるけれども、無生物に比して類似の點が著しいから同じ種類に包括するが如きものである。時間空間に關する觀念に於いても同じ道理であつて、時間空間と事物とは全く違つて居ると考へられ、太陽や他の物質と混同して考へることはないから別の種類とするのである。諸ての學問を總括して見ると、この五種の區別は必ず立てられて居る、之は多くの經驗に基いて出來た科學及び哲學の結果を明かにするために立てねばならぬ區別である。私の表に於いては、時間を流動するものと見て縱に書き、他の四種類（空間、死物、生物、人間）と區別を現はす爲には橫の長い黑線を以てした。

表に於ける時間の範圍

常識者は、右のやうに客觀世界を五種類に分けることを否定しないのみか、實は此の類別法は常識に由來するものであるが、この常識的思想と批評的思想との差別は、時間空間の究極的性質の問題に關はるとき始

常識的思想と批評

的思想との差別點

めて起る。時間空間(又は事物)は絶對的の存在を有するものである、換言せば人間の心のみならず神の心より離れても尙ほ獨立に存在するものであると觀るのは常識の見解であるが、批評的思想はこの見解を否定する。

外界に關する觀念に就き常識と批評的思想の見解

常識は、客觀世界に關する我觀念は凡て出來合ひの儘既成品として外界から與へられたものであり、從つて其觀念は外界の實物を精確に表示すると信じて少しも疑はないが、批評的思想はさうでなくして、其等の觀念は心の構成するものであると考へる。尤もこの構成的觀念には客觀的の基礎がある事を認める、即ち外界からの刺戟に由て我心の作用を引起して觀念を構成したものであり、又其刺戟に由て我心が客觀世界を己が衷に構成するには必ず從はねばならぬ心內の原理原則のある事をも認める。けれども、人間が經驗し觀念する所の所謂客觀世界なるものは到底心の產物たるを免かれない、心の作用を離れては人間の識り得る客觀世界は有り得ないのである。既に吾人が觀念する世界が我が心的所產であるならば、其世界を分拆し識別する働きは心の作用であることは言ふまでもない。此事は常識者の最も承認し難いことである、否な之を承認する學者も實際少ないかも知れぬ。が然かし認識論の根柢を穿つ所の學者は皆な此處に到達せざるを得ないのである。

客觀世界は心の所產である

第五節　科學上の三大種類と其の一般的性質

第二章に於いて、科學といふ言葉に狹義と廣義との別があることを述べたが、本節に謂ふ所の科學は、其廣義であつて精確な組織的總括的知識を意味する。而して凡ての科學を(一)叙述的科學と(二)解釋的科學と(三)應用的又は規範的科學との三種に別けることを以て最も適當と考へるのである。

科學の三種類

(一)叙述的科學

(第一)叙述的科學は有りの儘の事實を研究するもの即ち現象を正確に識

らむとするものである。此研究に就いて近代の科學者が重んずる事は確實なる觀察と實驗とである。何よりも先きに客觀的現象（物又は事の現象）に依據し、さうして其現象の相互の關係を明かにして成るべく統一的組織的の知識を獲むとする。物事の前後の狀態、其連絡、其關係などを確かめ、而して自己の確めた事實をば最も簡單な文句や法式を以て叙述する。其文句なり法式なりを稱して自然界の法則といふ。此法則を本として過去に有りし事を成るべく明かに識らむとし、又將來有らむとする事を成るべく確かに豫知しやうとする。

科學者は無意識的や直覺に頼や假定なる用ゐる

然かし科學者が科學的研究の間には、直覺的に得た所の觀念を善く用ゐるが、普通の場合には其觀念を意識せず、縱し意識しても是に就いて別に批判しない。又種々の見解を立てる時に、理性上の原理原則をも善く用ゐるが、其等の原理原則は何處から來たものか、又其權能は果して如何なるものであるか、といふ事に就いて別に問ふ所はない。或は過去と將來との事を研究するに種々の假定をするが、其を假定とは考へないで自明眞理であるかの如く使用する。而かも己が科學研究をして價値あらしむる所のものは、其の觀念其の原理原則其の假定に在るといふ事に餘り氣が付かない。

自然科學のみが科學ではない

この第一種の叙述的科學の中に、我々が普通にいふ所の自然科學がある。或人はこればかりが科學であると考へ、他のものは純正の科學でないといふが、左樣にいふ人は比較的に少數である。科學（サイエンス）の元語は Scio であつて唯識るといふ意味であるが、近代の人は、科學は關係のない偶然な事實即ち常識的の知識を指さずして、組織的合理的に確實で相互に關係のある知識のみを指すものとする。此意味で科學の中に哲學も神學も容れる。それで嚴重にいふと、自然科學は叙述的科學の中の一部に過ぎない、さうして叙述的科學は人間の科學的知識の中の一部に過ぎないのである。

科學の意義及び範圍

叙述的科學の性質

叙述的科學は比較的に客觀的である。心理上の現象を研究する時にも、矢張り之を客觀物として觀察し、出來得るだけ實驗的に之を調査し、其現象の共存と續起と作用とを確かめ、また一般的の法則を以て其現象を言ひ現はし、此法則に據つて將來の現象をも豫見し、從つて其現象を支配せむとするのである。

叙述的科學は歸納法と分析法とを用ゐる

叙述的科學の發達上よく用ゐらるゝものは歸納法である。而して、一見類似して居る物事も仔細に之を視れば差異があるから、其の差異を明かにする爲に分析法を類りに用ゐる。最も物事を類別するには啻に差異點のみならず類似點を見ればならぬから總合法をも用ゐるけれども、主もに分析法を用ゐるのである。

科學者が用ゐる解釋の種類

科學者は又觀察した現象に就いて或意味の解釋を下だし、如何なる理由で現象が斯く一定の形式を取つて現はれて來るかを尋究するが、然かし批評家のいふ通り、解釋には三種類がある、即ち類別的解釋と論理學的解釋と因果的解釋とである。而して叙述的科學の解釋法は、第二章の終りに述べた科學主義（サイエンティズム）の意味の解釋法即ち類別的解釋法であつて、他の二種の解釋法は解釋的科學に委れるのである。

(二)解釋的科學

(第二)解釋的科學は、第一に「如何にして」と「何故」との二問題に對して解答を與へむとするものである。此解答を與ふるに就いては、事實現象の中に含有する合理的原理を發見せむと力める。故に此種の科學は主觀的である、客觀的に見解を下さず、物の內に入つて其內部の性質を了解せむとする。此種の科學は其目的を達する爲に、論理學若くは合理的判斷を善く用ゐる。又直覺的觀念も善く用ゐるが、其は直覺的に得たものであるといふ事を自識し、從つて其觀念を判斷しその價値を評定する。叙述的科學は事物及び其作用を說明するに類別を以てするが、解釋的科學は論理的關係と因果的關係に據つてする。尙ほ又、後者は自身が使用する諸觀念（例へば時間、空間、原因、結果、勢力、物質、心、主觀、客觀、分量、性質など）の本源と價値とを質す。事實を確めることは叙述的科學に一任するが、其事實を受取つた上で之を鋭敏な批評にかけ深く其性質及び其理由を推究する。是故に叙述的科學は大抵歸納的であるが、解釋的科學は歸納的であると共に演繹的である。

(三)應用的及び規範的科學

(第三)人間は啻に物事を觀察し思考し又は說明するのみならず、又物事

を願望し或は實行する所のものである。蓋し人間は非常に複雜な人格性を有する者であつて、理的性質と共に情的及び意的の性質を具するから、未發の事物を思考する能力を有するのみならず、之を欲求し又之を獲得せむとして活動する。委しくいへば、人間は自己の性質全體に滿足を與へむために、先づ第一に事物を觀察し、次に之に就いて思考して得心するだけの知識を得むと欲し、次に之を利益若くは快樂のために利用しやうと力め、次に得た所の知識と能力とに依て自己の望む所のものを產出するのである。

知識を求めるのは大抵何かの實益を得る爲である

或意味と或場合とに於いては、知識若くは眞理を求めるのは唯知識若くは眞理其物のためであつて別に實際の利益を得る目的でないと言つて差支ないが、大抵は何かの實益を得る手段であり準備である。勿論時としては、其知識なり其眞理なりを實用する目途もなくて單に之を求める人の好奇心から出たものもあるが、然かし一方からいへば之も亦一種の實用である。即ちその好奇心に滿足を與へやうといふ實用的目的がある

人間の理想若くは計畫には二種類ある

のである。

そは兎も角、批評的見解からいへば、人間の理想若くは計畫に二種類ある。第一種は主もに客觀的であつて物理界に關する。物理的狀態を都合好くするために叙述的又は解釋的の科學に由て得た所の知識を用ゐるので、茲に應用科學なるものが起る（例へば應用化學は、物理に關する新らしい事實の發見や又は事實の說明を目的とする知識を實際に應用することを目的とするものでなくして、唯純粹化學の得た知識）。今遠所の泉から自家の臺所まで水管を引くと、從來の一方ならぬ骨折に比して誠に容易簡便に而かもタップリと泉水が得られるが、人間の產出する文明殊に發明の多くはこんなものであつて、要するに物理界に屬する應用的知識の結果である。

應用科學

併ながら、人間が立てる所の理想又は計畫の或ものは特別に權威があることを感じ、其目的は利益や快樂に在らずして寧ろ自身の品格上若くは生活上高尙なる一種の性質を獲得するに在ると考へる。而して其理想

規範科學

又は計畫を實現してもしなくても同じ事だと思はないで、必ず實現しなければならぬと感ずる。例へば、國に對し君に對し親に對し社會に對して義務の念が起り、彼事此事に就いてせねばならぬ或はしてはならぬといふ觀念が起つて、自由勝手に之を曲げることは出來ない。其所は物理界に關する理想又は計畫と全く性質を異にし、實現に努力しなければ自己を否定し又は責罰する。そこで自然に思想行爲の規範が出來て、其れに照らして自己の所行を決定し又は所行の是否を判斷する。其規範の性質、起源、又は實際生活に於けるその位地や、又はその權威の由來や、又は此規範を了解する方法などに就いて研究する學問をば、稱して規範的科學といふ。要するに斯學は、人間の動的生活の大部分を支配する所の理想及び動機を研究する所の科學である。

兩科學の異同

應用科學と規範科學とは、一面から見れば隨分違つて居り、他の一面から見れば隨分相似て居る。其相違點は目標の性質に存するのであつて、此點からいへば前者は低いもの物質的のもの自然界を支配せんとするものであるが、後者は高いもの心靈的のもの己が本性中の高尚な部分を發揮せむとするものである。然かも兩方とも人間の理的情的意的性質に由て起るものであつて、同じく將來を目指し（今在る物を目的とせずして未だ在らざる物を目的とする）、同じく動機に訴へ、同じく價値判斷を用ゐ、同じく創造的のものであり、又同じく理想とするものを實現する方法を研究する。故に私は兩科學を一つの欄内に入れて差支ないと思ふが、物理的のものを下に置いて規範的のものを上に置くことにした。

兩科學の發達に由て客觀的文明は進歩す

應用的若くは規範的科學の發達の程度に應じて、人間は益々自然界を支配し、自己を支配し、從つて客觀的文明は益々進歩しつゝ人間の生活は益々豊富になるのである。

私の表に於いては、以上大體述べたやうな叙述的解釋的應用的及び規範的の三種の科學を縱に並列して、各科學の特質を赤色文字に示してあ